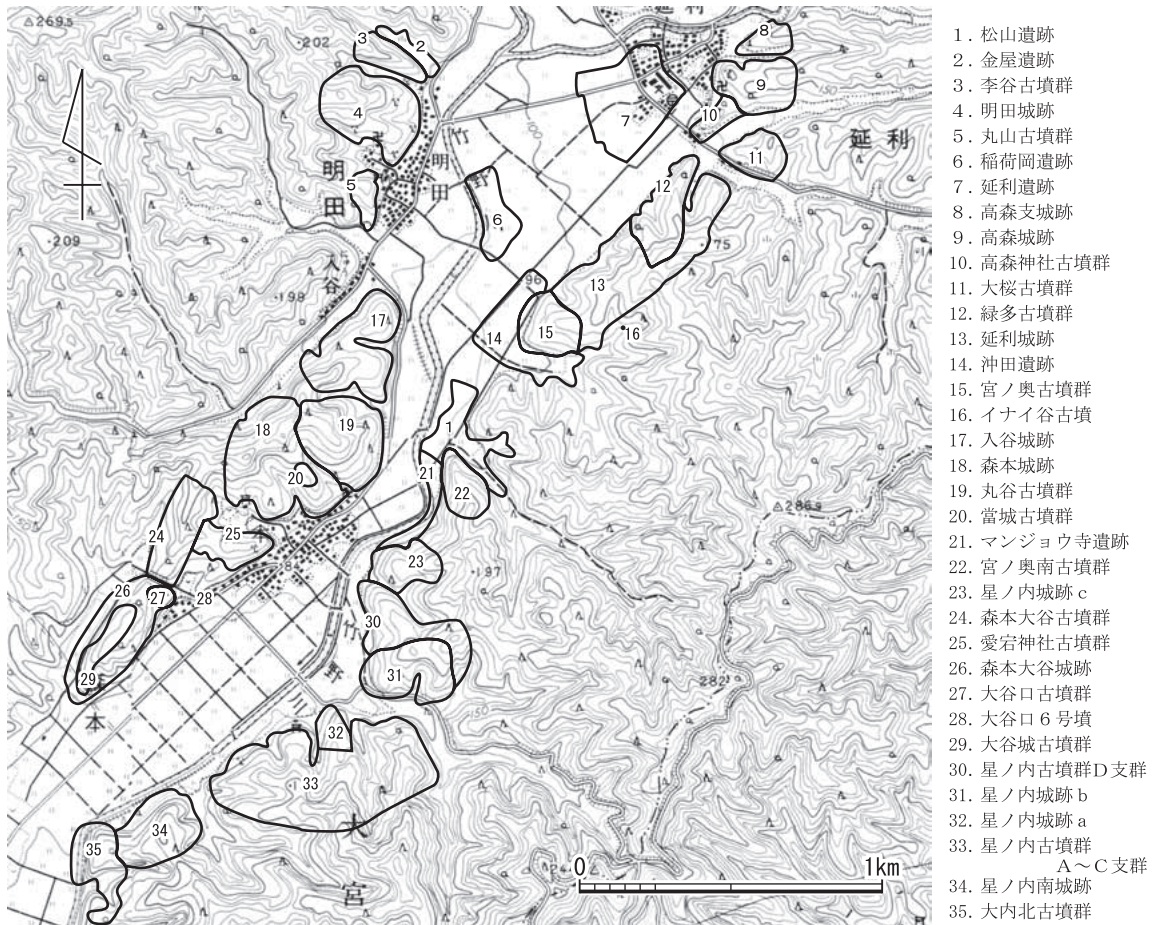


# 1.松山遺跡第4次発掘調査報告

## 1. はじめに

今回の調査は、京都府農林水産部が実施する平成22年度府営経営体育成基盤整備事業森本地区に伴い、京都府丹後土地改良事務所の依頼を受けて実施した。

松山遺跡は、京丹後市大宮町森本に所在する。竹野川左岸の低位段丘上に立地する縄文時代から弥生時代の遺物散布地として、遺跡台帳に登録された周知の埋蔵文化財包蔵地である。当遺跡では、昭和初期に小規模な区画整備が実施されており、その際に縄文時代晩期の注口土器が出土している。これは、工事に伴って表採された資料であり、詳しい出土状況等は不明であるが、小型ながら精緻な造作で、当該期からの生活の痕跡を示す資料として早くから注目された遺物である。しかし、その後、当遺跡においては、本格的な発掘調査が実施されたことはなく、その実態について詳しいことは不明であった。そのため、上記事業の実施に伴い、平成21年度に京都府教育委員会並びに京丹後市教育委員会によって、遺跡の範囲・内容を確認するための発掘調査が実



第1図 調査地及び周辺遺跡位置図(国土地理院 1/25,000 峰山・日置・四辻・宮津)

施された。

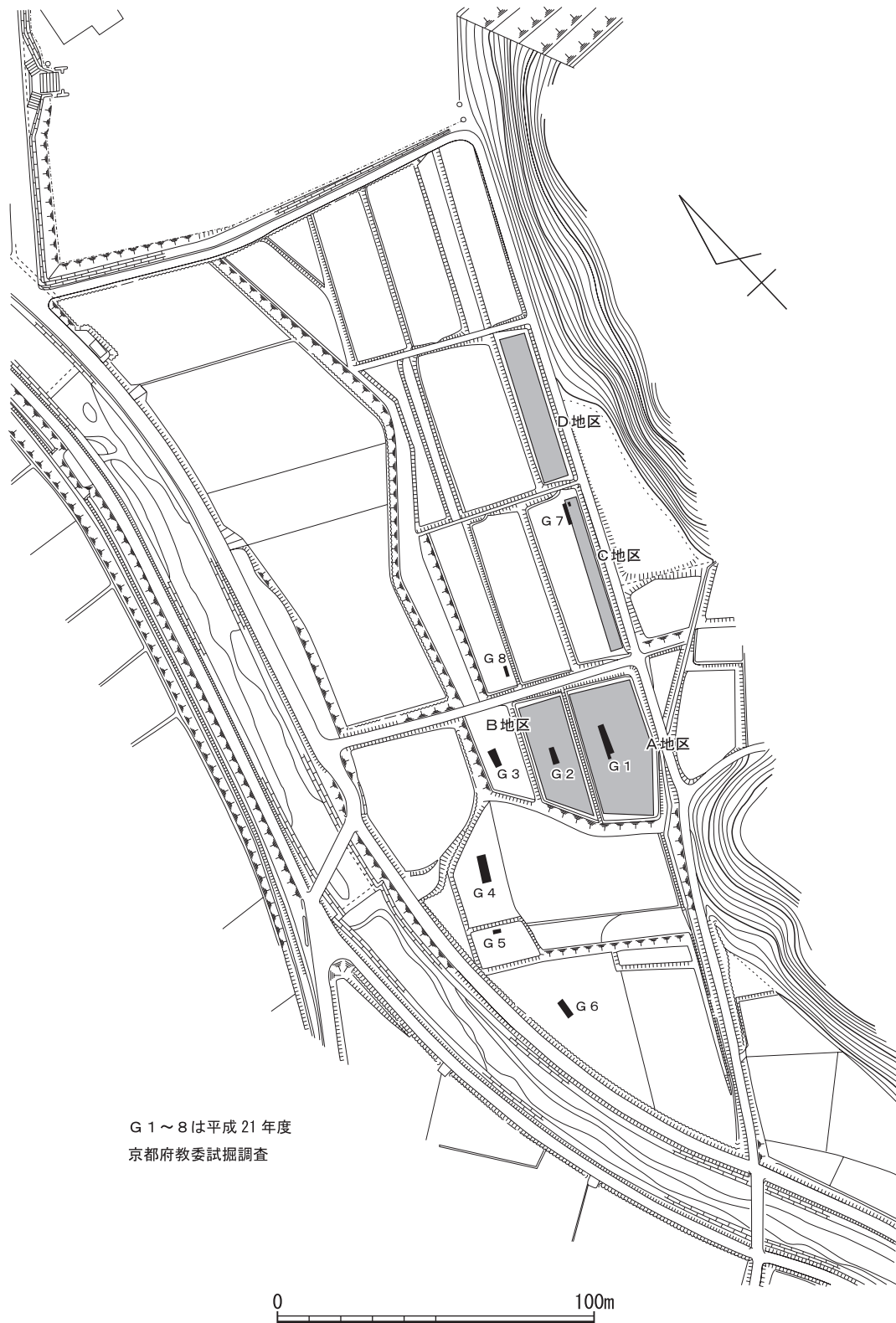
第1・2次調査は京丹後市教育委員会により、第3次調査は京都府教育委員会によりそれぞれ実施されている。<sup>(注1)</sup>第1次調査は松山遺跡の南側、竹野川氾濫原と想定される低位部において、第2次調査は北側の丘陵裾部と第1次調査と同様に竹野川に近接する低位部において、それぞれ調査区を設定して行われた。調査の結果、低位部において遺跡の兆候は確認されなかったが、丘陵裾部においては、1.0mに及ぶ盛土層の下に、削平を受けながらも遺物包含層及び遺構面が残存することが確認されている。また、第3次調査は、遺跡のほぼ中央部付近において7か所(第2図G1～5、G7・8)にわたって試掘調査が行われ、竪穴式住居跡、流路跡等が検出され、縄文時代から近世に及ぶ遺物が出土している。なお、この際には京都府教育委員会により、マンジョウ寺遺跡においても同様に遺跡の範囲・内容を確認するための発掘調査(第2図G6)が実施されている。

今回の調査対象地の選定は、上記の第1～3次調査の成果に基づいている。

松山遺跡の立地する竹野川上流域の森本盆地には、多くの埋蔵文化財包蔵地が所在する。南側に隣接するマンジョウ寺遺跡では、多くのミニチュア土器が表採されており、いずれもが手捏ねの粗製品であると報告されている。<sup>(注2)</sup>竹野川に面した立地をしており、水辺で執り行われた祭祀に関連する遺物と評価されている。南側丘陵上には宮ノ奥古墳群が所在する。方墳3基が完存しているが、これまでに発掘調査が実施されたことがなく詳細は不明である。また、大宮第三小学校をはさんで北側に所在する沖田遺跡では、平成12年度に今回と同様には場整備事業に伴って発掘調査が実施されており、縄文時代から中世にかけての遺物が出土している。周辺部において、各時期の集落が断続的ではありながら営まれていたことが判明した。<sup>(注3)</sup>沖田遺跡の北西側には稲荷岡遺跡が所在する。当遺跡は、平成9年度に大宮町教育委員会(現京丹後市教育委員会)により実施された、沖田遺跡の範囲・内容確認調査により新たに確認された埋蔵文化財包蔵地である。<sup>(注4)</sup>その調査の際には、弥生時代中期の遺物と、流路に伴う護岸施設等が検出されている。また、北東1.0kmの地点には延利遺跡が所在する。小規模なグリッドによる試掘調査が実施されているのみで、顕著な遺構は検出されていないが、弥生時代前～後期、古墳時代後期の遺物が出土している。竹野川左岸の微高地上には、当該期の集落が存在するものと推定されている。<sup>(注5)</sup>

今回の調査は、ほ場整備事業に際し切土施工が計画されている地点のうち、先の範囲・内容確認調査の結果、遺跡に影響が及ぶ地点において実施した。事業地内に4か所の調査区を設定し、南からそれぞれA～D地区とした。なお、今回の調査は第4次となる。また、同事業に関連して、C地区の北西に隣接する地点において、京都府教育委員会並びに京丹後市教育委員会が、それぞれ発掘調査を実施しており、京都府教育委員会が第5次、京丹後市教育委員会が第6次である。調査成果に関しては、各調査実施機関の刊行する調査報告書を参照願いたい。

平成22年9月23日には調査成果に係る現地説明会を実施した。降雨の中、62名の参加を得た。また、同月28日には、京丹後市立大宮第三小学校の児童に対し、京都府丹後広域振興局地域づくり推進室と共同で遺跡発掘体験学習会を実施した。当日は19名の児童が熱心に学習した。



G 1～8は平成 21 年度  
京都府教委試掘調査

第 2 図 調査地区配置図

本報告は奈良と黒坪一樹が執筆した。なお文責は文末に明記した。使用した国土座標は世界測地系である。土層の注記には『新版標準土色帖』を用いた。

現地調査に当たっては、京都府教育委員会並びに京丹後市教育委員会の御指導・御助言をいただいた。また、地元森林組合、各自治会には御高配を賜った。記して感謝します。

現地調査責任者 調査第2課長 肥後弘幸

調査担当者 調査第2課課長補佐兼調査第1係長 小池 寛

同 第2係長 森 正

同 主任調査員 引原茂治・戸原和人

同 調査員 奈良康正

調査場所 京丹後市大宮町森本地内

現地調査期間 平成22年5月25日～10月28日

調査面積 1,850㎡

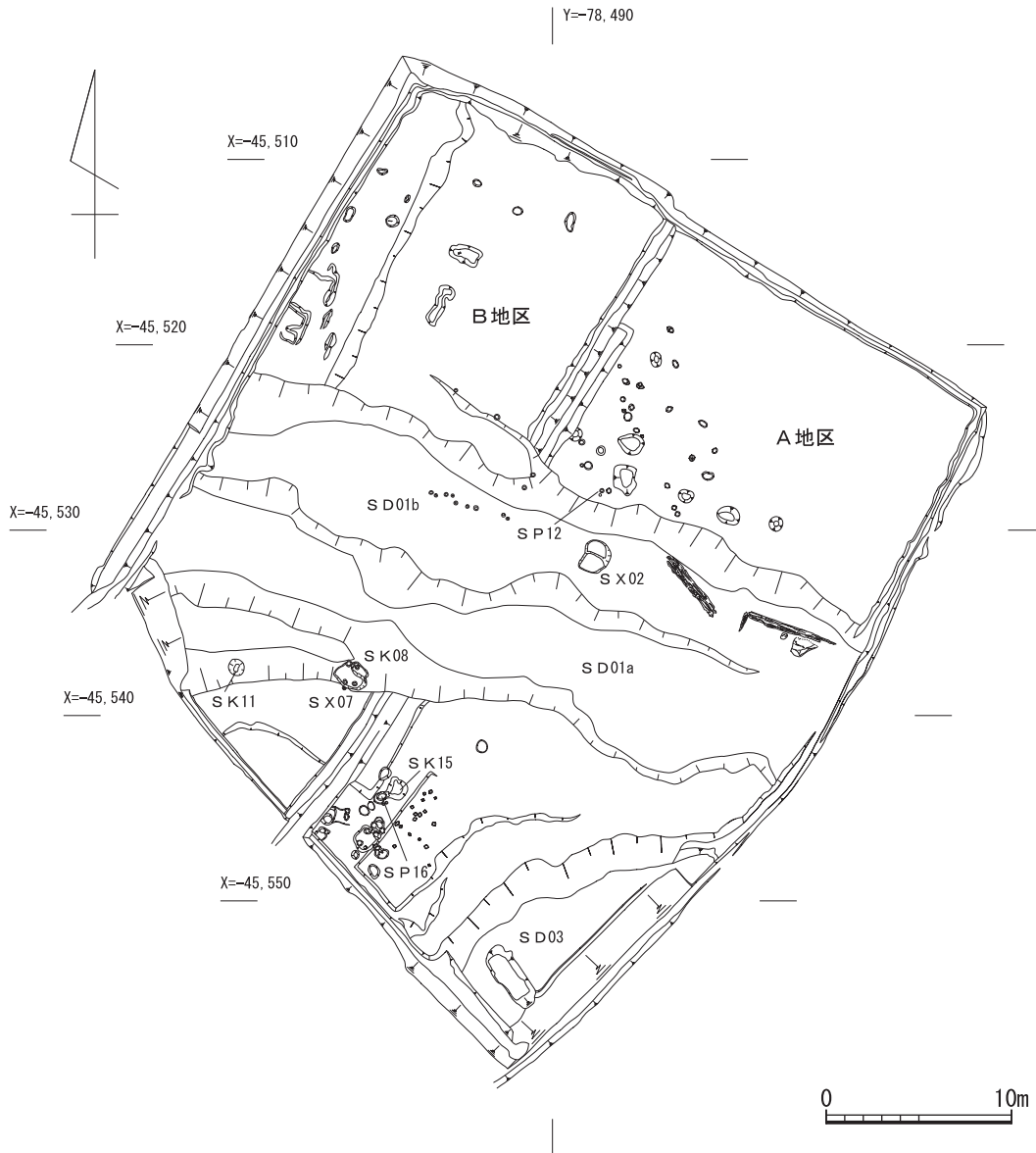
## 2. 調査成果

### 1) A地区

A地区は、京都府教育委員会の試掘調査G1の調査成果に基づき設定した。府教委の調査では、遺構を2面にわたって確認しており、上層では床土直下で各時代の遺物を含む流路、土坑、柱穴等を検出し、下層では古墳時代の竪穴式住居跡が確認されている。当該水田は全面にわたって0.92mの切土施工が計画されているため、筆全体を対象として調査を実施することとされた。調査地点の現標高は91.12mを測る。調査区は、設定に際し既存の畦畔に規制されたため、変則的な五角形となった。なお、調査の最終段階では、隣接するB地区へと遺構が続いていたため、該当部分の畦畔を取り払って調査を実施した。調査面積は751㎡である。

調査着手に先立ち、まず、重機により耕作土の除去を行った。その後、土層を確認しつつ後世の客土の掘削を行った。調査区北側では耕作土、床土直下で礫を多く含む明オリブ灰色砂質土となり、柱穴等の遺構を検出したため、この上面で重機による掘削を終了した。また、中央付近では、人力による精査を行った結果、溝S D01や土坑S X02を検出した。溝S D01は、京都府教育委員会が実施した発掘調査により、その一部が確認されていたもので、今回の調査によりその全容が判明した。溝の両肩部には黒褐色シルトが堆積しており、ベース面との強いコントラストによって、明瞭に把握することができた。幅はおよそ9.0～15.0mを測り、調査区内ではおよそ20mにわたって検出した。東壁際で行った断ち割りにより、2条の溝が切り合っていることが判明したため、南側をS D01a、北側をS D01bとした。調査区の南半部では、東端で溝S D03を検出した。南西部の平坦面では土坑、柱跡を検出した。

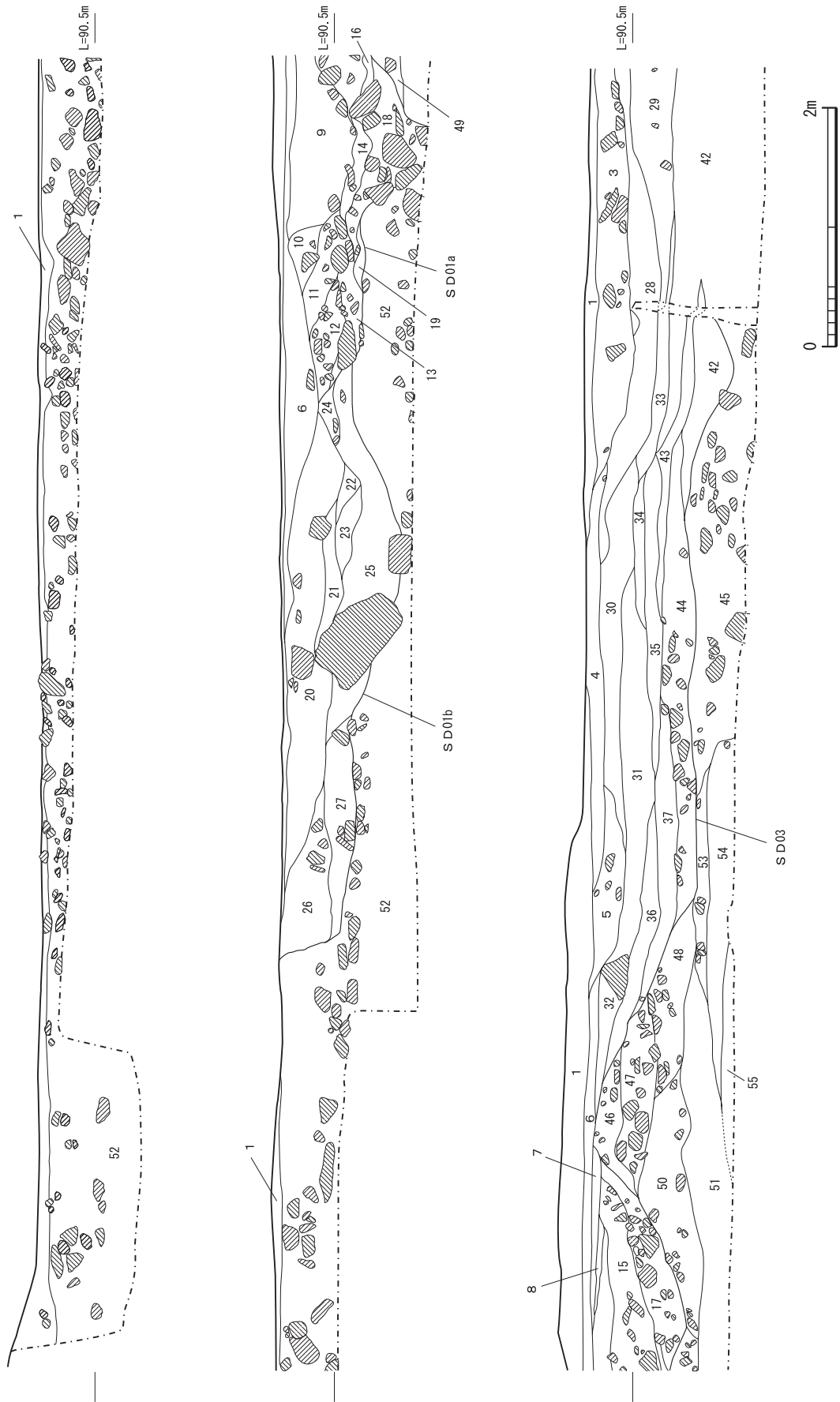
溝S D01 a 東端で約5.0m、西端で約12.0mの幅をそれぞれ測る。底面のレベルは東端で90.13m、西端で89.59mとなっていた。埋土は全体的に礫を多く含み、北半では褐灰色砂質土の堆積を基本としていたが、南半では浅黄色・灰黄褐色・灰オリブ色砂質土が堆積しており、肩



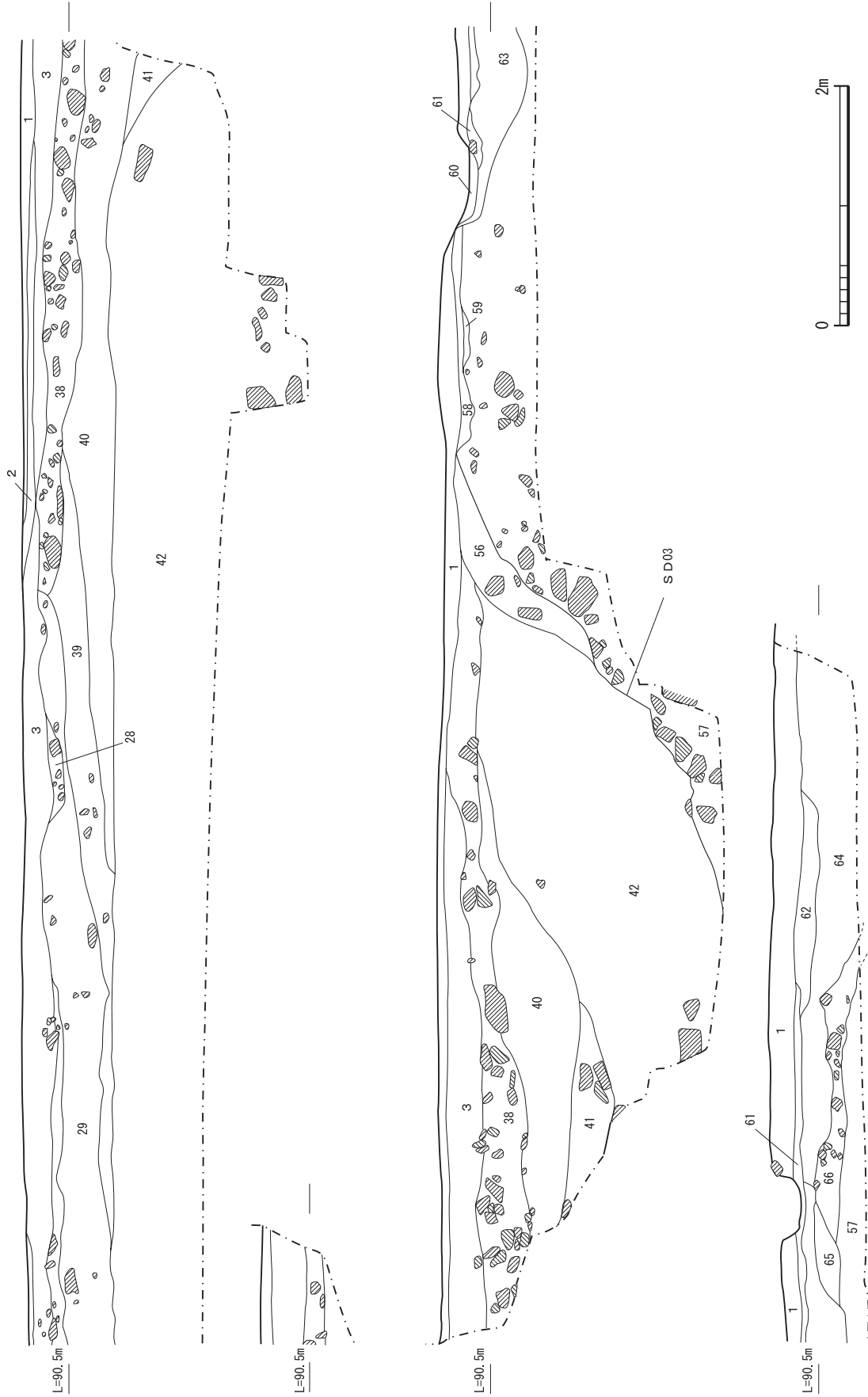
第3図 A・B地区遺構配置図

部には黒褐色シルトが堆積していた。また、埋土に含まれる礫の中には1.0mを超える巨礫も存在していた。今回の調査地は、東側に存在する谷の開口部に位置しており、現在でも豊富な湧水が絶えることなく流れ下ってきている。このS D 01aは、谷の上側で発生した土石流が竹野川の流れる低位部へ向かって流れ下りた痕跡であると考えられる。内部からは多量の礫に挟み込まれるように、縄文時代から中世にかけての遺物が出土している。上・下層の別なく、新旧の時期の遺物が混在する状況であった。また、A地区で遺構検出面となったベース面は安定しておらず、広い範囲にわたって礫を多く含んでいることから、この谷自体を埋没させた古い時期の大規模な土石流によって形成されたと考えられる。

溝S D 01 b 南側をS D 01 aに切られているため規模は不明であるが、検出範囲では東端で約4.6 m、西端で約9.7 mの幅をそれぞれ測る。底面のレベルは東端で90.40 m、西端で90.12 mとなっていた。埋土は灰黄色砂質土がベースとなり、間に薄くにおい黄橙色砂質土や黒褐色砂



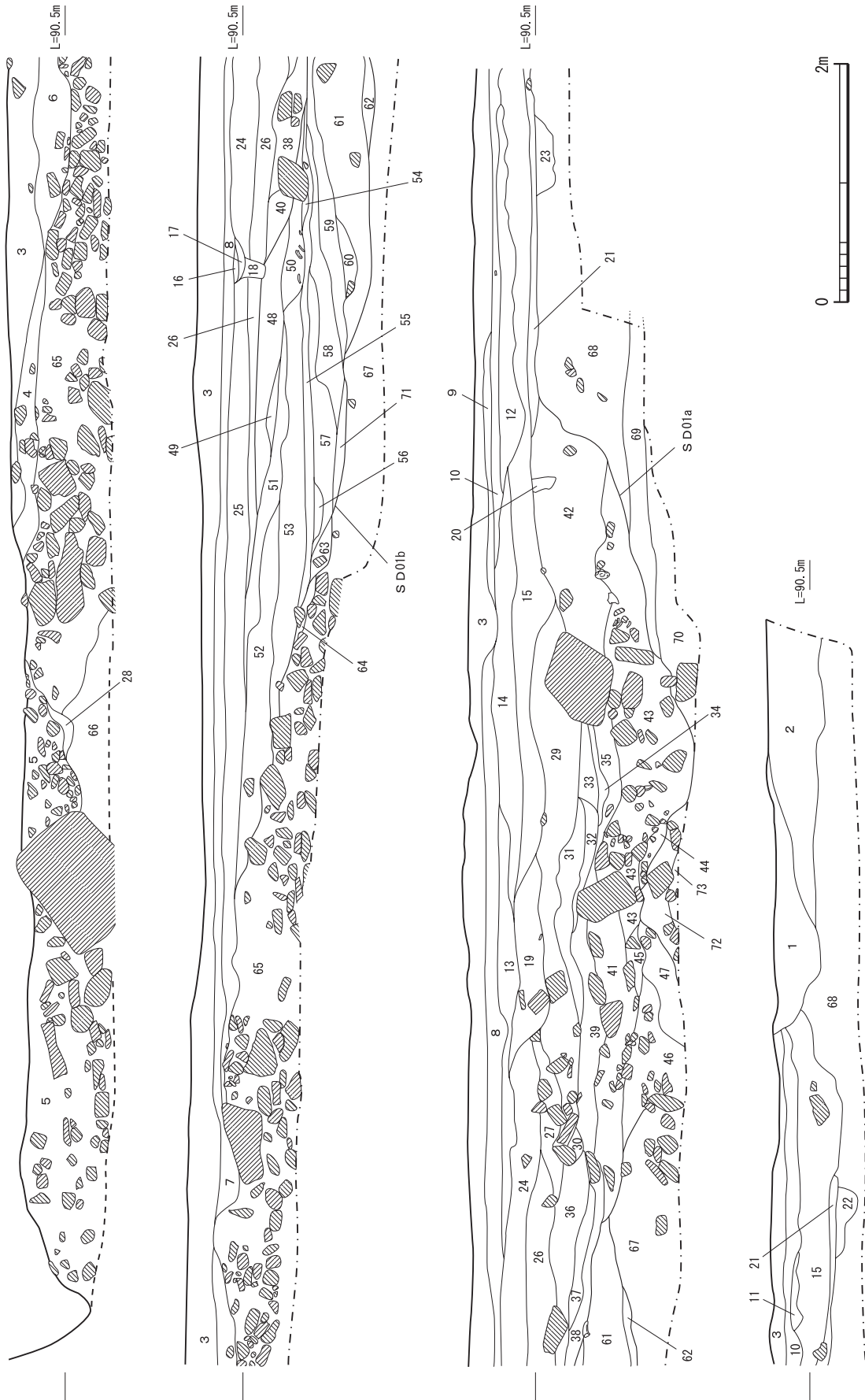
第4図 A地区東壁土層断面図



第5図 A地区東・南壁土層断面図

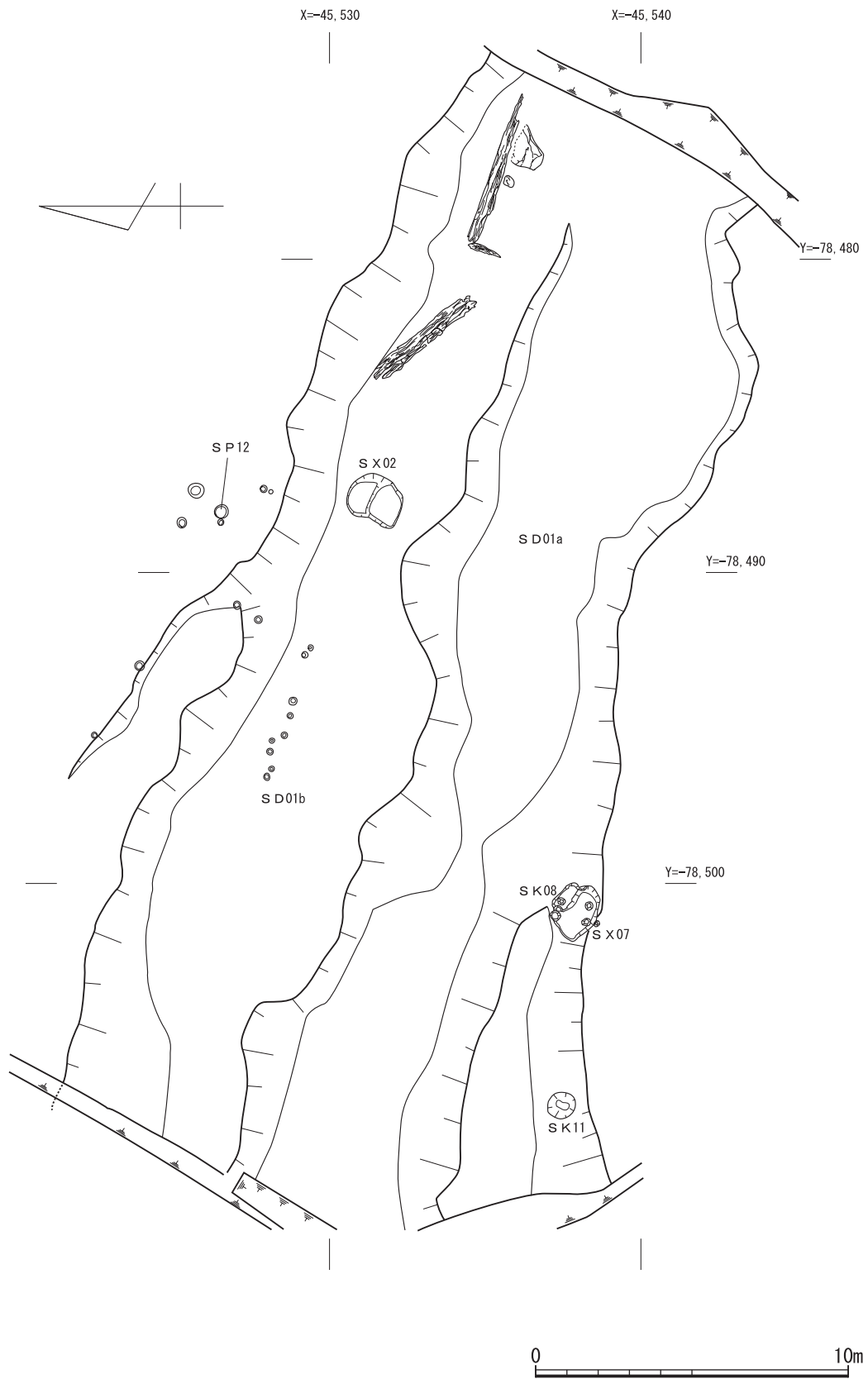
1. 耕作土
2. におい赤褐色(5YR5/4)砂質土(細～中砂)
3. 灰黄褐色(10YR4/2)砂質土(シルト～粗砂)
4. におい黄色(2.5Y6/3)砂質土(細～極粗砂)
5. 灰黄色(2.5Y6/2)砂質土(細～中砂)に黒褐色(10YR3/2)シルト塊が50%程度混入
6. におい黄橙色(10YR6/4)砂質土(シルト～細砂)
7. 暗灰黄色(2.5YR5/2)砂質土(シルト～中砂)
8. 灰黄色(2.5Y7/2)砂質土(細砂)
9. 褐灰色(10YR5/1)砂質土(細～粗砂)φ1～2cm程の礫を僅かに含む
10. 褐灰色(7.5YR4/1)砂質土(シルト～中砂)
11. 黄灰色(2.5YR5/1)砂質土(粗砂)φ1～3cm程の礫を多く含む
12. 褐灰色(7.5YR5/1)砂質土(中～粗砂)φ2～5cm程の礫を含む
13. 褐灰色(7.5YR4/1)砂質土(中～粗砂)
14. 浅黄色(2.5Y7/4)砂質土(粗砂)
15. 灰黄褐色(10YR5/2)砂質土(細～中砂)
16. 灰オリーブ色(5Y5/2)砂質土(極細～細砂)
17. 黒褐色(10YR3/2)シルト
18. 褐灰色(10YR4/1)砂質土(シルト～極細砂)
19. 青灰色(5GB6/1)砂質土(シルト～極細砂)
20. 暗灰黄色(2.5Y5/2)砂質土(シルト～細砂)に黒褐色(7.5YR3/1)シルト塊が50%程度混入
21. におい黄橙色(10YR6/3)砂質土(細～粗砂)
22. 灰黄色(2.5Y6/2)砂質土(細～粗砂)
23. 黒褐色(10YR2/2)砂質土(シルト)に青灰色(5GB6/1)砂質土(細砂)が層状に堆積
24. 22に同じ
25. 灰黄色(2.5Y7/2)砂質土(極細～中砂)に青灰色(5GB6/1)砂質土(細砂)を層状に含む
26. 黒褐色(10YR3/2)シルト、φ5～7cm程の礫を含む
27. 浅黄色(2.5Y7/4)砂質土(細～極粗砂)
28. 黄褐色(2.5Y5/3)砂質土(細～極粗砂)しまりなく、φ0.5～1cm程の礫を多く含む
29. 暗灰黄色(2.5Y5/2)砂質土(細～中砂)に黒褐色(10YR3/2)シルト塊が50%程度混入
30. 黄褐色(2.5Y5/3)砂質土(細～極粗砂)
31. 暗灰黄色(2.5Y5/2)砂質土(シルト～粗砂)
32. 灰褐色(7.5YR6/2)砂質土(シルト～中砂の互層堆積)
33. 黄灰色(2.5Y5/1)砂質土(極細～極粗砂)
34. 明黄褐色(10YR6/6)砂質土(中～極粗砂)
35. 灰黄褐色(10YR6/2)砂質土(細～中砂)
36. 灰黄色(2.5Y6/2)砂質土(シルト～細砂)
37. におい黄色(2.5Y6/3)砂質土(細～中砂)
38. におい黄橙色(10YR6/4)砂質土(シルト～極粗砂)
39. 灰黄色(2.5Y6/2)砂質土(シルト～極粗砂)
40. 灰黄褐色(10YR5/2)砂質土(シルト～中砂)に黒褐色(7.5YR3/1)シルト塊が30%程度混入
41. 灰オリーブ色(5Y6/2)砂質土(シルト～中砂)
42. におい黄色(2.5Y6/3)砂質土(シルト～細砂)に明赤褐色(5YR5/8)砂質土(細砂)を層状に含む
43. 明赤褐色(5YR5/8)砂質土(細～極粗砂)
44. におい黄橙色(10YR6/3)砂質土(細～中砂)ににおい赤褐色(5YR4/4)砂質土(中砂)を層状に含む
45. 灰色(10Y5/1)砂質土(シルト～極粗砂)
46. 灰黄色(2.5Y7/2)砂質土(細～粗砂)
47. 明赤褐色(5YR5/8)砂質土(細～中砂)とにおい黄橙色(10YR6/3)砂質土(中砂)の互層堆積
48. 暗灰黄色(2.5Y5/2)砂質土(シルト～粗砂)
49. 明緑灰色(10GY7/1)砂質土(細～極粗砂)
50. オリーブ灰色(5GY6/1)砂質土(細～極粗砂)φ1～3cm程の礫を多く含む
51. 青黒色(10GB2/1)シルト
52. 明オリーブ灰色(5GY7/1)砂質土(細～粗砂)に橙色極粗砂(7.5YR6/8)を層状に含む
53. 明黄褐色(2.5Y7/6)粘質土
54. オリーブ黄色(5Y6/4)砂質土(シルト～極粗砂)
55. 明褐色(5YR5/8)砂質土(中～極粗砂)
56. 暗灰黄色(2.5Y5/2)砂質土(シルト～中砂)
57. 灰黄褐色(10YR4/2)砂質土(細～極粗砂)
58. におい黄色(2.5Y6/3)砂質土(細～中砂)
59. 明赤褐色(5YR5/8)砂質土(シルト～粗砂)
60. 58に同じ
61. 59に同じ
62. 暗赤褐色(5YR3/2)砂質土(極細～粗砂)
63. 62に同じ
64. 黄褐色(2.5Y5/3)砂質土(細～粗砂)に黒褐色(7.5YR3/1)シルト塊が10%程度混入
65. 灰黄褐色(10YR4/2)砂質土(中～極粗砂)
66. におい褐色(7.5YR5/4)砂質土(中～粗砂)



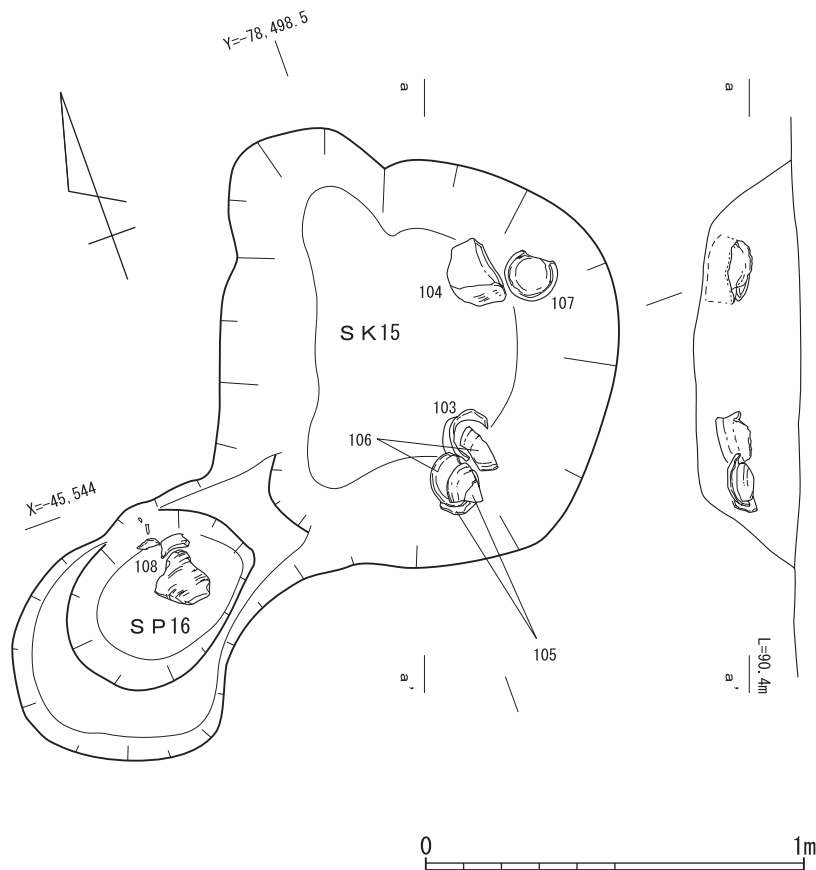


第6図 B地区東壁土層断面図

1. 攪乱
2. 灰黄色(2.5Y6/2)砂質土(細～粗砂)
3. 2に同じ
4. 黄灰色(2.5Y4/1)砂質土(極細～中砂)
5. 灰黄褐色(10YR6/2)砂質土(細砂)に褐色(7.5YR4/4)砂質土(細砂、 $\phi$ 0.1～1m超の礫を多量に含む)が40%程度混入
6. 黒褐色(2.5Y3/1)砂質土(極細～中砂)
7. にぶい黄色(2.5Y6/3)砂質土(細砂～粗砂)
8. 7と同一層
9. 7に同じ
10. 灰褐色(7.5YR5/2)砂質土(極細～粗砂)
11. 灰褐色(7.5YR5/2)砂質土(シルト～中砂)に明褐色(7.5YR5/8)砂質土が全体的に混入
12. 11に同じ
13. 灰色(5Y6/1)砂質土(極細～極粗砂)に明黄褐色(2.5Y6/8)砂質土が全体的に僅かに混入
14. 灰黄褐色(10YR4/2)砂質土(シルト～極粗砂)
15. 褐灰色(10YR4/1)砂質土(シルト～中砂)
16. にぶい黄褐色(10YR6/4)砂質土(極細～細砂)
17. 黄灰色(2.5Y5/1)砂質土(極粗砂)下層は $\phi$ 0.5cm程の垂円礫となる
18. 暗灰黄色(2.5Y5/2)砂質土(中～極粗砂)
19. 暗褐色(10YR3/3)砂質土(シルト～中砂) $\phi$ 0.5～1cm程の礫を僅かに含む
20. 暗灰黄色(2.5Y5/2)砂質土(細砂) $\phi$ 0.5cm程の礫を僅かに含む
21. 黒褐色(10YR3/2)砂質土(シルト～細砂)に黒色(10YR2/1)砂質土(シルト～極細砂)が50%程度混入
22. 暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)砂質土(細～中砂)
23. 22に同じ
24. 灰黄褐色(10YR4/2)砂質土(極細～粗砂)
25. 24に同じ
26. 黒褐色(10YR3/1)砂質土(細～粗砂)
27. 灰黄褐色(10YR5/2)砂質土(シルト～粗砂)
28. 浅黄色(2.5Y7/4)砂質土(シルト～粗砂)
29. 暗灰黄色(2.5Y5/2)砂質土(シルト～中砂)
30. 暗灰黄色(2.5Y4/2)砂質土(細～粗砂)
31. 褐灰色(7.5YR5/1)砂質土(シルト～極細砂)
32. 褐灰色(10YR5/1)砂質土(極細～中砂)
33. 褐灰色(10YR4/1)砂質土(シルト～細砂)
34. 黒褐色(10YR3/1)砂質土(細～粗砂)
35. 暗灰黄色(2.5Y4/2)砂質土(中砂)
36. 灰黄色(2.5Y6/2)砂質土(細～中砂)
37. 黒色(10YR2/1)砂質土(シルト～極粗砂)
38. 褐灰色(10YR4/1)砂質土(シルト)に灰色(5Y6/1)砂質土(中砂)を層状に含む
39. 灰オリーブ色(5Y5/2)砂質土(中砂) $\phi$ 0.5～1cm程の礫を含む
40. 黒褐色(10YR2/2)砂質土(シルト～細砂)
41. にぶい黄褐色(10YR5/3)砂質土(中～極粗砂)
42. 黒色(10YR2/1)砂質土(シルト～細砂)
43. 暗灰黄色(2.5Y5/2)砂質土(中～極粗砂) $\phi$ 5～80cm程の礫を多量に含む
44. 明赤褐色(5YR5/6)砂質土(極粗砂) $\phi$ 2～10cm程の礫を多量に含む
45. 44に同じ
46. 灰色(5Y5/1)砂質土(極粗砂) $\phi$ 5～10cm程の礫を多量に含む
47. 黒褐色(2.5Y3/1)砂質土(シルト)
48. 灰黄色(2.5Y6/2)砂質土(中砂)に明赤褐色(5YR5/8)砂質土と黒褐色(2.5Y3/1)砂質土が30%程度混入
49. 灰色(5Y6/1)砂質土(中～粗砂)
50. 明赤褐色(5YR5/8)砂質土(中～極粗砂) $\phi$ 1cmの礫を多く含む
51. 暗灰黄色(2.5Y5/2)砂質土(シルト～粗砂)に黒色(2.5Y2/1)砂質土が30%程度混入
52. 黄灰色(2.5Y5/1)砂質土(シルト～極粗砂)に黒色(2.5Y2/1)砂質土が30%程度混入
53. にぶい黄色(2.5Y6/3)砂質土(中～粗砂)に灰黄色(2.5Y7/2)砂質土を層状に含む
54. 黄灰色(2.5Y4/1)砂質土(粗砂)
55. 灰白色(2.5Y7/1)～黄灰色(2.5Y6/1)砂質土(シルト～中砂)
56. 灰黄色(2.5Y6/2)砂質土(シルト～中砂)に黒色(2.5Y2/1)砂質土が40%程度混入
57. 灰黄色(2.5Y6/2)砂質土(極細砂)
58. 明赤褐色(5YR5/8)砂質土(極粗砂)ににぶい黄色(2.5Y6/3)砂質土を層状に含む
59. 55に同じ
60. 暗灰黄色(2.5Y5/2)砂質土(極粗砂) $\phi$ 1～5cm程の礫を多く含む
61. 明赤褐色(5YR5/8)砂質土(粗～極粗砂)・灰黄色(2.5Y7/2)砂質土(中～粗砂)・灰白色(2.5Y7/1)砂質土(粗～極粗砂)の層状堆積
62. にぶい黄色(2.5Y6/3)砂質土(極粗砂)
63. 黒色(10YR2/1)砂質土(シルト)
64. 暗灰黄色(2.5Y4/2)砂質土(粗～極粗砂)
65. 黄褐色(2.5Y5/3)砂質土(粗～極粗砂) $\phi$ 0.1～0.7m程の礫を多量に含む
66. にぶい黄色(2.5Y6/3)砂質土(細～極粗砂)
67. 明赤褐色(5YR5/8)砂質土(粗～極粗砂)・黄灰色(2.5Y6/1)砂質土(粗～極粗砂)・黄灰色(2.5Y5/1)砂質土(粗～極粗砂)の層状堆積
68. にぶい黄色(2.5Y6/3)砂質土(細～粗砂)
69. 灰黄色(2.5Y6/2)砂質土(中～極粗砂)
70. 灰白色(2.5Y7/1)～黄灰色(2.5Y6/1)砂質土(シルト～細砂)
71. にぶい黄色(2.5Y6/3)砂質土(極細砂)に明褐色(7.5YR5/8)砂質土(極粗砂)を層状に含む
72. 69に同じ
73. 70に同じ



第7図 A・B地区溝S D01平面図



第8図 A地区土坑SK15、ピットSP16遺物出土状況図

質土が挟み込まれるように堆積している。また、北肩部には黒褐色シルトが厚く堆積していた。このことから、北岸は緩やかな傾斜となっており、穏やかな流れが想起される。この黒褐色シルトと、その下層に堆積した浅黄色砂質土中から遺物が多く出土した。遺物の出土する範囲はY = - 78,480 ~ - 78,490 に概ね集中する傾向を示しており、破損率の少ない弥生時代後期後半を中心とする時期の土器である。また、北岸東半部には、溝の流れに沿うように自然木が2

本埋没していた。上半はすでに消失していたが、埋没した下半は丸い輪郭を留めていた。なお、試掘調査G1で古墳時代の竪穴式住居跡と報告されていたのは、北肩部に堆積した埋土の一部であった。

**土坑SX02** 調査区中央の西寄りの地点で検出した。SD01bが埋没した後に掘削されており、南北3.6m、東西2.7mを測る不整形円形を呈する土坑である。埋土は上層がオリーブ黒色砂質土にふい赤褐色砂質土が混入しており、下層は灰黄色砂質土となる2層の堆積であった。上層のオリーブ黒色砂質土には、層状に炭化物が多く含まれていた。脆弱で取り上げることは叶わなかったが、加工を受けた板状に見受けられ、埋没に伴って混入したものと考えられる。底面には段差があり、南側が北側に比して0.1m程度深くなっていた。北端から高杯の杯部(102)が出土している。

**溝SD03** 調査区の南東隅で検出した溝である。調査区内には西肩部の一部がかかるのみで、全容は不明である。検出範囲では東西幅が最大で約14mを測り、南北18mにわたって確認した。西肩部は2段掘りの様相を呈しており、端から3mほどは検出面からの深さが0.2m程下がる平坦面となっており、その先は急激に深くなっていた。サブトレンチを設け、検出面から-2.2mまで掘削したが、底面の検出には到らなかった。安全性を考慮し、それ以上の掘削は実施しなかった。掘削に際し、遺物等は出土しておらず、時期に関しては不明である。

ピットSP12 調査地区の北半部西寄りで見出した。直径0.5mを測る円形のピットである。深さは検出面から0.15mを測る。埋土から中世の土師器皿(90)が1点出土した。

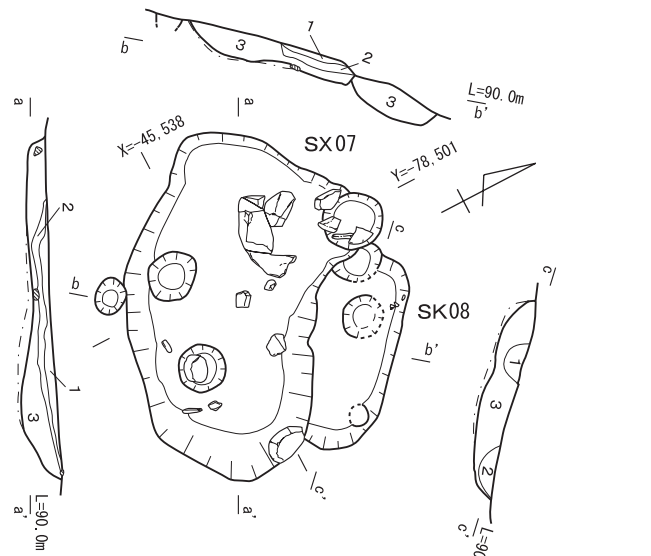
土坑SK15 調査区の南西隅付近で見出した。北隅部がやや突出した隅丸方形を呈する土坑である。東西1.1m、南北1.1m、深さ0.3mを測る。埋土は暗褐色砂質土の単統一層であった。東辺斜面に張り付くように土師器甕2点(103・104)、須恵器杯蓋2点(105・106)、杯身1点(107)が出土した。

ピットSP16 SK15の南西側で見出したピットである。北東隅でSK15と切り合い関係にあったが、明確に掘削の前後を確認できなかった。東西0.8m、南北0.4～0.6mを測る不整楕円形を呈し、さらに中央部は東西0.6m、南北0.4mの規模で2段に掘削されている。深さ0.3m程を測り、埋土はSK15と同様に暗褐色砂質土の単統一層であった。中央部には、底から0.1m程浮いた深さから土師器の壺(108)が出土している。

## 2) B地区

B地区は、京都府教育委員会の試掘調査G2の調査成果に基づき設定した。このトレンチにおいても試掘調査の結果、遺構は2面にわたって確認されており、上層は試掘トレンチG1と同様であるが、下層では弥生時代終末期の竪穴式住居跡が検出されている。当地点についても、当該水田は東側1/3が0.41mの、西側2/3が1.7mの切土施工が計画されているため、筆全体を対象とし調査を実施することとされた。調査地点の現標高は90.61mを測る。調査面積は519㎡である。A地区での遺構面の検出状況を考慮しつつ、重機により耕作土を除去した後、下層の掘削を行った。A地区と同様に、床土直下で礫を多く含む明オリーブ灰色砂質土となったが、西へ掘削範囲を広げると共に礫の混入がなくなり、調査区の1/4程から西側では、締まりのないぶい黄色砂質土の堆積となっていた。また、西端1/4の地点からは、およそ0.5mの段差を有して低くなっており、後世に盛土を行って耕作地を拡張していたことが判明した。精査を行った結果、北半部では遺構の検出には到らず、南半部ではA地区からの延長部で溝SD01a・bを、SD01bの南肩部付近で土坑数基を検出した。

溝SD01a A地区から北西方向へ伸びてきた溝は、B地区との境界付近から、弧を描いて



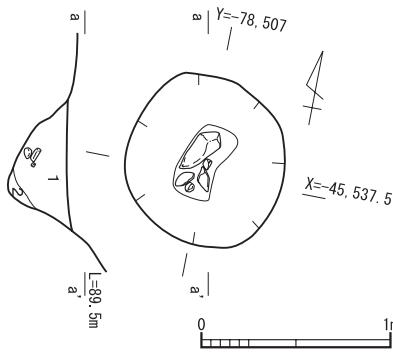
### SX07

1. 暗褐色 (10YR3/3) 砂質土 (シルト～細砂) 焼土塊・炭化物を僅かに含む
2. 炭化物堆積
3. 暗オリーブ褐色 (2.5Y3/3) 砂質土 (シルト～極粗砂) 焼土塊・炭化物・黄褐色 (10YR7/6) 粘質土塊を7%含む

### SK08

1. 灰オリーブ色 (5Y4/2) 砂質土 (シルト～細砂) 炭化物を含む
2. 褐色 (7.5YR4/4) シルト、微細な焼土塊を含む
3. 暗褐色 (7.5Y3/3) 砂質土 (シルト～中砂)

第9図 B地区土坑SX07・SK08平・断面図



1. 褐灰色(7.5Y4/1)砂質土(シルト～粗砂)
2. 黒褐色(7.5Y3/1)砂質土(シルト～極粗砂)

第10図 B地区土坑S K 11平・断面図

徐々に西へと傾いていく。調査区の南西隅部付近では平坦面が新たに派生し、溝底のレベルも88.41mと深くなって調査区外へと続いてゆく。

**溝S D 01 b** A地区との境界から北西側では、北側にわずかながら段差が残存している。本来はこの溝が北側へ広がって流れていたが、後世の削平により消滅した可能性を示すものであろう。底面のレベルは東端で90.20m、西端で89.26mとなっており、竹野川が現流する低位部に向け傾斜が強まっている。A地区の北岸に厚く堆積していた黒褐色シルトも、当地区では薄くなり、東半部のみにしか存在しな

なる。そのことに比例して、遺物の出土量も格段に少なくなる。なお、試掘調査G 2で弥生時代終末期の竪穴式住居跡と報告されたものは、S D 01 bの南肩部の一部を検出していたことが判明した。

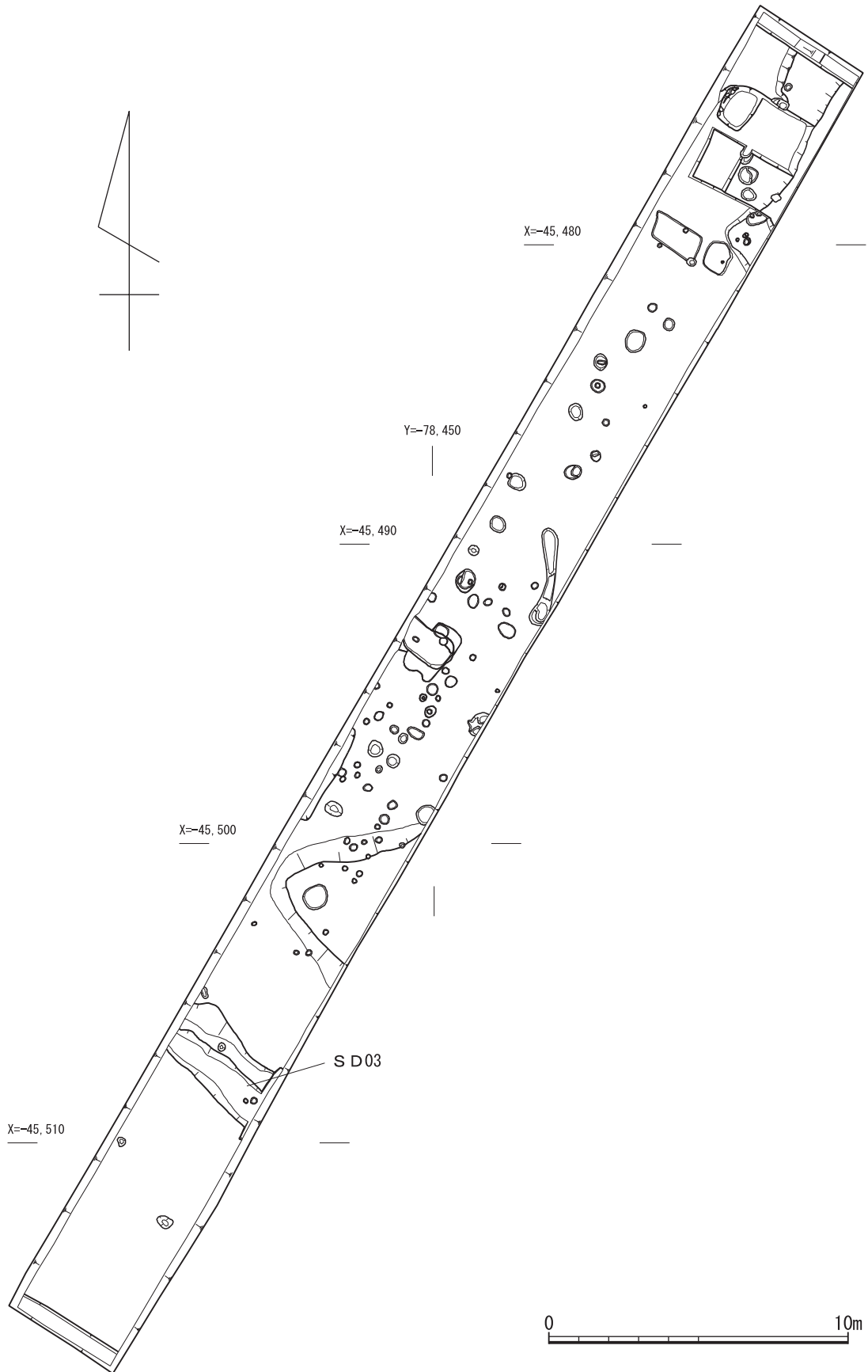
**土坑S X 07** 調査区の南東部で検出した。東西約1.9m、南北約1.1mを測る楕円形を呈する土坑である。S D 01 aの南肩部と重複しており、S D 01 aに切り勝っていた。内部を掘削した後、底面の南側でピット2基が検出された。また、北半には石材がかたまって埋没していた。埋土は3層に分かれ、1層の暗褐色砂質土と3層の暗オリーブ褐色砂質土の間は、炭化物の堆積が5～6cmにわたって確認された。また、1層も焼土塊、炭化物をわずかながら含んでいた。時期を確定する遺物等は出土していない。

**土坑S K 08** S X 07の北東側で検出した土坑である。南側をS X 07に、北西端をピットに切られており、全容は不明であるが、東西1.1m、南北0.45m以上を測る。埋土には微細な炭化物を含んでいた。遺物は出土しておらず、時期等は不明である。

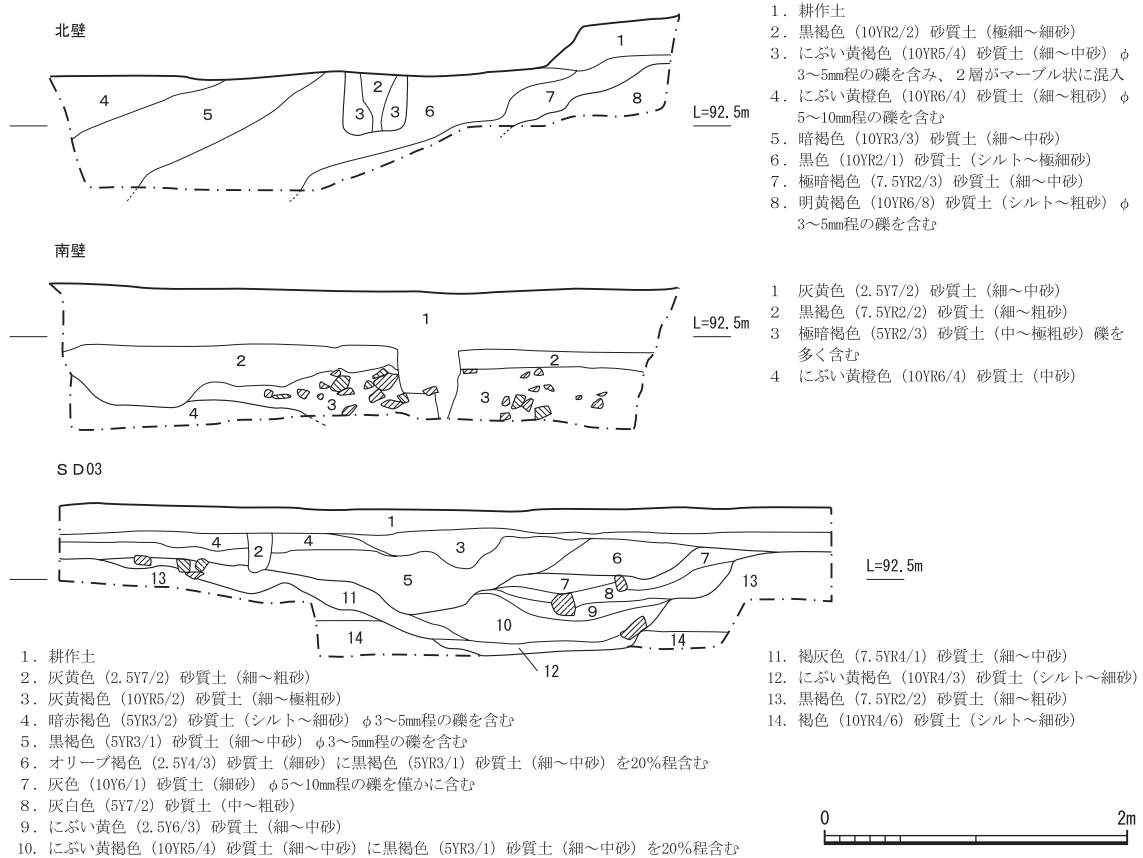
**土坑S K 11** 調査区の南端中央付近で検出した。S D 01 bと重複していたが、S D 01 bに切り勝っていた。南北0.9m、東西0.85mを測る円形の土坑である。検出段階で上層から銭貨が6点(343～346)まとまって出土した。埋土は褐灰色砂質土と黒褐色砂質土の2層の堆積となっていたが、銭貨以外の遺物は出土しなかった。

### 3) C地区

C地区は、京都府教育委員会の試掘調査G 7の調査成果に基づき設定した。当地点では大型の土坑から古墳時代前期後半の土師器が出土したため、調査対象地とされた。調査地点の現標高は93.01mを測る。当地点では0.3mの切土施工が計画されていたが、試掘調査の結果、西側の竹野川に向かって地形が大きく傾斜して下がっていることが確認されていた。そのため、当該水田の東側のみを調査対象として、東西50.0m、南北4.0mの調査区を設定した。調査面積は200㎡である。耕作土、床土を重機により除去した後、人力により精査を行い遺構の検出に努めた。床土直下には灰黄色砂質土が堆積しており、その下層に黒褐色砂質土の遺物包含層が確認できた。この遺物包含層は調査区の北端付近では残っていなかったが、それ以外の地点では良好に残存し、古墳時



第11図 C地区遺構配置図



第12図 C地区北・南壁、溝S D 03土層断面図

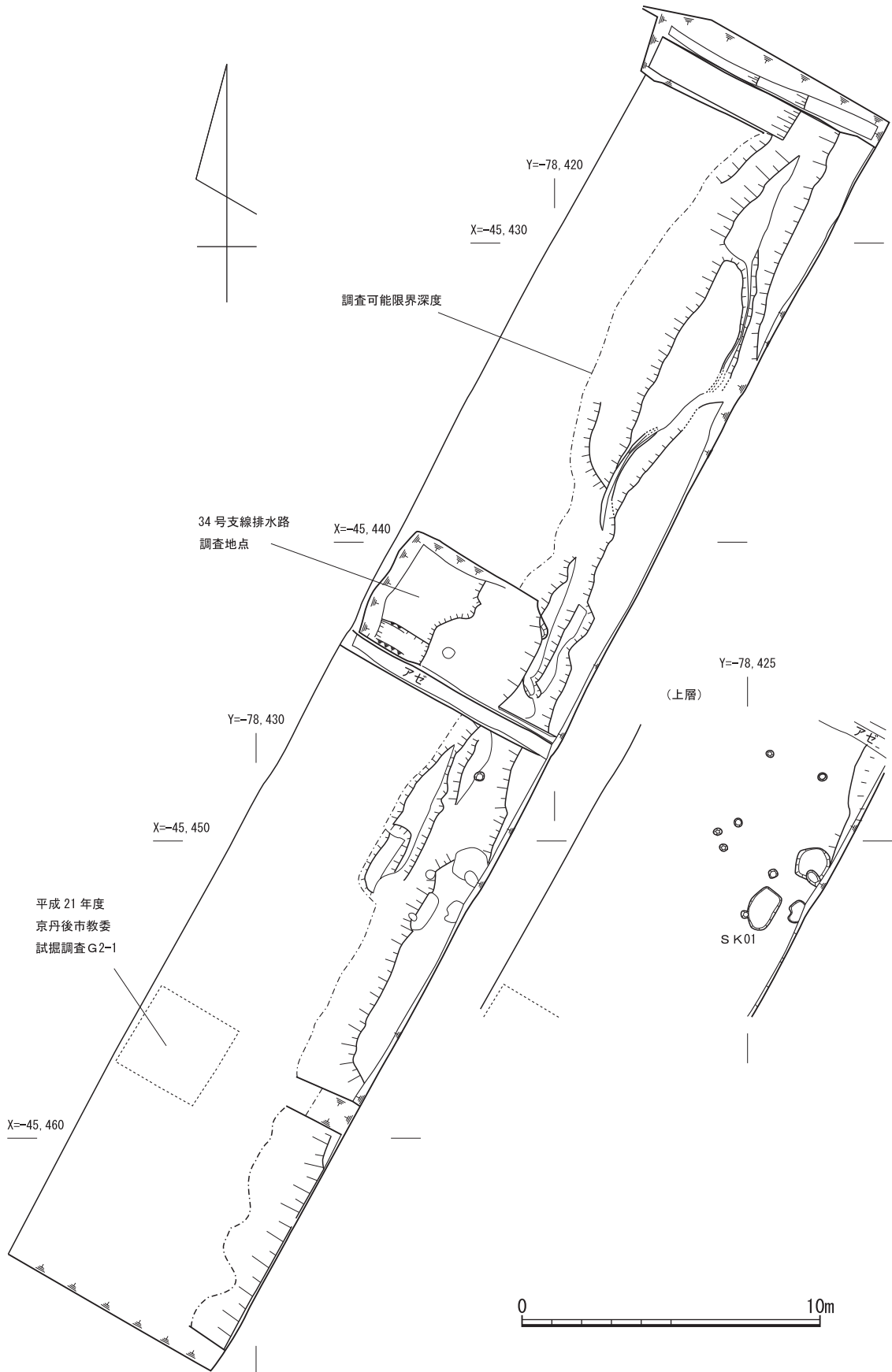
代から中世の遺物が出土している。北端からおよそ5.0mの範囲では、明黄褐色砂質土を呈するベース面が検出された。これは東側から延びる丘陵の裾部と考えられる。後世に耕作地とされた際に、削平を受けたと考えられる平坦面が幅0.5m程度、長さ7.0mにわたって調査区の北東隅部で検出された。西側に向かって急激に傾斜し、南側ではこの張り出しは東へと屈曲して調査区外へと延びていくことが確認された。この西側への急傾斜地点に黒色砂質土の遺物包含層が堆積しており、古墳時代前期後半から中期を中心とする遺物が多量に出土した。調査は、ほ場整備事業の施工による完成標高から保護層相当分を差し引いた高さを限度に、包含層遺物を取り上げながら掘り下げを行った。X = -45,480から南側では、黒褐色砂質土の遺物包含層の下層に堆積する極暗褐色砂質土上面において、東西方向の溝1条、土坑、柱穴等を50基あまり検出したが、南へ行くほどに遺構は希薄となっていた。

**溝S D 03** 調査区の南側で検出した南東から北西方向に流れる溝である。北肩部は2段掘り状を呈し、幅0.3～0.6mの平坦面が存在する。溝幅は1.8～2.3mを測り、調査区内では4.0mにわたって検出した。底面のレベルは東端で92.03m、西端で92.02mとなっており、検出範囲ではほぼ水平となっていたが、本来的には北西へと流れ下っていたものと考えられる。遺物は土師器、須恵器の細片等が出土しているが、時期の特定には到っていない。

#### 4) D地区

D地区は、京丹後市教育委員会の試掘調査G 2 - 1・2の調査成果に基づき設定した。京丹後



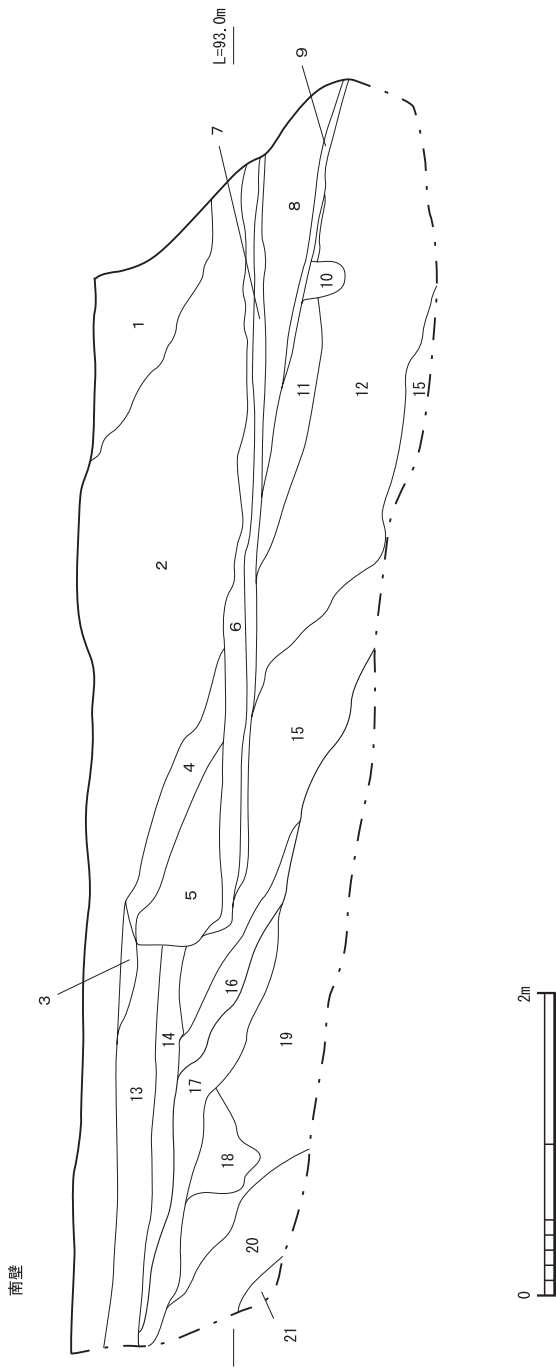


第13図 D地区遺構配置図

1. 耕作土
2. 灰黄褐色 (10YR4/2) 砂質土 (細～中砂)
3. にぶい黄褐色 (10YR5/3) 砂質土 (細～粗砂) φ2～3mm程の礫を含む
4. オリーブ褐色 (2.5Y4/4) 砂質土 (中～極粗砂)
5. 黄褐色 (10YR5/6) 砂質土 (細～極粗砂)
6. 暗褐色 (7.5YR3/3) 砂質土 (細砂)
7. にぶい黄褐色 (10YR7/3) 砂質土 (粗砂)
8. 灰褐色 (7.5YR4/2) 砂質土 (細～粗砂)
9. 褐色 (7.5YR4/3) 砂質土 (細～粗砂)
10. 黒褐色 (7.5YR3/2) 砂質土 (細～極粗砂) φ5～10mm程の礫を多く含む
11. 褐灰色 (5YR4/1) 砂質土 (シルト～極粗砂)
12. 暗赤褐色 (5YR4/2) 砂質土 (シルト～粗砂)
13. 灰褐色 (5YR4/2) 砂質土 (シルト～粗砂) φ2～3mm程の礫を含む
14. にぶい赤褐色 (5YR4/3) 砂質土 (シルト～粗砂) φ3～5mm程の礫を含む
15. 暗赤褐色 (5YR3/4) 砂質土 (シルト～細砂)
16. 暗褐色 (7.5YR3/3) 砂質土 (シルト～極細砂)
17. 黒褐色 (5YR2/1) 砂質土 (シルト～極細砂)
18. にぶい赤褐色 (5YR4/4) 砂質土 (シルト)
19. 褐色 (7.5YR6/6) 砂質土 (シルト)
20. にぶい黄褐色 (10YR6/4) 砂質土 (中～粗砂)
21. にぶい黄褐色 (10YR6/4) 砂質土 (中～粗砂) 人頭大の角礫を多く含む

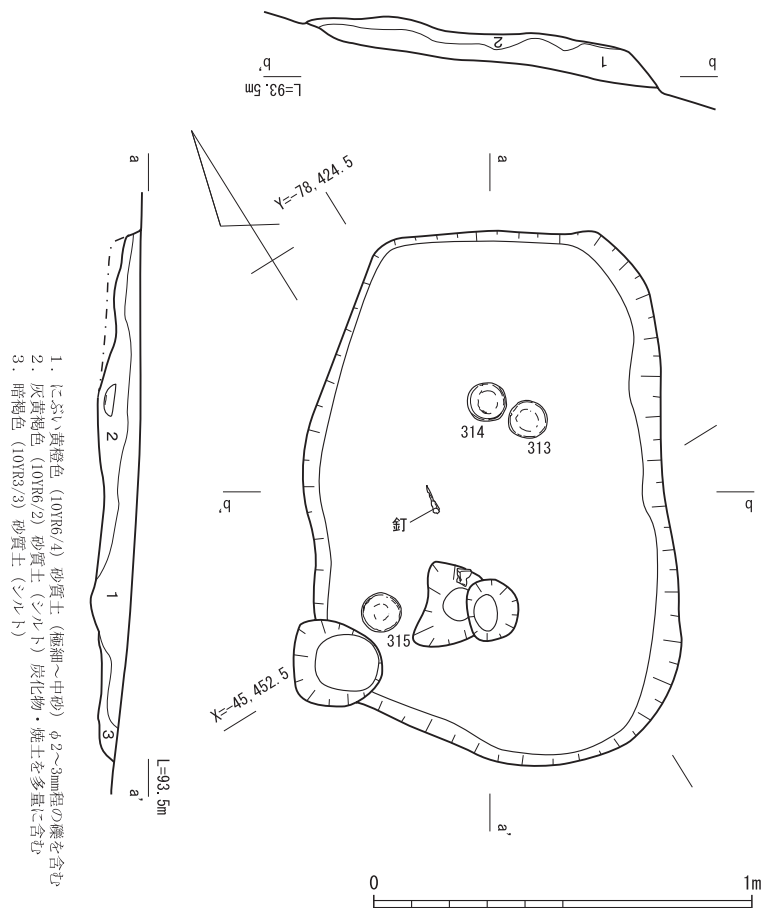


1. 明黄褐色 (10YR6/6) 砂質土 (細～中砂) φ3～5mm程の礫を含む
2. 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 砂質土 (シルト～粗砂)
3. 褐灰色 (7.5YR4/1) 砂質土 (細～粗砂)
4. 灰黄褐色 (10YR4/2) 砂質土 (細～中砂) φ5～8mm程の礫を含む
5. 褐灰色 (10YR6/1) 砂質土 (シルト～極粗砂) に混入
6. 灰色 (N5/) 砂質土 (シルト～細砂)
7. にぶい褐色 (7.5YR5/4) 砂質土 (シルト～中砂)
8. 褐灰色 (7.5YR5/1) 砂質土 (細～極粗砂)
9. 灰褐色 (5YR6/2) 砂質土 (極細～中砂)
10. 黄灰色 (2.5Y4/1) 砂質土 (シルト～細砂)
11. 褐灰色 (10YR4/1) 砂質土 (細～中砂)
12. オリーブ褐色 (2.5Y4/4) 砂質土 (シルト～粗砂)
13. 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 砂質土 (中～極粗砂)
14. 灰黄色 (2.5Y6/2) 砂質土 (細～極粗砂)
15. 暗オリーブ褐色 (2.5Y3/3) 砂質土 (シルト～粗砂)
16. 暗オリーブ褐色 (2.5Y3/3) 砂質土 (シルト～粗砂) に黒色 (2.5Y2/1) シルト塊と明黄褐色 (10YR7/6) シルト塊が60%混入
17. 黄灰色 (2.5Y4/1) 砂質土 (細～極粗砂) が40%混入
18. 黄褐色 (2.5Y5/3) 砂質土 (シルト～極細砂) に黒褐色 (2.5Y3/1) シルト塊が10%混入
19. 黒色 (10YR2/1) 砂質土 (シルト)
20. 暗褐色 (10YR3/3) 砂質土 (シルト～中砂)
21. にぶい黄褐色 (10YR6/4) 砂質土 (シルト～中砂)



第14図 D地区北・南壁土層断面図

市教育委員会の調査では耕作地への改変に伴う客土が厚く、旧耕作土上に1.0m以上の盛土がなされていたことが確認されたが、その下層に遺物包含層及び遺構を検出したため、本調査を実施することとなった。当該水田は北側が1.41m、南側が1.51mの切土施工が計画されているため、筆全体を対象とし調査を実施することとされた。また、調査区中央を34号支線排水路が横断することから、その地点に関しては、ほ場整備事業施工による完成標高よりも深く掘削を行うこととされた。調査地点の現標高は94.22mを測る。調査区は南北47.5m、東西8.0mに設定した。調査面積は380㎡である。



第15図 D地区土坑S K01平・断面図

調査区は丘陵裾部に盛土を行って造成されたことが判明していたため、重機により耕作土を除去した後、その盛土層を除去し、包含層遺物を人力により回収しつつ、ほ場整備事業施工による完成標高から保護層相当分を差し引いた高さを限度に、掘削を行うこととした。34号支線排水路の施工地点については、排水路の掘削深度から保護層相当分を差し引いた高さまで調査を実施した。調査の結果、34号支線排水路施工地点の北側では、盛土層の直下で、東側に存在する丘陵の裾部と考えられるにぶい黄褐色を呈するベース面を検出し、これが北西に向かって傾斜して下っていくことを確認した。そのため、西半では今回の調査での掘削深度が盛土層の中に収まることとなり、遺物包含層の掘削にまで到らなかった。南側でも、北寄りの地点ではにぶい黄褐色を呈するベース面を検出したが、 $X = -45,460$ 付近で南東へと屈曲し、調査区外へ延びていくことが判明した。また、上層遺構として、 $X = -45,450$ 付近で、表土、床土直下の黒色砂質土(遺物包含層)上面で土坑4基、ピット7基を検出した。これらの遺構の記録を作成した後、遺物包含層の掘削を行ったが、西側1/3に関しては、今回の調査での掘削深度を超えることから、それ以上の掘削は実施せず、調査を終了した。また、34号支線排水路の施工地点では、他の調査区よりも深く遺物包含層の掘削を実施した。東側丘陵からの傾斜は一旦緩やかとなり、狭い平坦面を形成していることが判明した。さらに、その平坦面は、調査地点の西側1/3で、再度急な傾斜で西側

へ下っていくことを確認した。しかし、施工深度との関係から、その先でベース面を確認するには到らなかった。

**土坑SK01** 上層遺構である。調査区の中央東寄りの地点で検出した土坑である。後世の削平を大きく受けており、0.1m程の深さを残すのみであった。長軸1.4m、短軸0.8～1.0mを測る隅丸長方形を呈し、南西隅を小土坑により切られていた。埋土は3層に分かれ、最下層に堆積した第2層には、炭化物、焼土塊が多量に含まれていた。内部からは同一規格の土師器皿3点(313～315)と、鉄釘4点(316～319)が出土している。以上のことから、この土坑は火葬墓と考えられる。

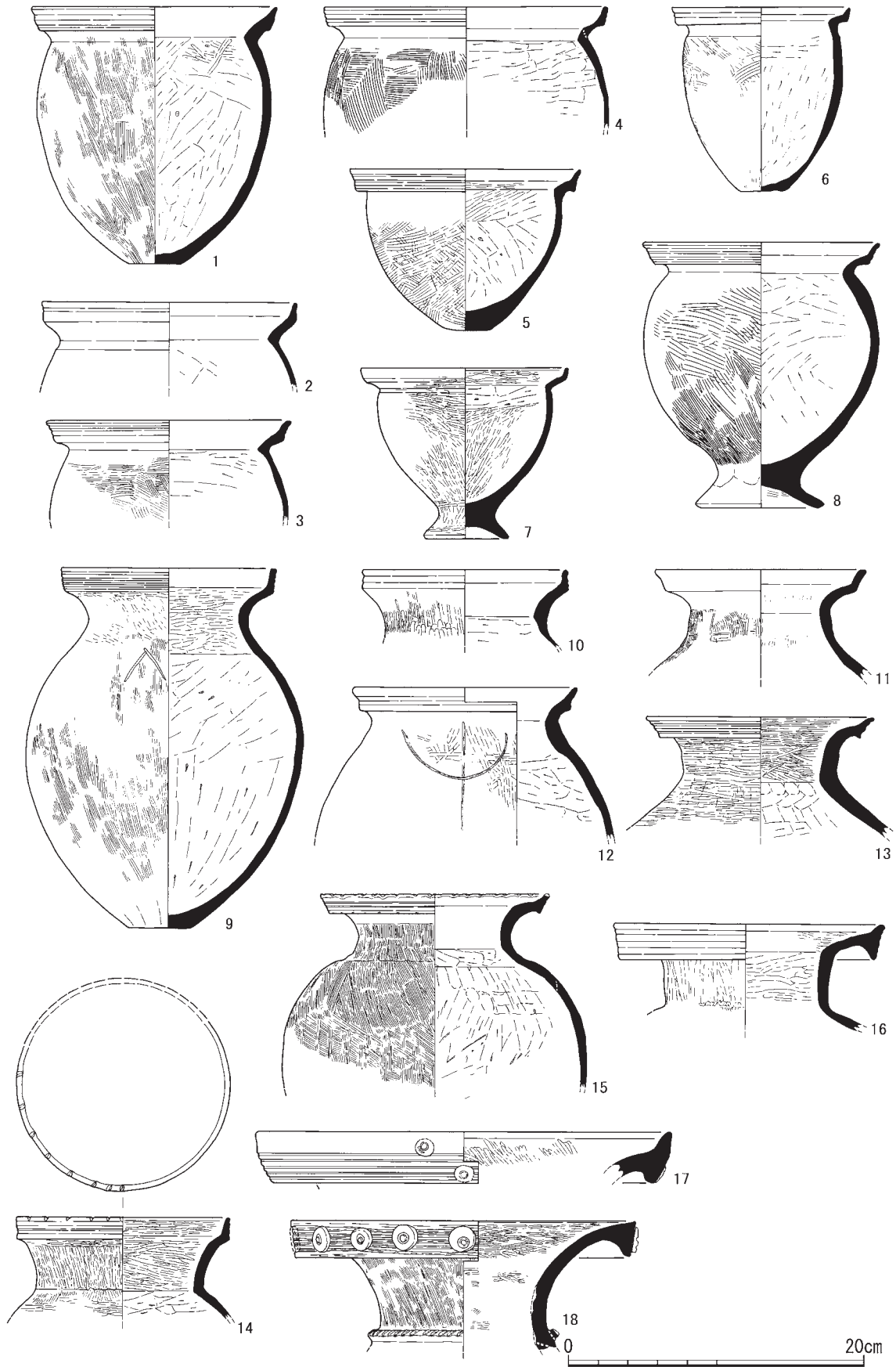
### 3. 出土遺物

#### 1) 土器

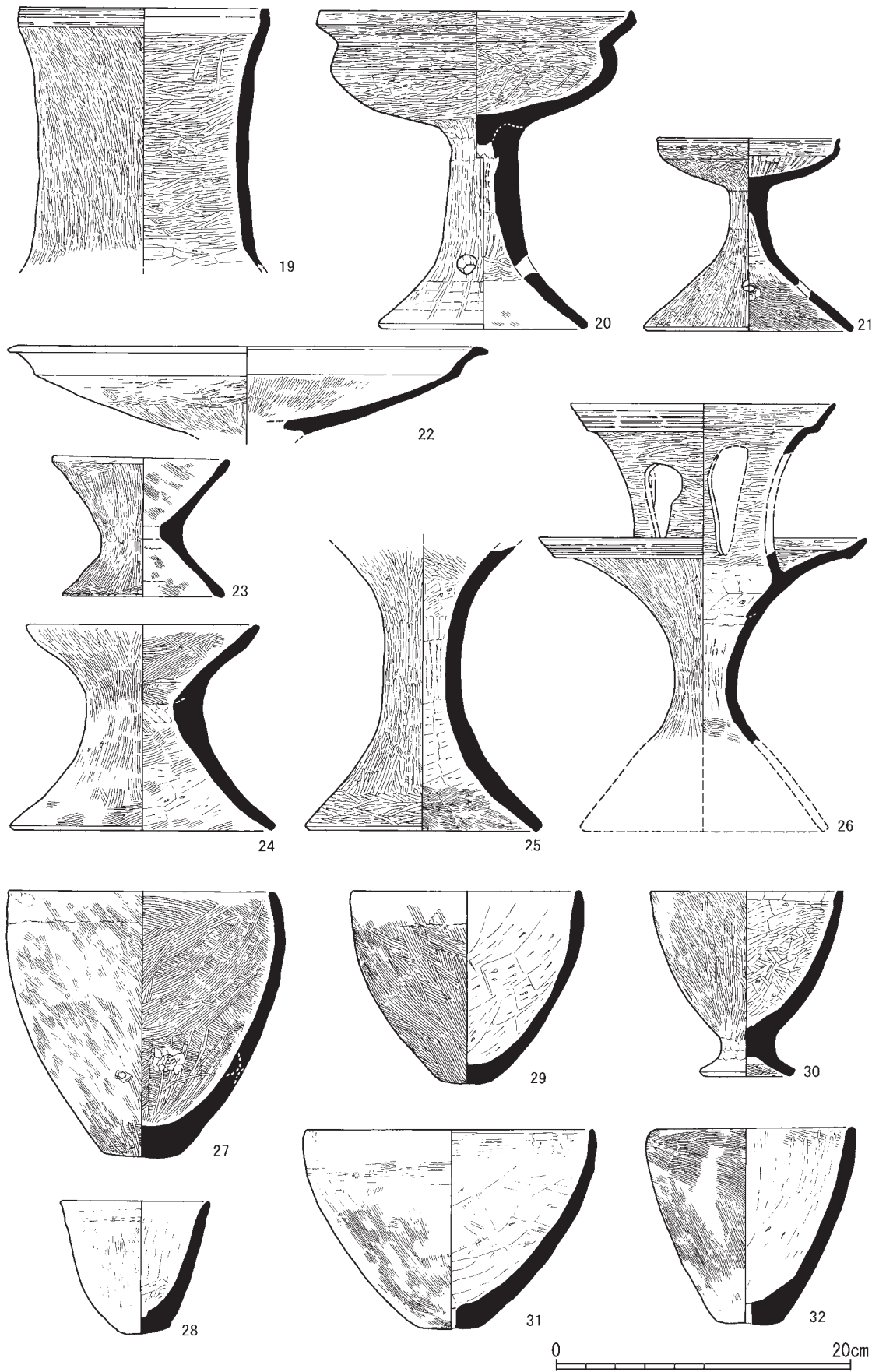
今回の調査では、整理箱にして300箱分の遺物が出土した。

1～108はA地区から出土したものである。1～50がSD01bから、51～89、91～101までがSD01aから、90はSP12、102はSX02、103～107はSK15、108はSP16からそれぞれ出土している。SD01aから出土している遺物に関しては、弥生時代後期後半、古墳時代、古代、中世、近代とその時間幅は広く、東側丘陵谷部において発生した土石流の影響によるものと考えられる。しかし、SD01bからの出土資料は、土石流の影響を被っていない北岸部分から出土しており、弥生時代後期後半を中心とするまとまった資料群となっている。

1～8は甕である。1は器高17.4cm、口径16.6cmを測り、口縁部外面に擬凹線文を施している。体部外面はハケ調整、内面は頸部までケズリ調整で仕上げられ、体部下半には使用に伴う煤の付着が観察される。2～8に関してもほぼ同様の調整により仕上げられているが、口径17～18cm前後の一群と、やや小振りの12cm前後の一群に分別され、それぞれに7・8の様に脚台部を作り付けるものがある。口縁部に関しても、1・2・4・6・7の様に直立するものと、3・5・8の様に外反するものが存在し、7の様に擬凹線文を施さないタイプも散見される。また、体部の形態に関して、5・7のように頸部の窄まりが弱いものも見受けられる。9～18は広口壺、19は長頸壺である。9は体部のほぼ中央が最大径となり、短い頸部に直立する口縁を持ち、外面には擬凹線文を施す。頸部内外面はミガキ、体部外面はハケ後ナデ、内面はケズリ調整により仕上げている。また、肩部に山形の線刻(記号文)が認められる。10・11・12も同様の仕上がりとなるが、11・12は口縁部が外反し、11には擬凹線文が認められない。12には円弧と直線を組み合わせた線刻(記号文)が施されていた。円弧が直線を切っていた。13は口縁部を強く外反させ擬凹線文を施す。体部外面、頸部内面はミガキ調整により仕上げられ、体部内面はケズリ調整が認められる。14・15は口縁部に擬凹線文を施すとともに端面にキザミを有する。14ではキザミの間隔が狭く施された部分があり、そこから先にはキザミが認められず、全周はしないと考えられる。15では肥厚した口縁部下端にもみられる。16～18は外反する頸部を屈曲させ、口縁端面を下方に肥厚し擬凹線文を施す。さらに17・18では、円形浮文を貼付している。また18は頸部と体部の境

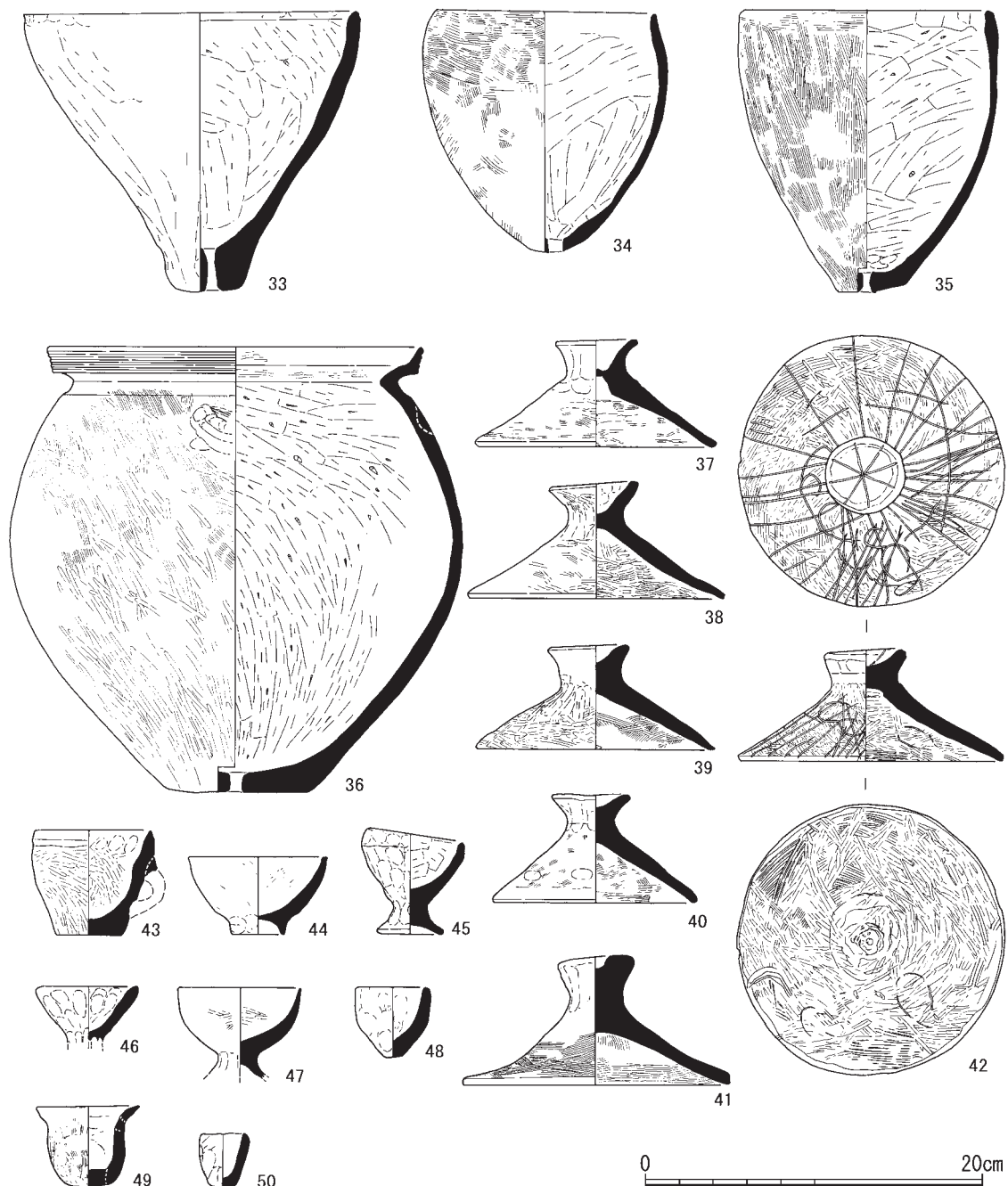


第16図 出土遺物実測図(1) A地区：土器



第17図 出土遺物実測図(2) A地区：土器

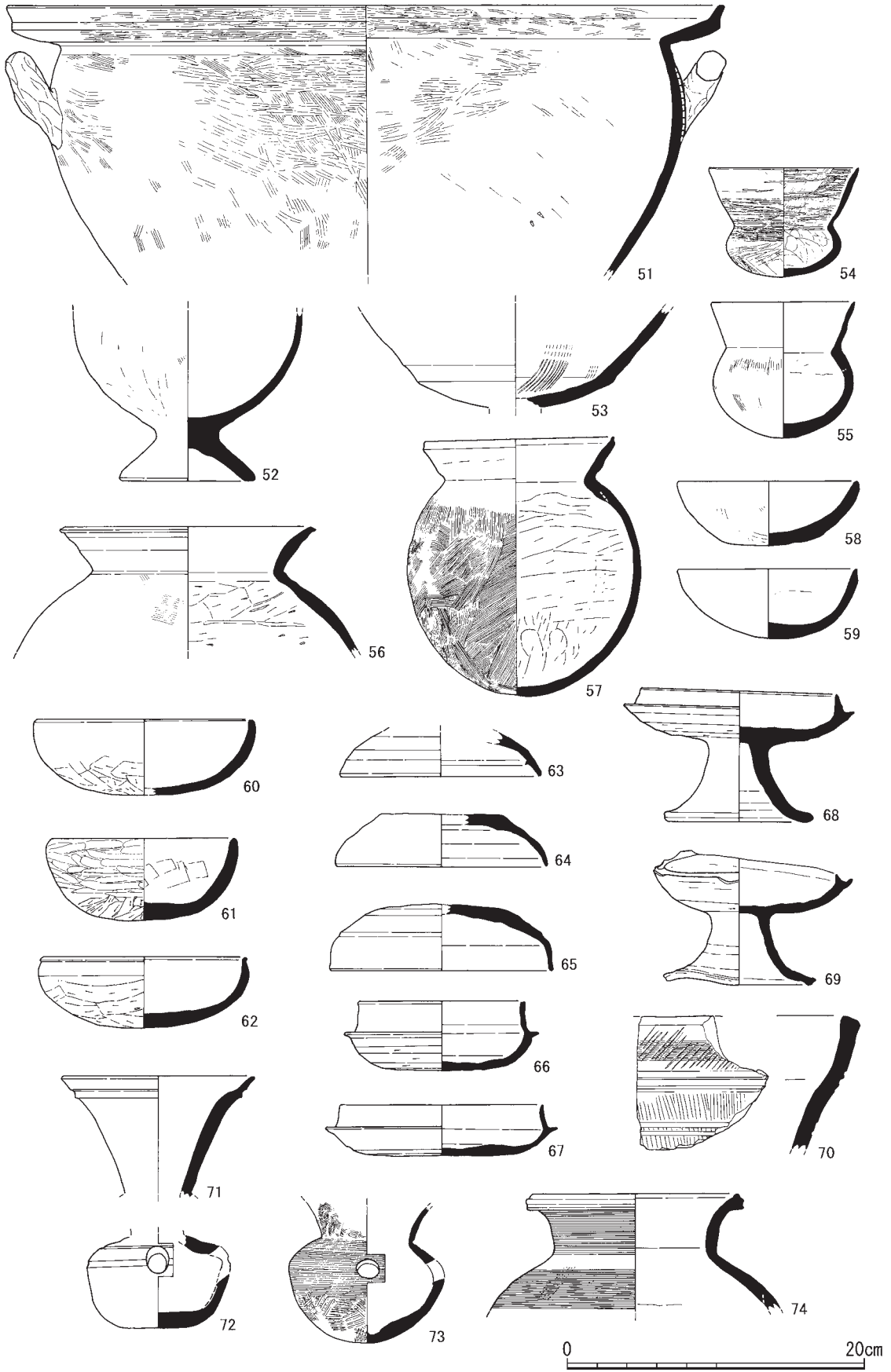
界に1条の突帯を設け刺突文を廻らしている。19は内外面ともに細かなミガキ調整により仕上げられており、端部外面には擬凹線文が施される。20～22は高杯である。20は椀状の杯部から口縁部が外方に屈曲し端部は短く直立する。脚柱部は直線的に延び、下部1/3程の位置に3か所の穿孔が施され、そこから大きく外方へと開く。内外面ともに細かなミガキ調整により仕上げられている。21は浅い椀状の杯部を呈し、口縁端部をわずかに外上方につまみ上げている。脚部裏面はハケ、その他の内外面は細かなミガキ調整により仕上げられており、杯部内面には暗文様に放射状のミガキが認められる。穿孔は1か所のみである。22は浅い皿状の杯部を呈し、口縁部が外反気味に立ち上がる。内面はハケ、外面はミガキ調整で仕上げられている。23～26は器台である。23は受け部と脚部が「く」字状に屈曲する。内外面ともハケ調整で仕上げられており、口縁端部はナデにより丸くおさめている。受け部の比率が脚部を凌駕している。24も23と同様に受け部と脚部が「く」字状に屈曲するが、その屈折は緩やかで円弧を為す。内外面ともハケ調整により仕上げられ、口縁端部はやや内弯している。25は受け部を欠くが脚柱部以下、丁寧にミガキ調整が施されている。26は装飾器台である。受け部の上にさらに受け部を作り付けており、上段の受け部には不均等な水滴型の透かし孔が5方向に穿たれている。受け部の口縁外面にはそれぞれ擬凹線文が施され、丁寧なミガキ調整で仕上げられている。27～30は鉢である。平底で砲弾型を呈する。27は内外面ハケ調整の後、疎らにミガキ調整を施している。28・29は外面ハケ調整、内面はケズリ調整である。28は小型で口縁部がやや外反する。30には脚台が作り付けられる。外面ハケ調整、内面は丁寧なミガキ調整である。27は調整が他とは異なる。31～35は有孔鉢である。いずれもが外面はハケ調整、内面はケズリ調整である。31は器高に比して口径が大きく、33は体部下半が窄まり安定感を欠く。また、34のみ平底とはならず尖底気味である。36は底部に穿孔を有する甕である。口縁部外面に擬凹線文を施しており、肩部に把手の剝離痕跡が確認できる。31・33・35・36には底部並びに外面下半に使用に伴う煤の付着が認められる。37～42は蓋である。表裏ともにハケ調整が施されている。42には表裏面に線刻が確認される。表面は中央で交差する直線を粗雑に描き、それとともにやや崩れたアルファベットの「C」形を連ねて描き込んでいる。裏面には「C」形が3か所に描き込まれている。43は小型鉢である。手捏ねにより成形されており、内外面は丁寧にミガキ調整されている。体部は底から斜め上方に延びた後、口縁部は若干の内弯傾向を呈する。上端内面には指頭圧痕が残る。把手が1つ付けられていたものと考えられ、剝離痕跡が確認できる。44～50はミニチュア土器である。44～48・50は鉢形を呈し、44は内弯気味に大きく開く体部に高台が付く。45～47は脚台が作り付けられ、45・46は全体に指頭圧痕が明瞭に残る。47はナデの後、ミガキ調整が施される。48・50は砲弾形を呈し、平底・丸底と底の形状がそれぞれ異なる仕上げとなっている。49は口縁部を大きく外反させ、甕形としている。51は鉢である。口径が48cmを測る大型品である。口縁部を大きく外方に屈曲させた後、端部を上方に拡張している。口縁部外面に擬凹線文は施されていない。体部外面はハケ調整の後、疎らにミガキ調整を施しており、肩部には把手の剝離痕跡が認められる。現状では1か所が確認できるのみであるが、対面する位置に計2か所取り付けられていたものと考えられる。52は壺ないし



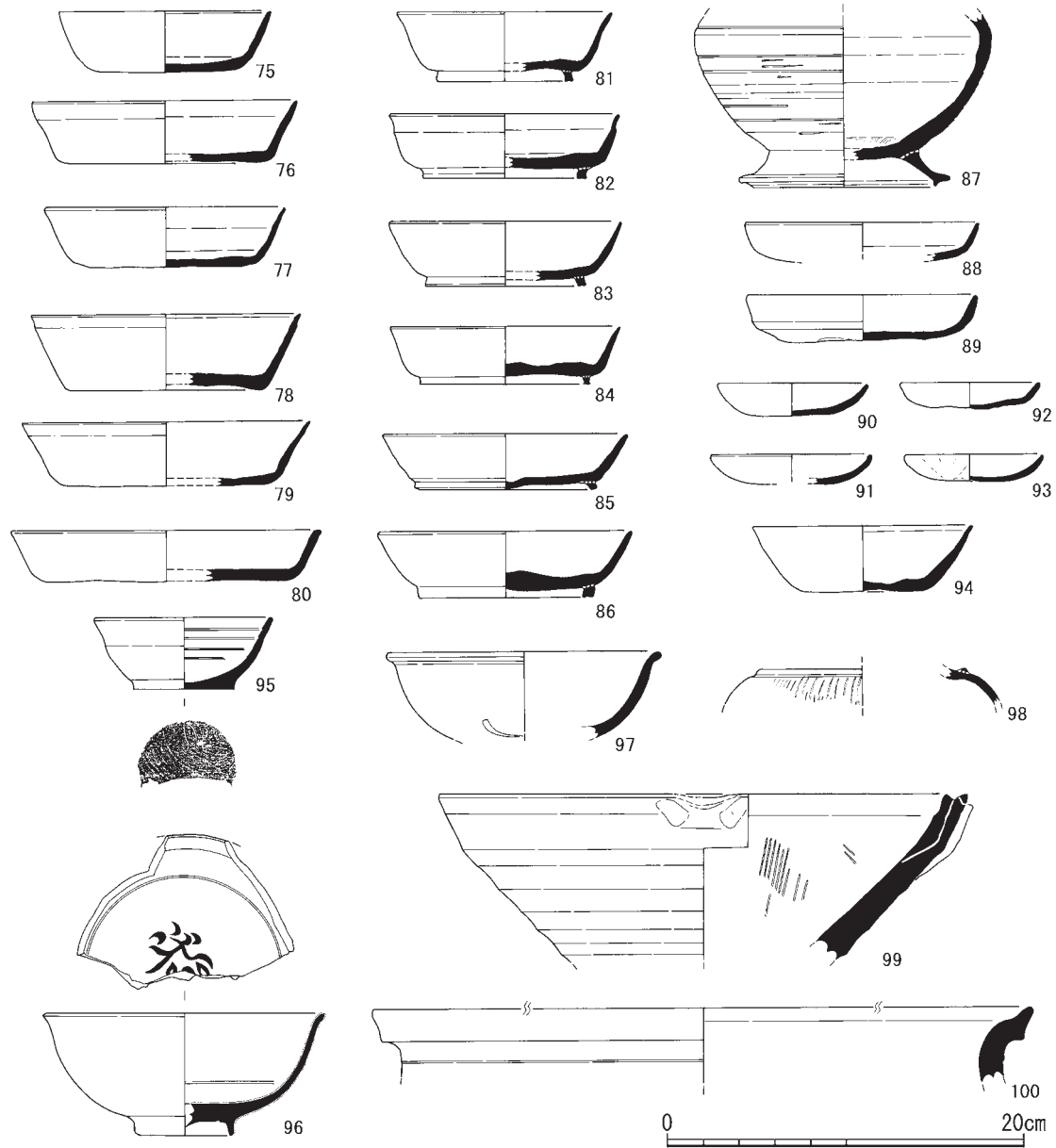
第18図 出土遺物実測図(3) A地区：土器

は甕の脚台部、53は高杯の杯部である。54・55は小型丸底壺である。54は小さな体部に大きく開く口縁部を有し、体部内面はケズリ調整、体部外面・口縁部内外面は丁寧なミガキ調整により仕上げられている。器壁も薄く、非常に繊細な印象を受ける個体である。55に比して古相の特色を有する。55は体部の比率が口縁部を凌駕し、その器壁も厚く外面調整もハケである。56・57は甕である。内面をケズリ、外面をハケ調整で仕上げている。57では口縁端部を上へつまみ上げている。外面には煤の付着が認められる。58～62は土師器杯である。60～62は下半をケズリ、上半をナデにより仕上げている。60・61は口縁端部が内弯する。62は口縁部を直立させた後、端部をわずかに外反させる。底部中央に黒斑が認められ、見込みを除く内面と、外面上半に赤色顔料が



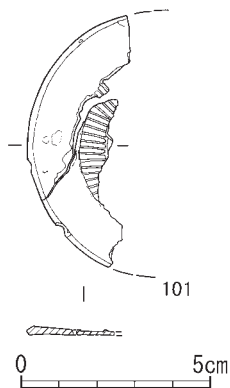


第19図 出土遺物実測図(4) A地区：土器



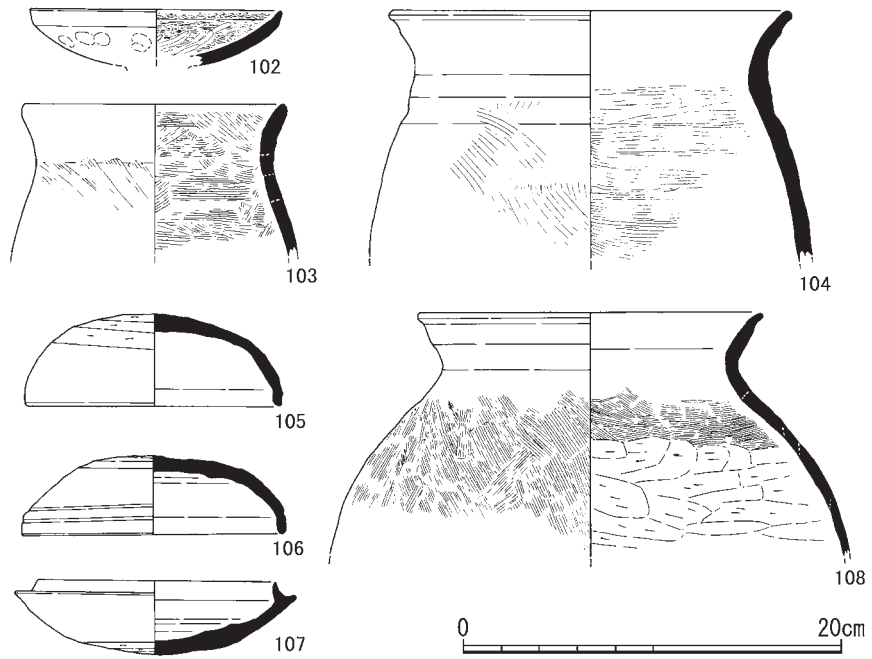
第20図 出土遺物実測図(5) A地区：土器

残存する。63～65は須恵器杯蓋、66・67は杯身、68・69は高杯である。69は大きく焼け歪んでおり、近隣に未確認の須恵器窯の存在が窺われる。70は甕の口縁部である。2条1単位の凹線を2段にわたり施している。71～73は甕の口縁部と体部である。71は内面に自然釉が厚くかかる。72は平底を呈し、張った肩部に穿孔している。73は口縁接合部が太く、やや古相を呈する。74は甕である。75～80は須恵器杯Aである。81～86は須恵器杯Bで、いずれも高台を貼り付けている。87は壺である。88～93は土師器皿である。90はS P12から出土した。口径8.3cm、器高1.9cmを測る。ナデ調整により整形されている。13世紀代に属すると考えられる。94・95は須恵器碗である。96・97は青磁碗である。96は削り出し高台で、



第21図 出土遺物実測図(6) A地区：鏡

見込みに刻花文を有する。98は須恵器である。長頸壺の頸部突帯付近と考えられる。胎土は精良で、焼成も非常に堅緻である。ヘラ描きによる装飾が認められる。99は越前焼の播り鉢である。片口で、脆弱ではあるが7条1単位の播り目が刻まれている。100は丹波焼の甕口縁

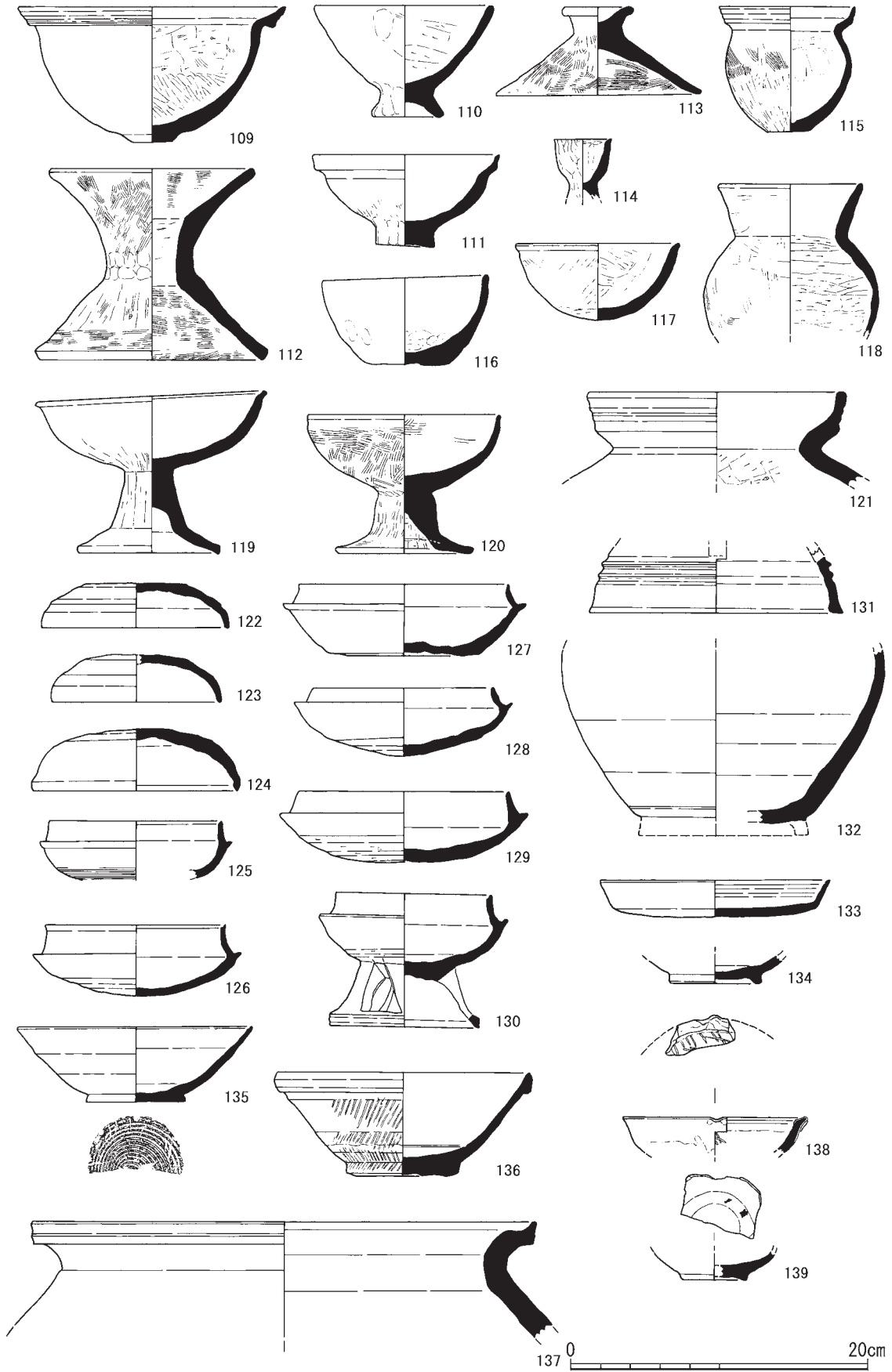


第22図 出土遺物実測図(7) A地区：土器

部である。101は小型彷彿鏡である。S D01aの埋土中から出土した。縁辺部が1/3程度残存するのみで、外区の櫛歯文を確認できるが、内区や紐は残存していない。直径は7.0cmに復元可能である。102はS X02から出土した土師器高杯の杯部である。外面は摩滅が激しく調整は不明であるが、内面はミガキ調整で仕上げられている。103～107はS K15から出土した。103・104は土師器の甕である。いずれも下半は残存していない。内外面ハケ調整、口縁部外面はナデ調整で仕上げている。105・106は須恵器杯蓋、107は須恵器杯身である。108はS P16から出土した土師器の壺である。外面ハケ調整、内面頸部以下はケズリ調整である。

109～140はB地区から出土したものである。109・113・116～139はS D01a、110～112、114・115・140はS D01bから出土している。

109～111は鉢である。109は口径17.8cm、器高9.2cmを測り、平底を呈する。口縁部を水平に屈曲させた後、斜め上方へ拡張し、外面に擬凹線文を施している。外面調整は摩滅が激しく不明であるが、内面は下半がミガキ、上半がケズリ調整で仕上げている。110・111は脚台を有する。110は、ユビオサエによって輪状に高台を作り出しているが、111は円柱状に突出させ、側面をユビオサエにより整形している。平底である。また、口縁部は外反させた後、上方に屈曲させ面を作っているが、その部分に擬凹線文を施すことはしていない。110・111ともに外面に煤の付着が認められる。112は器台である。大きく開く受け部と脚部の間に短い柱状部が存在する。外面上半にはハケメが残るが、下半はきれいにナデ調整で仕上げられている。113は蓋である。全体をハケ調整で仕上げている。114はミニチュア土器である。手捏ねの粗製品で口縁端部をつまんでわずかに外反させている。脚部を欠損する。115は小型の甕である。口縁部外面に擬凹線文を有する。外面は上半がハケ、下半がケズリ、内面は頸部以下をケズリ調整により仕上げている。



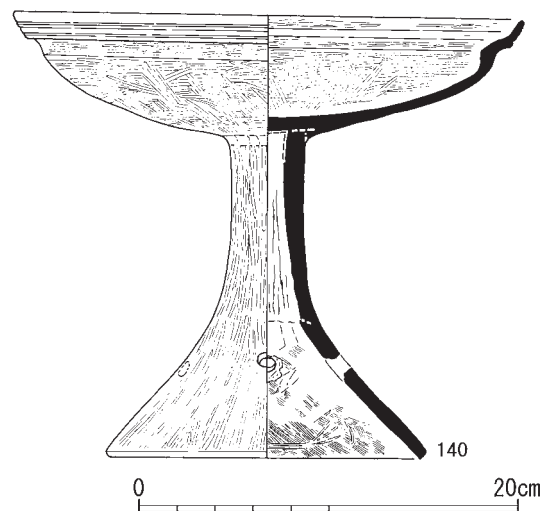
第23図 出土遺物実測図(8) B地区：土器

116は鉢である。内面は不均一のナデ調整により凹凸が激しく残っている。140は弥生土器の高杯である。口径は26.9cm、器高は23.6cmを測る。浅い椀状の杯部から口縁部が水平に屈曲した後、端部は斜め上方へ延びる。口縁部外面には擬凹線文が施される。脚柱部は直線的に延び、1/2程度から大きく外方へと開く。下部1/3程の位置に4か所の穿孔が施される。内外面ともに細かなミガキ調整により丁寧に仕上げられている。以上が弥生時代に属する遺物である。

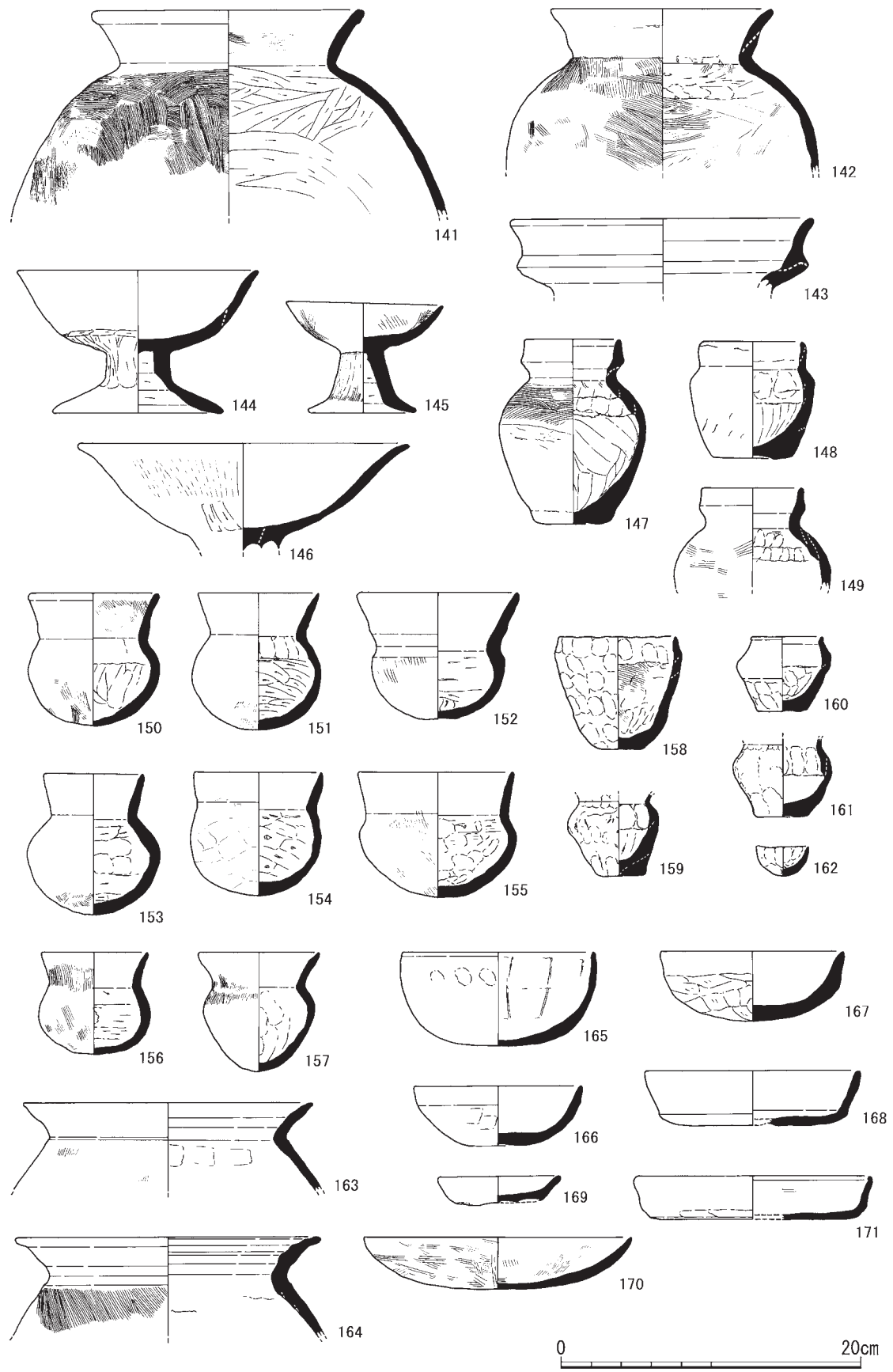
117は土師器の杯である。口径10.9cm、器高5.2cmを測る。口縁端部をわずかに外反させている。118は土師器の壺である。球形の体部に外方へ開く口縁部を有する。外面に黒斑が認められる。119・120は土師器の高杯である。119は椀状の杯部を呈し、口縁端部を外反させる。脚柱部はやや短く、裾部は大きく開く。120も椀状の杯部を呈し、口縁端部を強くナデ、直立させる。脚柱部は太く短く、端部に向かう屈曲もややきつめである。121は土師器の壺である。短い頸部に直立する口縁を持つ。122～124は須恵器杯蓋である。125～129は須恵器杯身である。130は須恵器高杯である。三方に方形の透かし孔を穿つ。131は須恵器器台の脚部である。方形の透かし孔を有し、その下部に突帯2条を設ける。以上が古墳時代に属する遺物である。以下、古代から中世に属する遺物について記述する。

132は須恵器の壺である。下半が残存するのみである。高台は剥離して欠損する。133は須恵器の皿である。胎土は精良で焼成も堅緻である。134は緑釉の椀である。胎土は精良で焼成は硬質である。見込み部分が1/2程度出土しているに過ぎないが、高台は削り出しており、畳付きにも釉が認められる。135は須恵器の椀である。口径は15.6cm、器高は5.1cmを測る。突出した平底を側面を削ることにより成形している。底面には明瞭な回転糸切り痕が認められる。136は白磁椀である。口径は16.8cm、器高は7.0cmを測る。口縁端部が玉縁状となり、高台は削り出しているが、突出はわずかである。見込みには一条の圈線がめぐり、体部外面には成形の際の工具痕が残る。外面下半は露胎である。137は丹波焼の甕である。口径33.8cmを測る。138は古瀬戸の皿である。口縁部が1/12程度残存するのみであるが、口径は12.2cmに復元できる。薄く灰釉が掛けられ、淡い緑灰色を呈する。片口で、内面におりし目を刻んでいる。14世紀の所産である。139は朝鮮王朝陶器の皿である。見込み付近が1/3程度残存している。高台は削り出しており、見込みには目痕が2か所確認できる。内外面共に灰色の釉薬が畳付きを含めて全面に施釉されている。16世紀頃と考えられる。S D01 aからは、弥生時代後期、古墳時代、古代～中世に到るまで広い時期の遺物が出土している。

141～185はC地区から出土したものである。先述したように遺物包含層からの出土である。

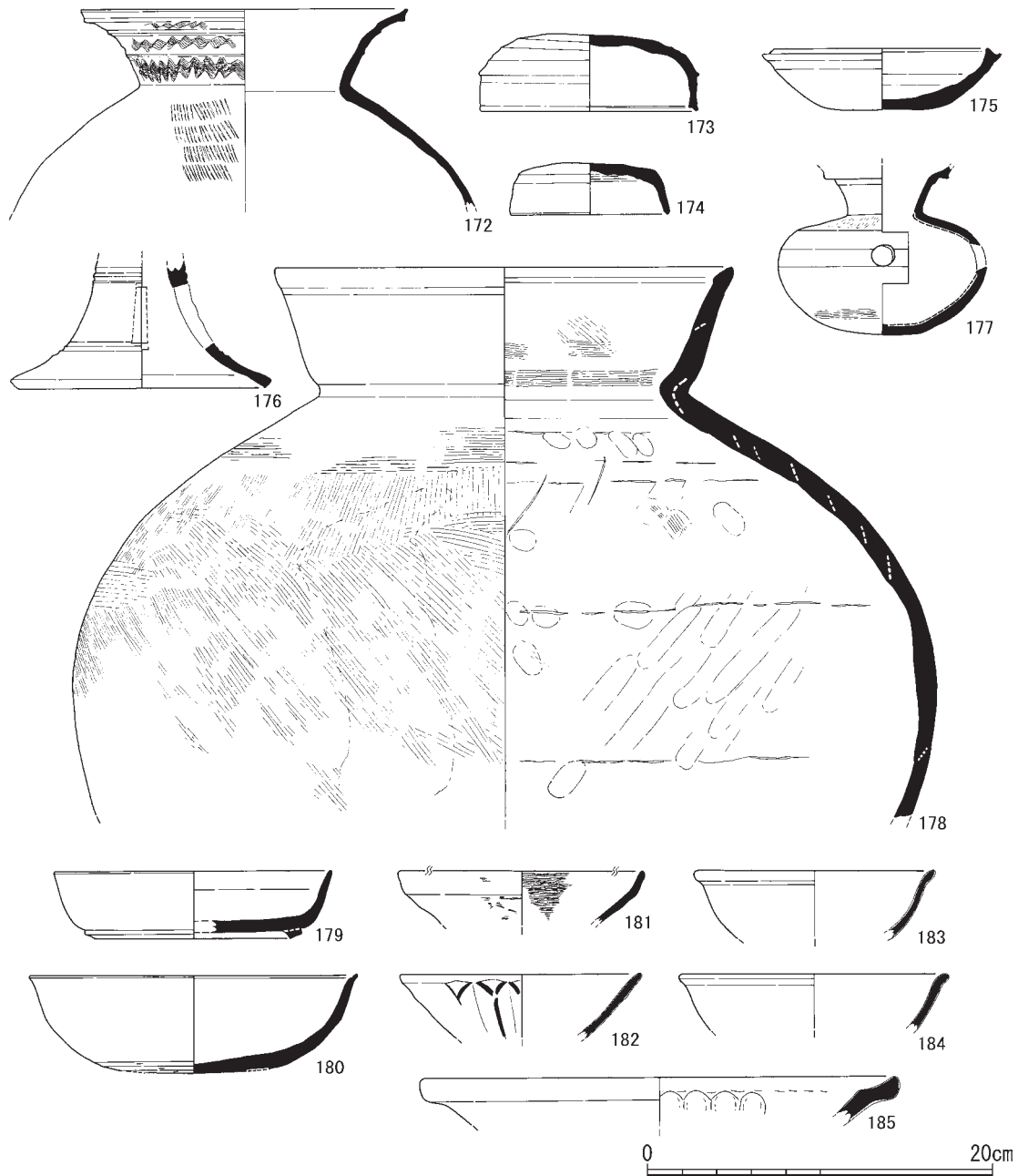


第24図 出土遺物実測図(9) B地区：土器

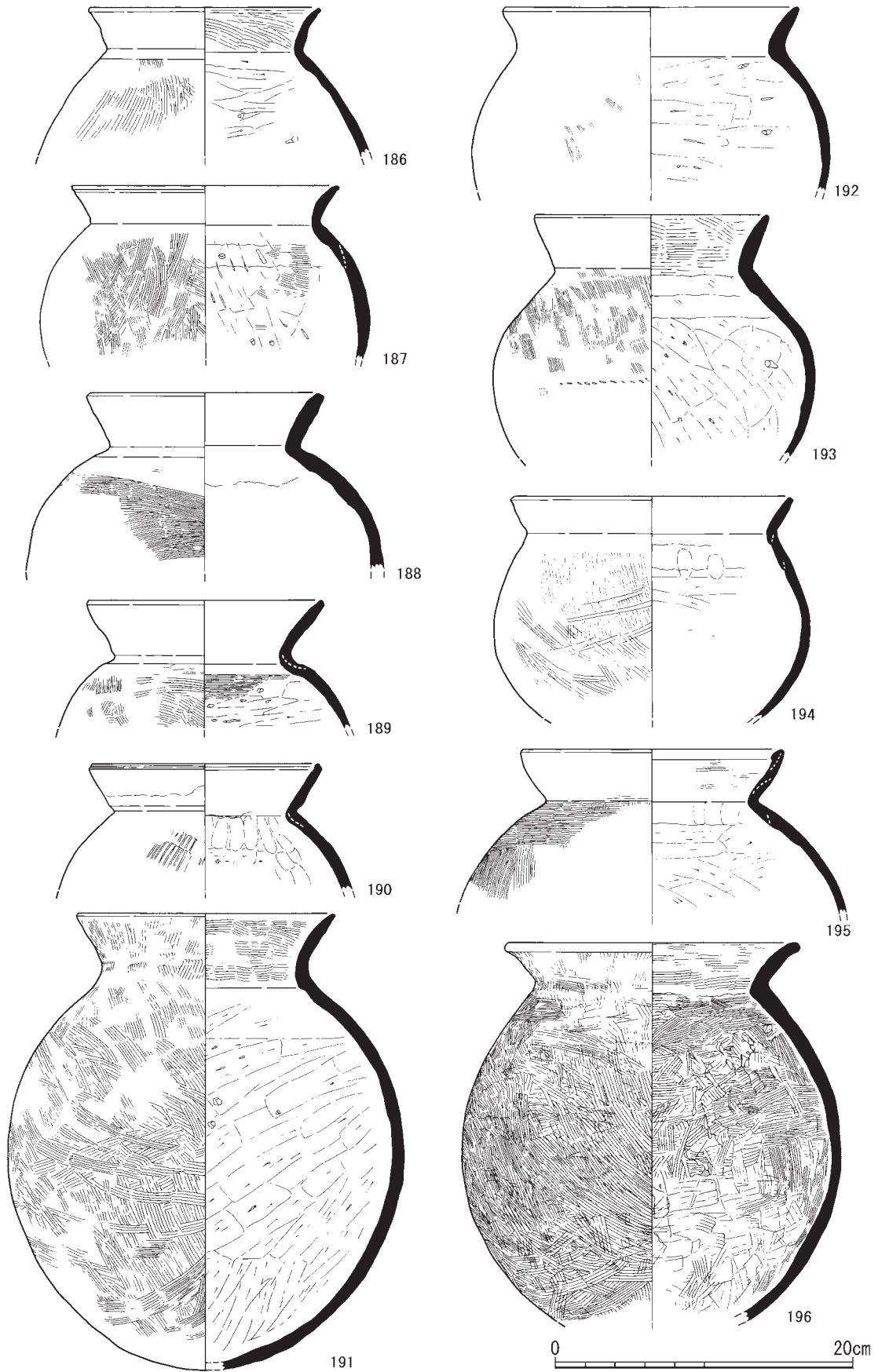


第25図 出土遺物実測図(10) C地区：土器

141・142は甕である。口縁部はナデ、体部外面はハケ、頸部以下の内面はケズリ調整により仕上げている。143は壺である。口縁部のみが残存している。144～146は高杯である。147～149は小型の壺である。147は器高12.4cm、口径6.2cmを測る。短く外反する頸部から口縁部を直立させている。口縁部はナデ調整、体部外面はハケ調整の後、下半をナデにより磨り消している。平底を呈し、外面下半に黒斑が認められる。148は斜め上方に伸びた体部が肩部で内向きに屈曲し、口縁部を短く直立させる。149は下半を欠損するが、147と同様の形態である。150～157は小型丸底壺である。152は体部上半の内弯が弱く、口縁部が大きく外へ開く。154・155は体部の窄まりが弱く、口縁部が直立気味となっている。156は完形で出土しているが、器高7.1cm、口径6.9cm



第26図 出土遺物実測図(11) C地区：土器



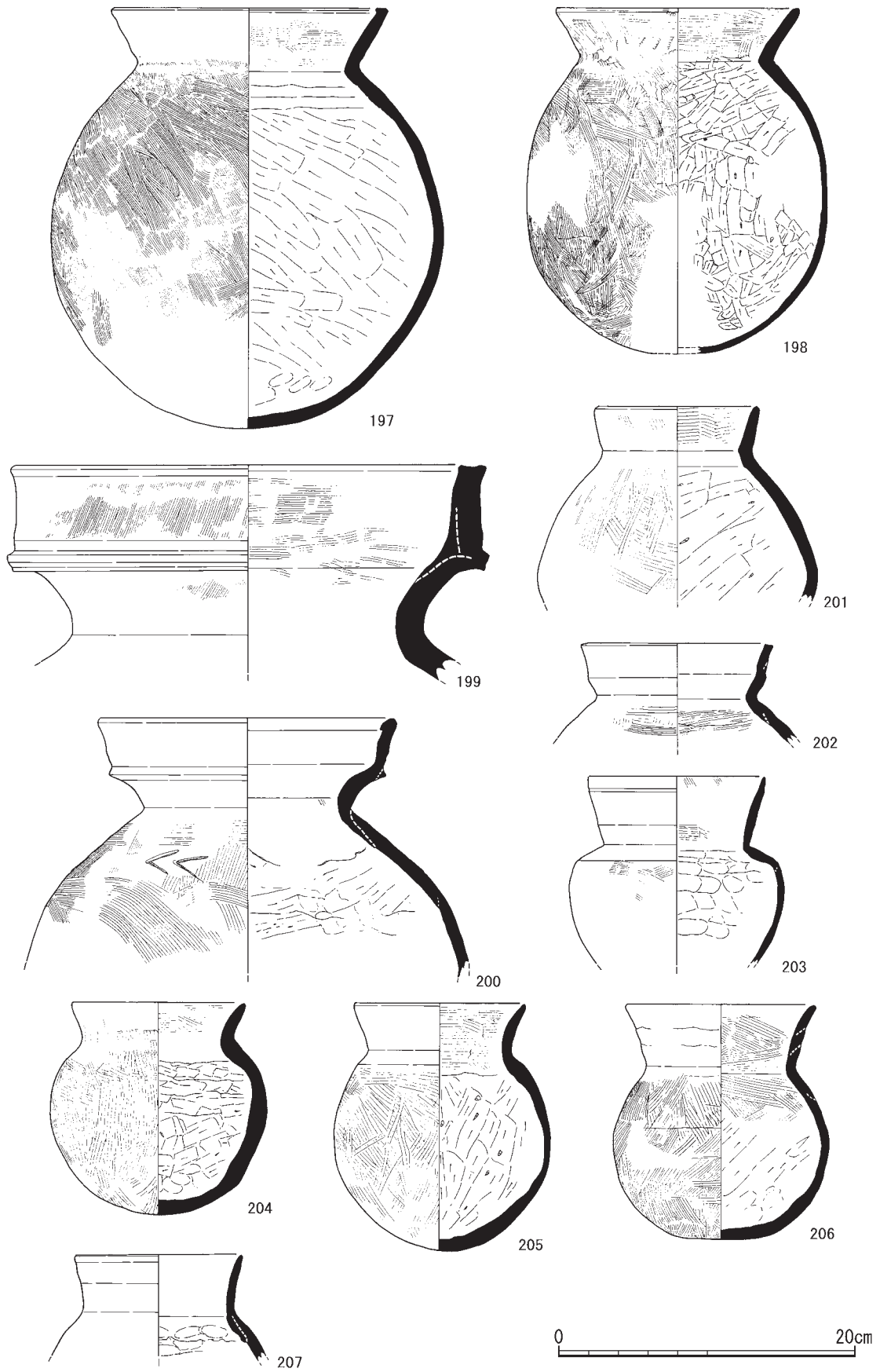
第27図 出土遺物実測図(12) D地区：土器



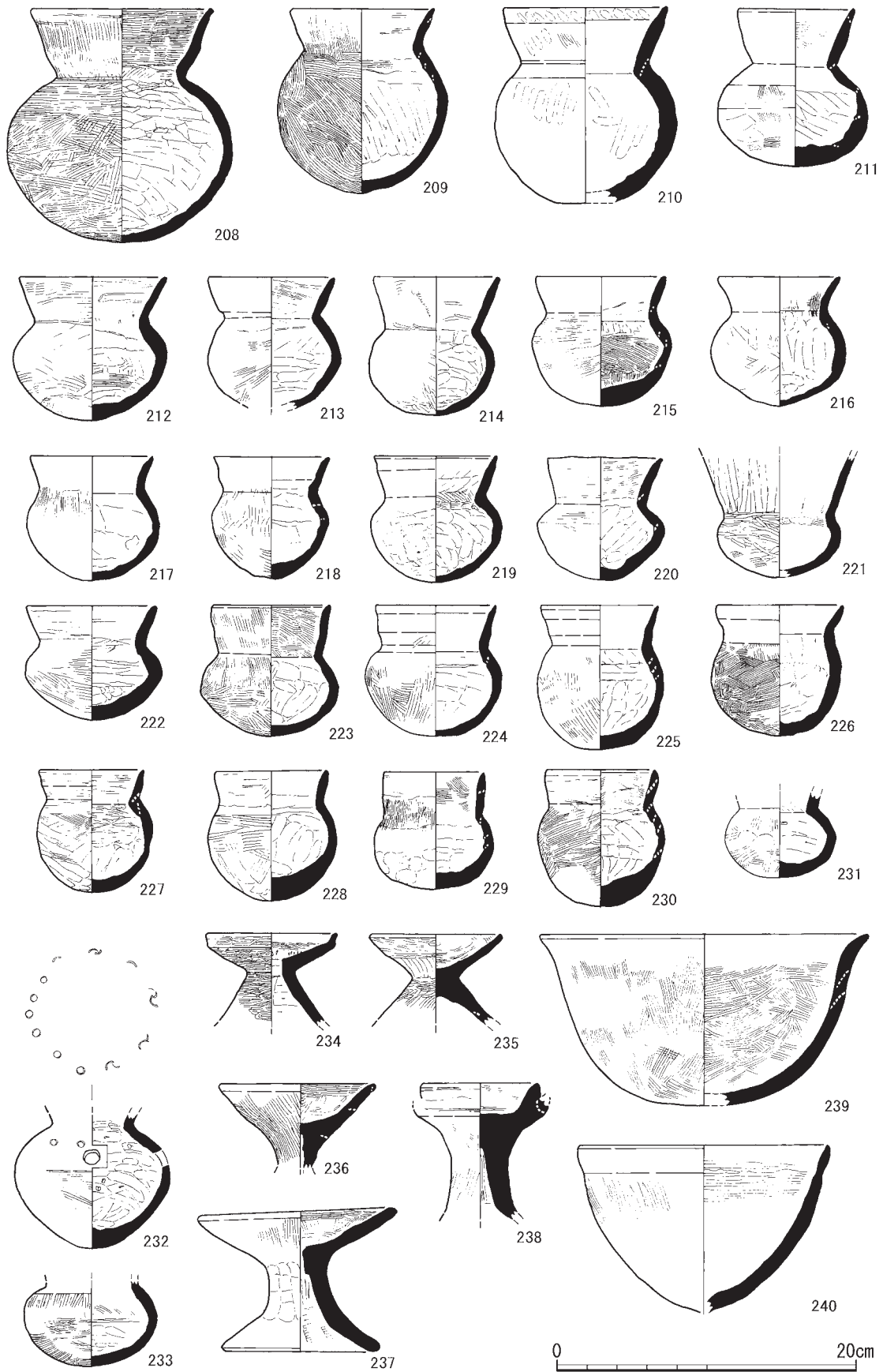
を測り、他例よりも小型である。157は尖底である。小型丸底壺は完形率が高く、埋没に際して、あまり距離を動いていないものと考えられる。158～162はミニチュア土器である。手捏ねの粗製品で、158は成形の際の指頭圧痕が外面に明瞭に残る。159～161は、平底を呈し、内弯する体部に短く外反する口縁部を呈する。内外面共に指頭圧痕が明瞭に残る。162は半球形の体部を呈する鉢である。口径3.5cm、器高2.0cmを測り、器壁も非常に薄い小型品である。163・164は甕である。頸部以下は残存しない。164は口縁部に強いナデによる凹凸が認められ、「青野型甕」である。<sup>(注6)</sup>165～168は土師器杯である。165は全体の1/3程度が残存しており、口径12.6cm、器高6.3cmを測る。外面は摩滅が激しいが、内面には赤色顔料が塗布されている。166は厚い器壁を呈し、外面下半はケズリ調整で仕上げている。168は口径14.2cm、器高3.7cmを測る。169～171は土師器皿である。169は口径8.0cm、器高1.8cmを測る。170は口径17.8cm、器高3.5cmを測る。胎土は精良で、焼成も良好である。171は口径15.5cm、器高2.9cmを測る。172は須恵器甕である。頸部を突帯で3段に区画し、それぞれに波状文を施す。173・174は須恵器杯蓋である。175は須恵器杯身である。176は須恵器高杯の脚部である。177は甗である。口縁部を欠損する。178は土師器の壺である。口縁内面端部を肥厚する。大型品で、口径26.2cm、最大径50.0cmを測る。下半部は欠損する。179は須恵器杯Bである。180は須恵器椀である。高台は欠損する。181は瓦器椀である。口縁部付近が1/10程度残存する。体部が屈曲しており、その上部と内面は丁寧にミガキが施される。復元口径は14.0cmである。12世紀後半の所産で、丹後地域での出土は稀有な例である。182～184は青磁椀、185は青磁盤である。いずれも龍泉窯産である。182は1/8程残すのみであり、下半は欠損する。口径は13.8cmを測る。外面に蓮弁文を施す。183・184は無紋の椀である。185は、口縁端部付近が1/10程残存するのみである。口径は27.2cmに復元可能である。内面に蓮弁文を施す。

186～319はD地区から出土したものである。313～319はS K 01から出土したが、それ以外は調査区南半において検出した遺物包含層から出土したものである。

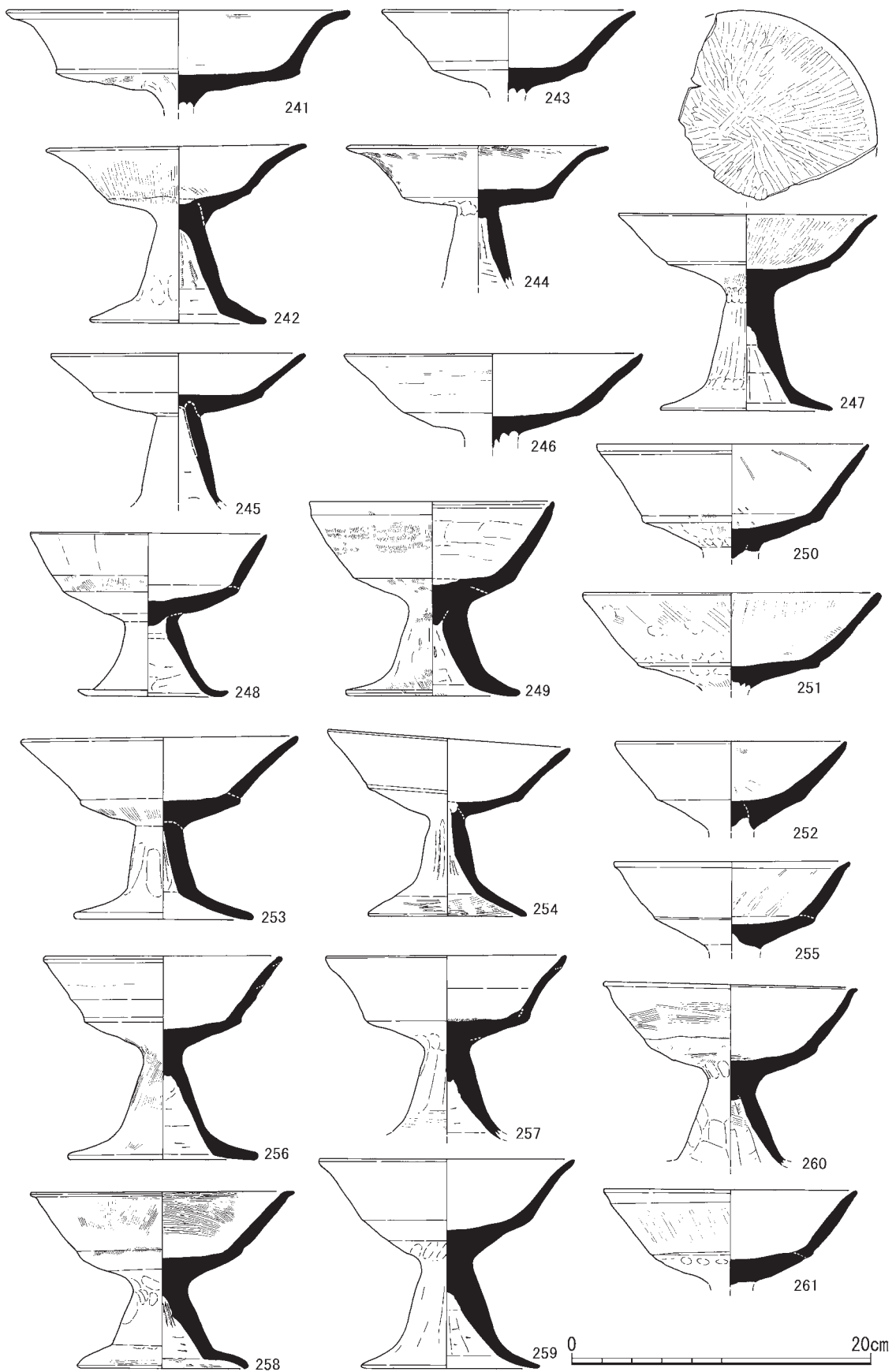
186～198は甕である。基本的に球形の体部を呈し、頸部が「く」字状に屈曲して口縁部に到る。外面はハケ調整、内面は頸部以下をケズリ調整により仕上げている。186は口径15.2cmを測り、198は口径16.3cmを測り、底部を一部欠損するが残存器高は23.4cmを測る。肩部の張りがなだらかで、体部はやや楕円形を呈する。187は口径17.8cmを測り、192は口径19.6cm、194は口径18.4cmを測る。以上3点に関しては、口縁部は外反するが、その立ち上がりが短く、体部最大径に比して、頸部の径が大きいタイプである。188は口径15.4cmを測る。189は口径15.6cmを測り、191は口径17.2cm、底部を一部欠損するが残存器高は30.8cmを測る。口縁部は体部から丸みを有してなだらかに接続し、外上方へと延びる。190は口径15.2cm、195は口径17.6cm、197は口径18.3cm、器高28.5cmを測る。以上の3点は、口縁部の端面内側を肥厚させる布留型の甕である。196は、口縁部を外反させながら強く屈曲させる。口径19.3cmを測り、内外面ともにハケ調整で仕上げている。199～211は壺である。199・200は二重口縁壺である。199は頸部から上側のみの出土であるが、器壁も厚い大型品である。200は肩部にヘラ描きによる簡素な羽状文が刻まれる。



第28図 出土遺物実測図(13) D地区：土器

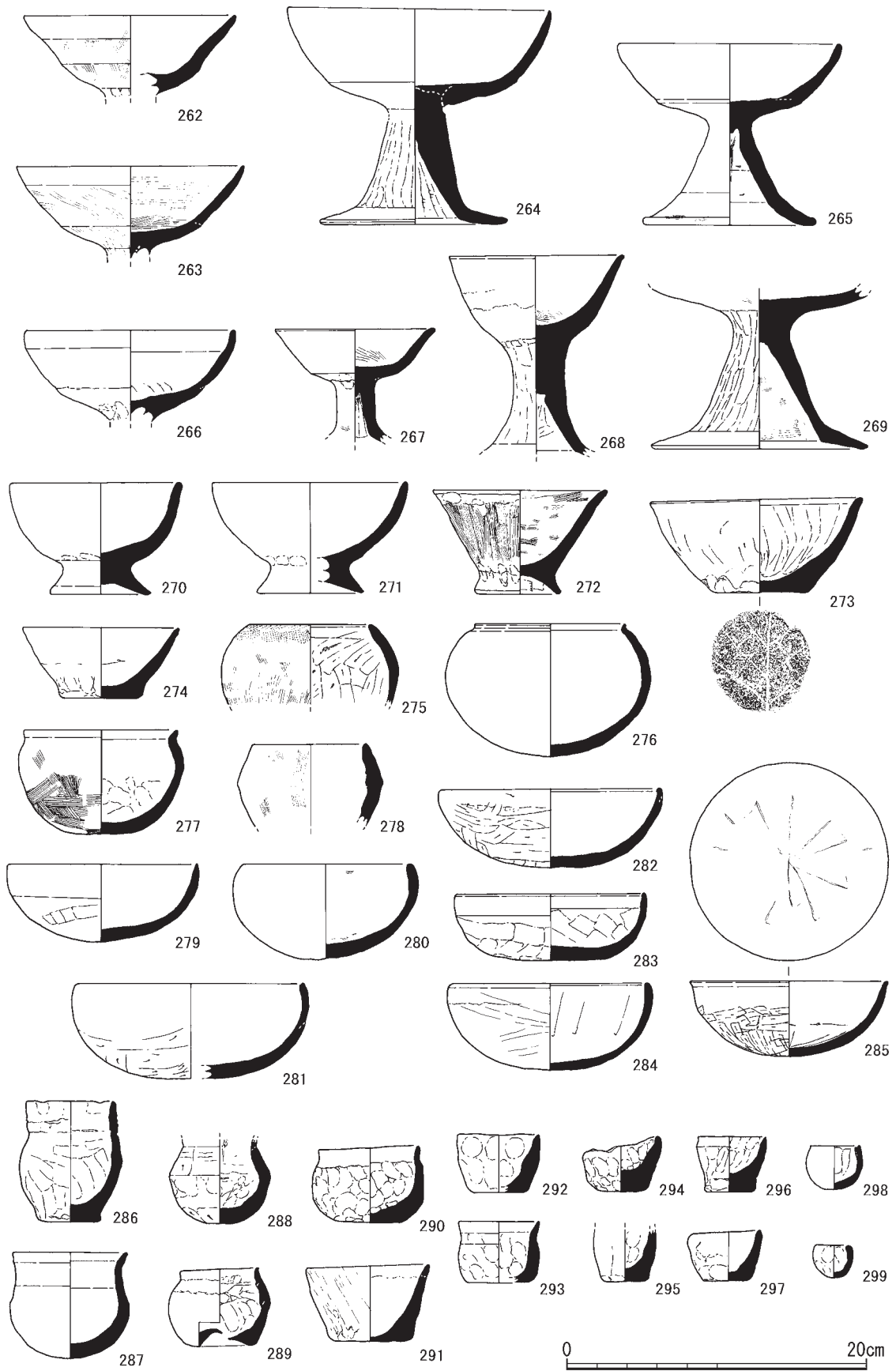


第29図 出土遺物実測図(14) D地区：土器

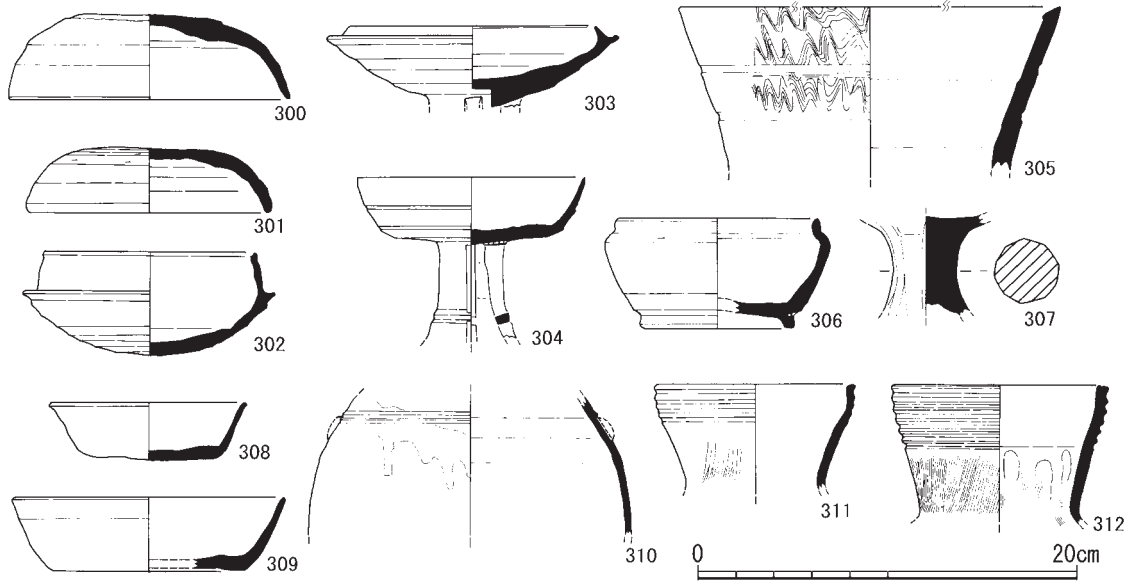


第30図 出土遺物実測図(15) D地区：土器

201は短頸壺である。なで肩で最大径が体部下半にある。体部外面はハケ、内面は頸部以下をケズリ調整で仕上げている。202～210は広口壺である。203は肩が張る形となっている。下半に黒斑を有する。204～210は、球形の体部に外上方に開く口縁部を有する。体部外面はハケ、内面はケズリ調整による仕上げを基本とする。205・209・210には、下半に煤の付着が見られる。212～233は小型丸底壺である。器高、口径共に9.0cm前後の製品が多く、規格性が想起される。211は成形後、頸から差し入れた工具が届く範囲で体部内面を削り取っており、器壁の厚みはバラつきが大きい。212～220・223・228・229はほぼ完形で出土している。221は全体の1/2程が残存するのみであるが、口径7.4cm、器高8.2cmに復元可能である。体部は横位のミガキ調整で仕上げている。小振りな体部に大きく開く口縁部を呈し、やや古相の特色を有する。228～230は口縁部が大きく外反せず直立気味に立ち上がる。230は口縁端部がやや内弯している。231～233は口縁部を欠損する。232は体部径は10.4cmを測り、体部最大径やや上寄りに焼成前穿孔を施す。また、この穿孔の対面には、打ち欠きによると思しき小穴が穿たれているが、本来の穿孔か、調査に際し後出的にできたものか判断が難しい。肩部には竹管文が巡る。2/5は円形となっているが、3/5は半截したものを互いにずらして連結し施している。214・219・222は体部下半に煤の付着が認められ、他の個体に関しても、同様の使用を推測できるのではないか。234～238は器台である。234・235は浅い皿状の受け部を呈し、脚部が大きく開く。234は受け部先端を屈曲して直立させ、体部は円孔を貫通させている。237は受け部の径が脚部のそれを凌駕している。238は受け部が二重に作られているが外側の受け部は残存していない。239・240は鉢である。239は口径21.8cm、器高11.5cmを測る。内外面共にハケ調整で仕上げられており、口縁部は外反する。体部下半には煤が付着している。240は口径16.5cm、器高11.3cmを測る有孔鉢である。体部下半には煤が付着している。241～269は高杯である。241～244は浅い杯部を呈し、杯部が大きく外反する。242はほぼ完形で出土しており、口径16.9cm、器高11.9cmを測る。脚部は裾で大きく屈曲する。245～247は浅い杯部を呈し、杯部は外反せず直線的に延びる。247は杯部内面を放射状のミガキ調整で丁寧に仕上げられており、端部のみをわずかに外反させている。248～252は深い杯部を呈し、杯部は直線的に延びる。248は口径15.8cm、器高11.0cmとやや小型で、脚部の器壁も薄くなっている。253～257は深い杯部を呈し、杯部がわずかに外反する。258～262は深い杯部を呈し、杯部は直線的に延びる。杯部の屈曲が角を成しておらず、稜線が明瞭ではない。258は脚裾部が内弯して丸みを帯びている。263～266も杯部の屈曲が角を成しておらず、稜線が明瞭ではない。杯部は内弯傾向を示している。267は小型品である。口径は10.4cmを測る。脚部下半を欠損する。268は杯部が深い椀型を呈する。口径も11.5cmと小振りである。270～278は鉢である。270～272は脚台を有する。270・271は内弯する椀状の体部を呈しており、272は外上方に直線的に延びた後、端部を外反させる。273は口径13.8cm、器高6.3cmを測る。底面に木葉痕が認められ、体部外面には黒斑を有する。274は273と同一形態を呈するがやや小型で、口径10.3cm、器高4.8cmを測る。275～278は内弯する丸い体部を呈する。275は下半部を欠損するが、口径8.0cmを測り、口縁端部外面に刺突列点文を施す。276はほぼ完形で出土しており、口径9.9cm、器高8.9cmを測る。

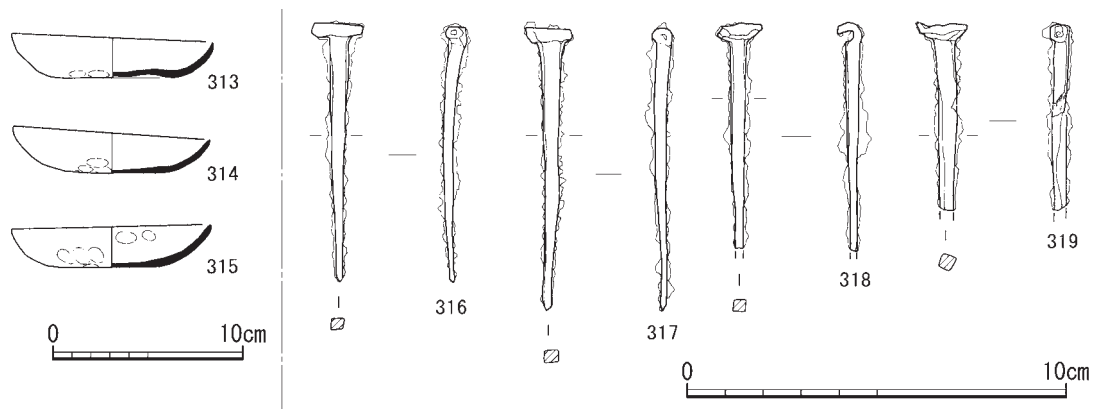


第31図 出土遺物実測図(16) D地区：土器

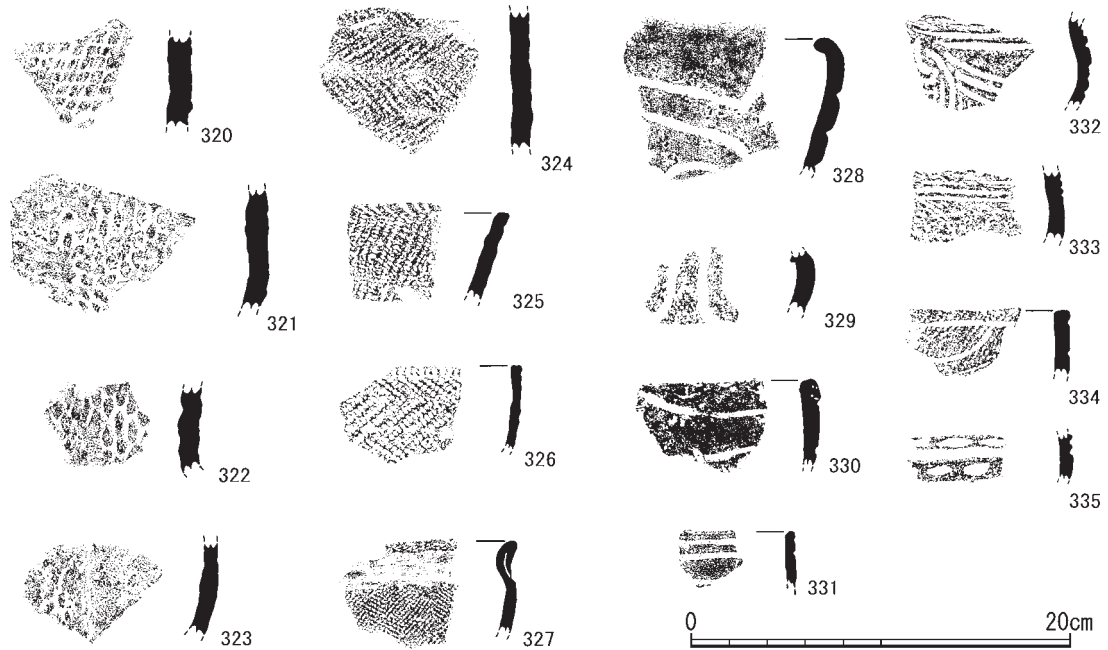


第32図 出土遺物実測図(17) D地区：土器

口縁端部を小さく摘み、外反させている。赤色顔料の塗布が認められ、体部上半に黒斑が観察される。277は内湾する体部に、口縁部をわずかに外反させている。279～285は杯である。282・283には赤色顔料の塗布が認められる。284は完形で出土している。口径12.9cm、器高5.9cmを測り、外面には黒斑が見られる。286～299はミニチュア土器である。286は器高8.1cm、口径5.7cmを測る。平底を呈し、やや内湾する体部から口縁部を短く直立させている。手捏ねの粗製品である。287は小型丸底壺を模して作られている。288～290は球形の体部に外反する短い口縁を呈する平底の鉢である。289の底部は外側から窪まされており、中央部に孔が開いている。291～297は底部から外上方に開く体部を有する鉢である。291は外面をケズリ調整で仕上げしており、その他は、内外面共に指頭圧痕が明瞭に残されている。298・299は体部が半球形を呈する鉢である。口径、器高共に3.0cm前後を測る小型品である。300・301は須恵器杯蓋である。302は須恵器杯身である。303・304は須恵器高杯である。303は有蓋高杯で方形の透かし孔が穿たれている。304は無蓋高杯で長脚二段透かし孔を有する。305は須恵器壺である。口縁部のみの出土であるが、沈線で3段



第33図 出土遺物実測図(18) D地区：土器・鉄釘



第34図 出土遺物実測図(19) 縄文土器

に区画し、最上段には二条の、中段には一条の波状文を施す。306は須恵器壺Eである。1/2程が出土している。口径10.4cm、器高5.8cmを測る。307は土師器高杯である。脚柱部以外は欠損する。多角形に面取りされており、断面形は十角形となっている。外面には赤色顔料が塗布されている。308・309は須恵器杯Aである。310は青磁の壺である。肩部付近が出土しており、耳の剝離痕が確認できる。鉄釉を流し掛けている。長沙窯産もしくは龍泉窯産と考えられる。311・312は弥生土器壺である。凹線文が施されており、IV様式と考えられる。313は口径10.3cm、器高2.2cmを測る土師器皿である。314は口径10.4cm、器高2.2cmを測る土師器皿である。315は口径10.5cm、器高2.0cmを測る土師器皿である。以上3点はS K01から出土しており、埋葬に際し供えられたと考えられる。316～319は鉄釘である。残存長は5.0～7.6cmである。棺材に使用されていたものと考えられる。

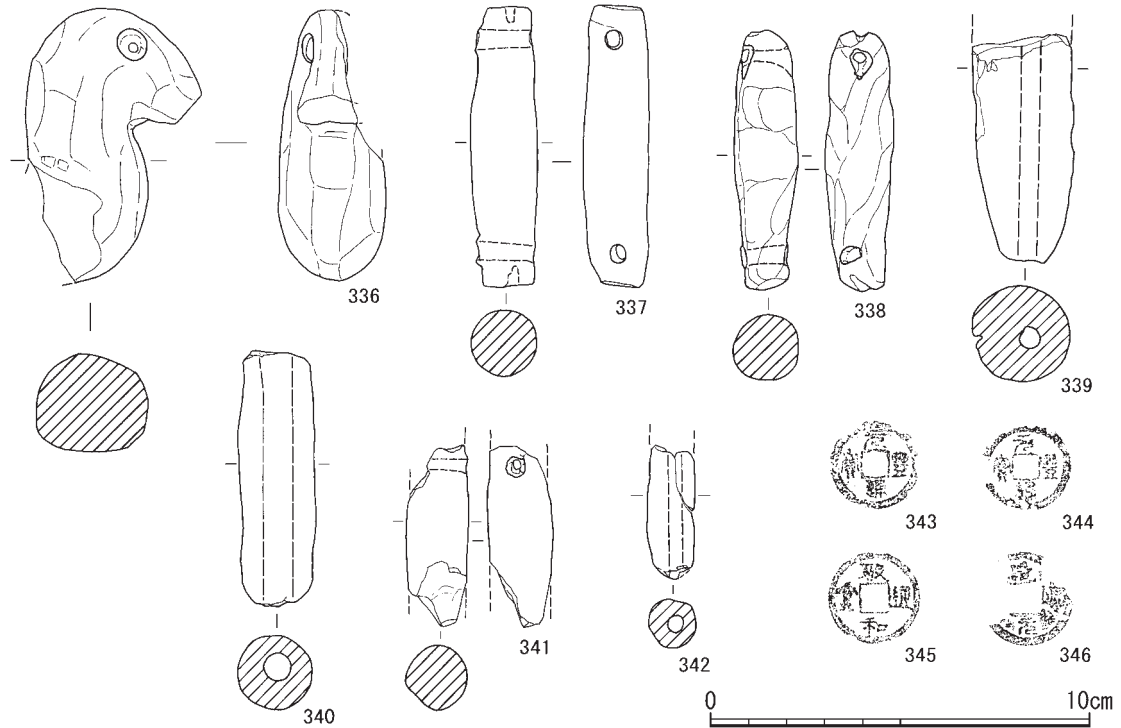
320～331は縄文土器である。326～334はA地区S D01 a、320・324・325・335はB地区、321～323はC地区からそれぞれ出土している。320～323は早期の押型文土器である。縦方向を主軸とするポジティブな楕円形文である。324～326は前期の縄文である。325は口縁部と考えられ、端面に刻み目を有する。328は後期初頭の縁帯文土器である。口縁部は内弯傾向を示す。329は中期末の北白川C式であると考えられる。327・330～335は後期に属すると考えられる。ヘラ描き沈線が施されており、沈線の間隔には粗密があり、配置にも単純な平行線や、複雑な文様を構成するものがある。335では沈線の上下に横長の刺突を連ねている。

## 2) 土製品・銭貨

336～342は土製品である。336はD地区、338～341はA地区S D01 a、337・342はB地区S D01 aからそれぞれ出土している。

336は鳥形土製品である。頸部から上側のみが出土している。左側頭部を大きく欠損するが、



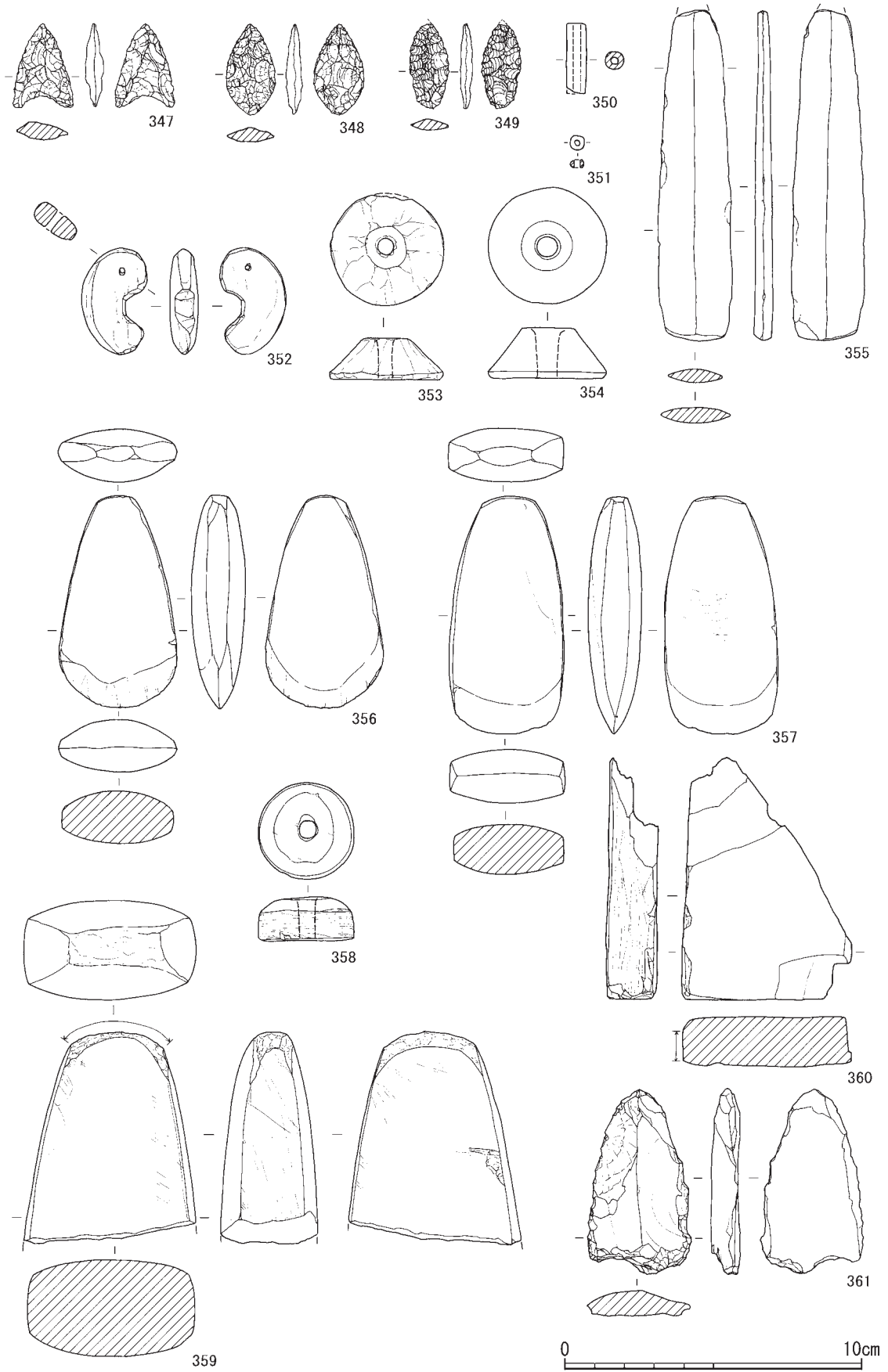


第35図 出土遺物実測図(20) 土製品・銭貨

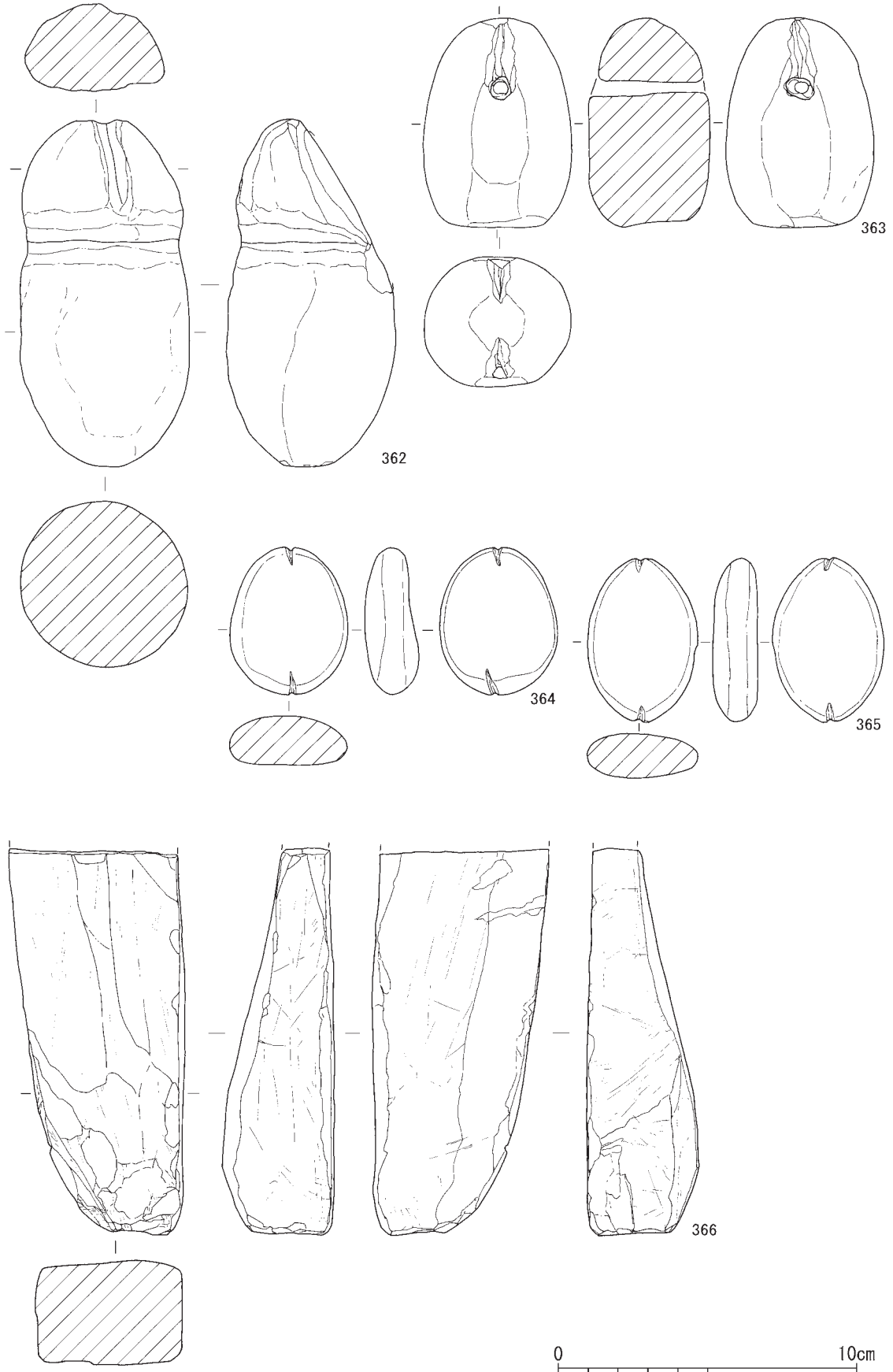
残存する右目は丸く押し窪めている。嘴を作り出しているが、先端は欠損する。その形状から水鳥を表現しているものと判断される。337～342は土錘である。337～339は須恵質、340～342は土師質に焼成されている。337は長さ7.4cm、径1.8cm、重量27.5gを測る。上下端面の中心に小穴を穿っている。338は長さ6.9cm、径1.8cm、重量22.1gを測る。上下端面に切り目を入れている。341は欠損部分があり全容は不明であるが、残存長4.8cm、径1.7cm、重量13.1gを測る。以上3点は上下端に横方向から孔を穿つタイプである。339も欠損部分が大きく全容は不明であるが、残存長6.1cm、径2.6cm、重量44.1gを測る。340は長さ6.8cm、径2.0cm、孔径0.8cm、重量26.2gを測る。342は大半を欠損する。残存長3.5cm、径1.1cm、孔径0.4cm、重量5.6gを測る。これら3点は中心に孔を穿つタイプである。343～346は銭貨である。343・344は「元豊通寶」(1078年初鑄)である。345は「政和通寶」(1111年初鑄)である。344と345は裏面同士が癒着している。これ以外に2枚が表面同士を癒着させて出土している。この他に図を示すことができなかったが、B地区の遺構精査中に「熙寧元寶」(1068年初鑄)、「皇宋通寶」(1038年初鑄)が出土している。

### 3) 石製品

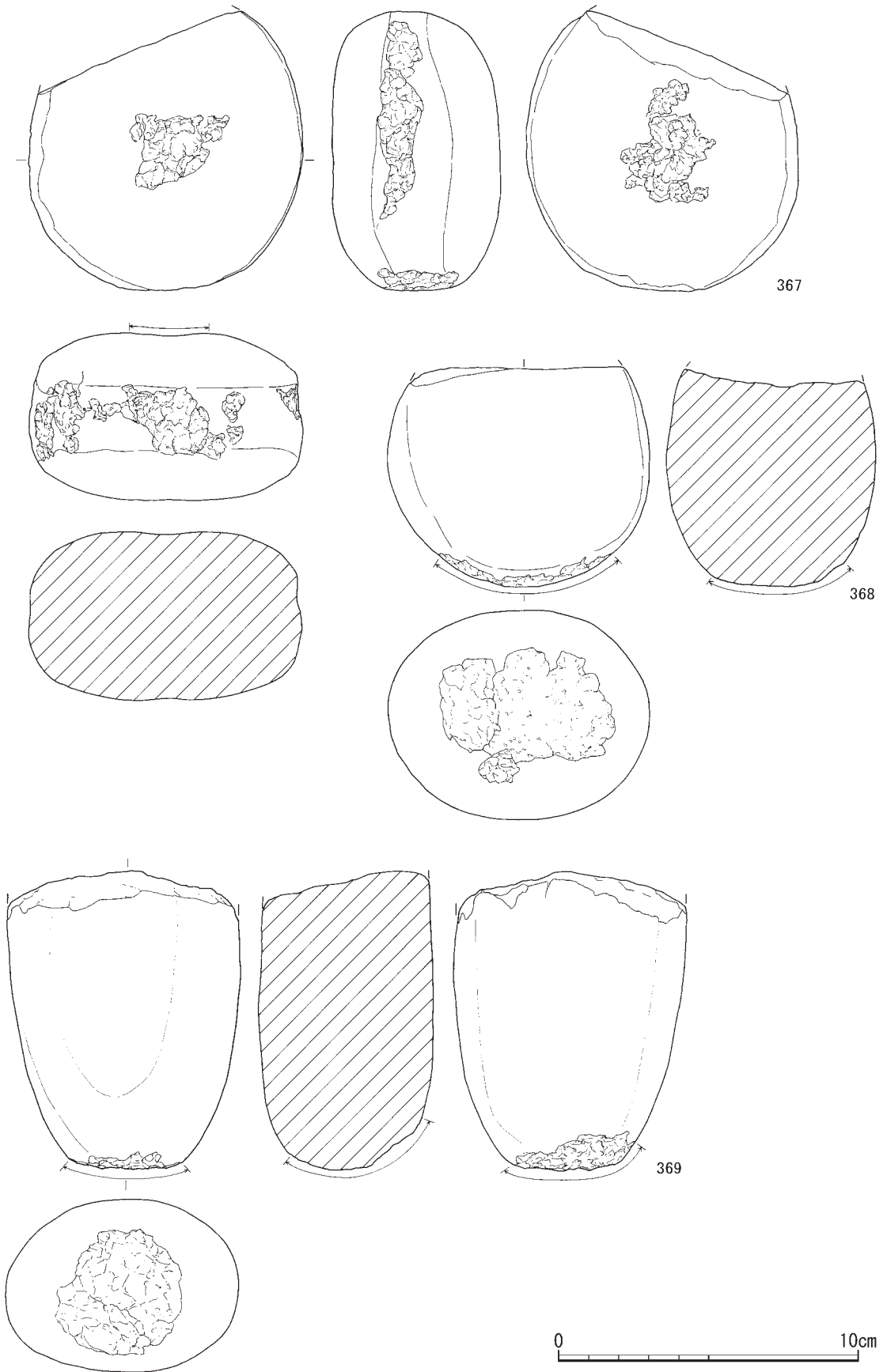
347～374は石製品である。347・348・353・355～358・360・361・363～369・371・374はA地区から出土しており、355がS D01 bから、それ以外はS D01 aからの出土である。359はB地区のS D01 aから、351・352・370はC地区から、349・350・362はD地区から出土した。347は凹基無茎の石鏃である。全長2.9cm、厚さ0.6cmを測り、重量は2.2gである。石材はサヌカイトである。348・349は凸基無茎の石鏃である。348は全長3.1cm、厚さ0.5cmを測り、重量は2.2g。349は先端部をわずかに欠損する。残存長2.9cm、厚さ0.4cmを測り、重量は1.3gである。石材は348



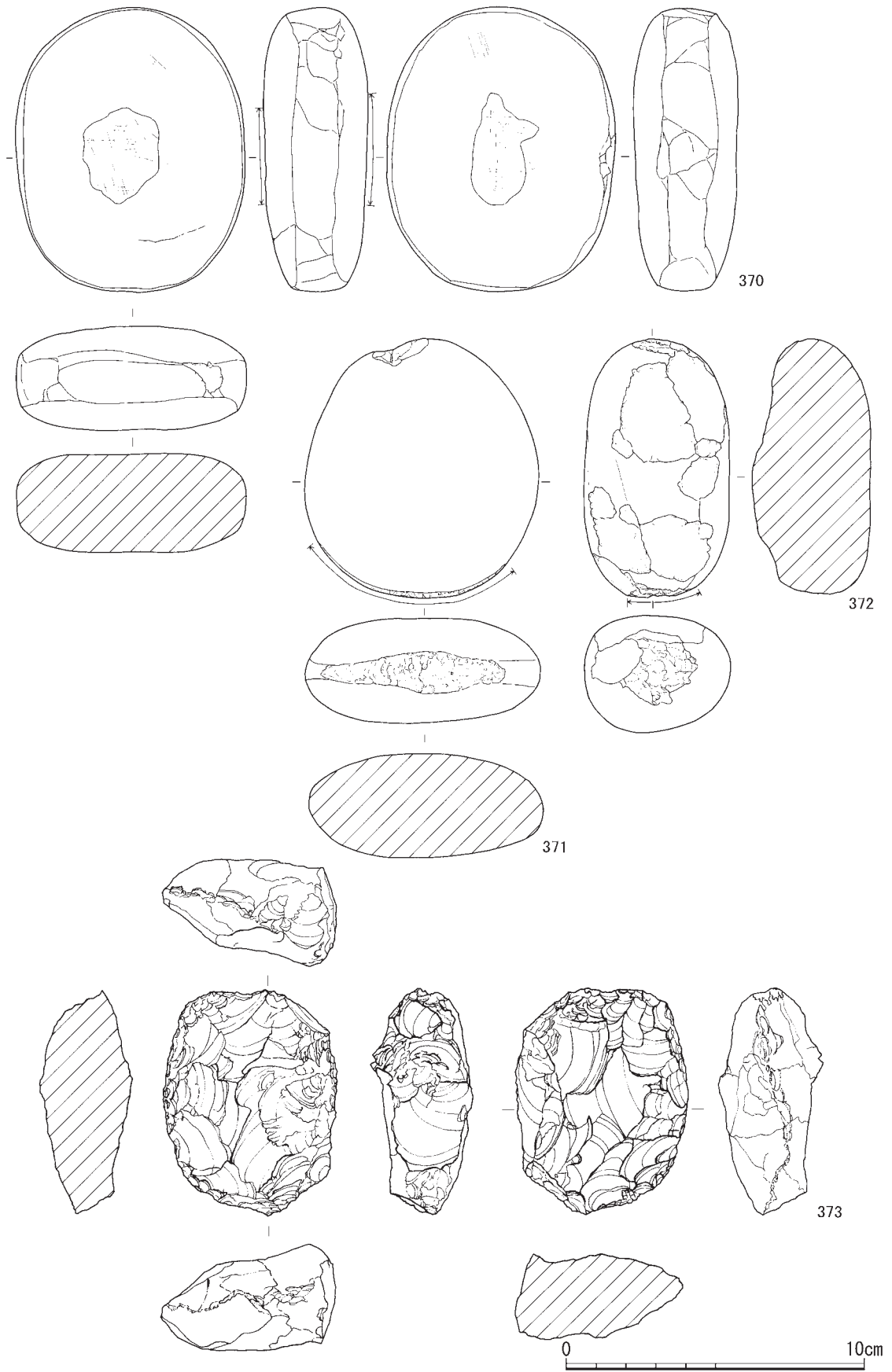
第36図 出土遺物実測図(21) 石製品



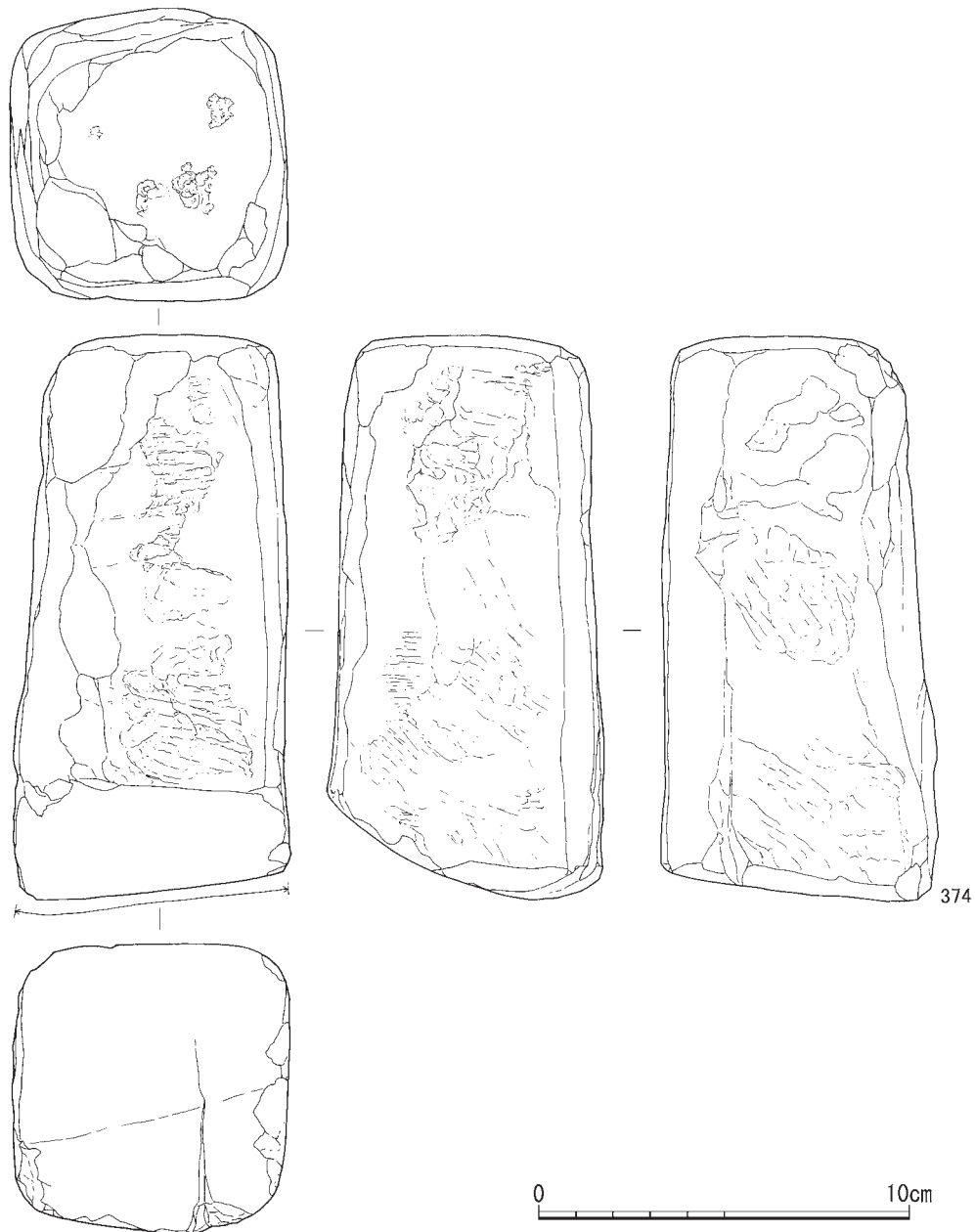
第37図 出土遺物実測図(22) 石製品



第38図 出土遺物実測図(23) 石製品



第39図 出土遺物実測図(24) 石製品



第40図 出土遺物実測図(25) 石製品

が玄武岩、349はチャートである。350は緑色凝灰岩製の管玉である。端部をわずかに欠損するが、残存長2.4cm、径0.65cmを測る。351は滑石製の白玉である。352は蛇紋岩製の勾玉である。両側から穿孔されている。353・354・358は紡錘車である。いずれも滑石製である。353は、頂部径1.4cm、底部径3.7cm、高さ1.4cmを測る。重量は17.9gである。354は、頂部径1.7cm、底部径3.9cm、高さ1.7cmを測る。重量は32.4gである。358は頂部径2.0cm、底部径3.2cm、高さ1.5cmを測る。重量は26.1gである。355は粘板岩製の磨製石剣である。切先を欠損し、残存長11.2cmを測る。刃部から基部まで鏑を有し、基部両側に関を削り込む。このサイズから、短剣又は槍先の可能性もある。356は磨製石斧である。長さ7.2cm、厚さ1.8cm、重量75.2gを測る。357も磨製石斧である。長さ8.1cm、厚さ1.8cm、重量97.2gを測る。359は磨製石斧である。刃部を欠損する。残存長7.2cm、幅5.8cm、

厚さ3.3cmを測る。重量は202.2gである。以上の3点はヒン岩製で、いずれも縄文時代に帰属するであろう。360は砥石である。硅質頁岩製である。361は打製石剣である。先端部のみの出土である。片面のみに鑿が確認できる。残存長は6.3cm、幅3.5cm、厚さ0.9cmを測る。石材は粘板岩である。362～365は石錘である。362は上端部及び胴部上半に切り込みを有する。重量は400gを測る。山陰東部から丹後地域に特有の石錘である。363は両側から穿孔されており、裏面では場所を違えて複数回の穿孔を試みた痕跡が確認できる。穿孔から上端に向け切り込みを有する。重量は209.7gである。364・365は扁平な楕円形を呈する。上下両端に切り目を有する。重量は364が46g、365は43.8gである。362・363は安山岩製、364・365は砂岩製である。縄文時代に属すると考えられる。366は砥石である。全面において使用痕が確認できる。硅質頁岩製である。367・370は磨石である。367は一部を欠損する。直径9.0cm前後の円形を呈し、厚みは5.6cmを測る。重量は700gである。全周に擦痕が確認できる。安山岩製である。370の平面形は扁平な楕円形を呈し、長軸9.6cm、短軸7.7cm、厚さ3.5cmを測る。重量は407gである。厚みも薄く、堅緻な花崗岩の全周が平滑になるまで使い込まれていることから、石器等の調整に用いられていた可能性が考えられる。368・369・371・372は敲石である。368はやや扁平な球形を呈するが、上部を欠損する。重量は585gである。安山岩製である。369は、截頭形の円錐状を呈するが、端部を欠損する。重量は710gである。花崗岩製である。371は扁平な楕円形を呈し、上下端部に敲打痕が認められる。重量は360gである。ヒン岩製である。372は俵型を呈する。重量は245gである。上下両端面に敲打痕が認められ、胴部は打撃によると考えられる剝離痕が認められる。砂岩製である。374は石杵である。全長17.5cm、厚さ7.5cmを測る。重量は1450gである。砂岩製である。(奈良康正)

373は厚みのある礫素材の石核、または表裏面を入念に加工した両面調整石器である。長さ7.6cm、幅5.8cm、厚さ3.5cm、重さ164.3gを測る。石材は玉髓あるいは鉄石英である。相対する縁辺部の稜線が打撃により潰れ、それとともに表裏面に連続する剝離面及び打裂痕が形成されている。これは両極技法として楔形石器にみられる形態と使用痕である。強烈な打撃により縁辺部に潰れ痕、剝離痕が、そして片側側面に特徴的な裁断面が形成されている。なお、本素材は所属時期を考えると、旧石器時代の石核とするには、縦長の剝片剝離がみられないし、楔形石器は旧石器時代には一般的なものとはいえない。従って縁辺部の剝離形状からみて、縄文時代における石器製作技法が駆使されたようで、石鏃などの小型石器の素材を得る目的で調整・成形されたものと理解しておきたい。(黒坪一樹)

#### 4. まとめ

今回の調査では、A・B地区で弥生時代後期の溝1条と古墳時代の土坑、土石流の痕跡等を、C・D地区では古墳時代の良好な遺物包含層を検出した。また、D地区では中世の火葬墓を検出した。

A・B地区で検出した溝S D01bは、南側を土石流である溝S D01aにより切られており、全容を明らかにすることはできなかった。しかし、北半は良好に残存しており、その地点からは弥生時代後期後半を中心とする良好な資料を得ることができた。遺物は、黒色を呈するシルト層の

中に埋没しており、摩滅もほとんどみられず、完形率も比較的に高いものであった。その出土状況から、北岸の淀んだ流れに土器を投棄していた様子を窺い知ることができ、当該期の集落が今回の調査範囲の東側に広がる丘陵裾部に展開する可能性が極めて高いと言えるだろう。これまで遺跡の内容に関しては詳しいことが不明で、散布地とされていた松山遺跡の性格を大きく変更する成果と言えるであろう。また、溝S D01aから出土した遺物群は、縄文時代から中世に到るまでの広い時期幅を有することから、当地において、縄文時代から現代に到るまで、断続的に人々の生活が営まれていたことが判明したのみならず、焼け歪んだ須恵器が含まれていることから、須恵器窯等の生産遺跡の存在をも窺い知ることができる貴重な成果である。D地区を中心にC地区の北端部にまで及ぶ遺物包含層は、古墳時代前期～中期にかけての遺物を中心とする。その内容は小型丸底壺、ミニチュア土器、高杯等の器種が数量的に圧倒し、赤色顔料を塗布したもの、2次的に火を受けたものも少なからず確認される。このことから、極めて祭祀的性格の濃い遺物群であると評価できる。これらの遺物は大きく破損することなく、完形率が比較的高いことから、埋没に際し、大きく距離を動いたとは考えられない。西側で実施された京都府教育委員会並びに京丹後市教育委員会の調査では、古墳時代前期後半から中期前半の竪穴式住居跡が検出されている。この集落の成員により、東側に存在する丘陵裾部において、何らかの祭祀を実施した場が存在することが想定される。また、具体的な遺構に伴ってはいないが、緑釉椀、龍泉窯産青磁、長沙窯産青磁等が出土しており、京丹後市教育委員会が実施した発掘調査においても、円面硯が出土している<sup>(注7)</sup>。古代ないし中世段階に、この種の遺物が持ち込まれる施設の存在が想起される。

(奈良康正)

- 注1 福島孝行「府営農業農村整備事業関係遺跡平成20・21年度発掘調査報告Ⅱ平成21年度の調査〔1〕松山遺跡第3次・マンジョウ寺遺跡」(『京都府埋蔵文化財調査報告書(平成21年度)』京都府教育委員会)2010
- 注2 安藤信策「丹後の祭祀遺跡」(『丹後郷土資料館報』第6号 京都府立丹後郷土資料館)1985
- 注3 石尾政信「沖田遺跡第2次」(『京都府遺跡調査概報』第99冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)2001
- 注4 橋本勝行「沖田(稲荷岡)遺跡発掘調査概要」(『大宮町文化財調査報告』第16集 大宮町教育委員会)1999
- 注5 細川康晴「府営農業基盤整備事業関係遺跡平成5年度発掘調査概要〔3〕延利遺跡」(『埋蔵文化財調査概報(1994)』京都府教育委員会)1995
- 注6 石崎善久「『青野型甕』について」(『京都府埋蔵文化財論集』第3集 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)1996
- 注7 京丹後市教育委員会「松山遺跡第6次調査関係者説明会資料」2010.8.31



# 圖 版



(1) A・B地区全景(北東から)



(2) A・B地区全景(上が南東)



(1) C・D地区全景(北西から)



(2) C・D地区全景(上が北西)



(1) A地区溝S D01完掘状況(北西から)



(2) A地区溝S D01完掘状況(東から)



(1) A地区溝S D01自然木出土状況  
(東から)



(2) A地区土坑S X02完掘状況  
(南から)



(3) A地区溝S D03完掘状況  
(北東から)



(1) A地区溝S D03南壁土層断面  
(北東から)



(2) A地区土坑S K15遺物出土状況  
(北から)



(3) A地区土坑S K15完掘状況  
(北東から)



(1) A地区ピットS P16遺物  
出土状況(南西から)



(2) A地区ピットS P16完掘状況  
(北西から)



(3) A地区南西部検出遺構完掘状況  
(南西から)



(1) B地区東壁土層断面(北西から)



(2) B地区溝S D01a土層断面  
(北西から)



(3) B地区溝S D01b土層断面  
(北西から)





(1) B地区土坑S X07・S K08  
完掘状況(北東から)



(2) B地区土坑S X07・S K08  
完掘状況(北西から)



(3) B地区土坑S K11完掘状況  
(北西から)



(1) C地区全景(北東から)



(2) C地区全景(南西から)



(3) C地区南壁土層断面(北東から)



(1) C地区溝SD03完掘状況  
(北西から)



(2) D地区全景(北東から)



(3) D地区全景(南西から)



(1) D地区南壁土層断面(北東から)



(2) D地区土坑S K 01完掘状況  
(南西から)



(3) D地区土坑S K 01遺物出土状況  
(東から)



(1) D地区上層遺構完掘状況  
(北西から)

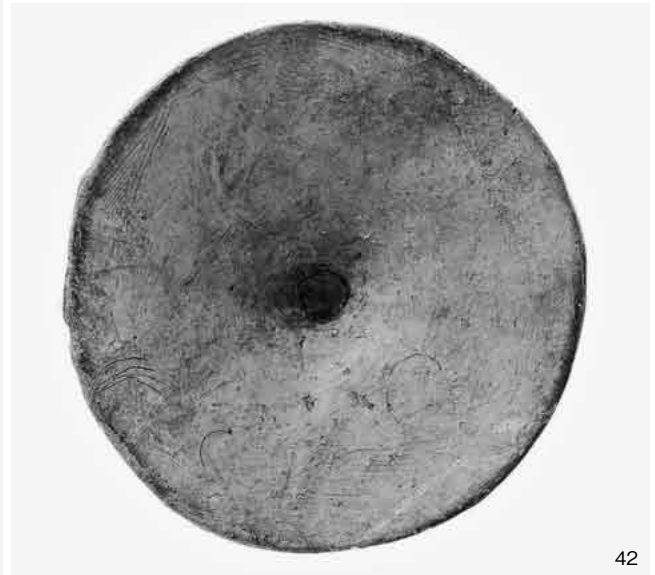
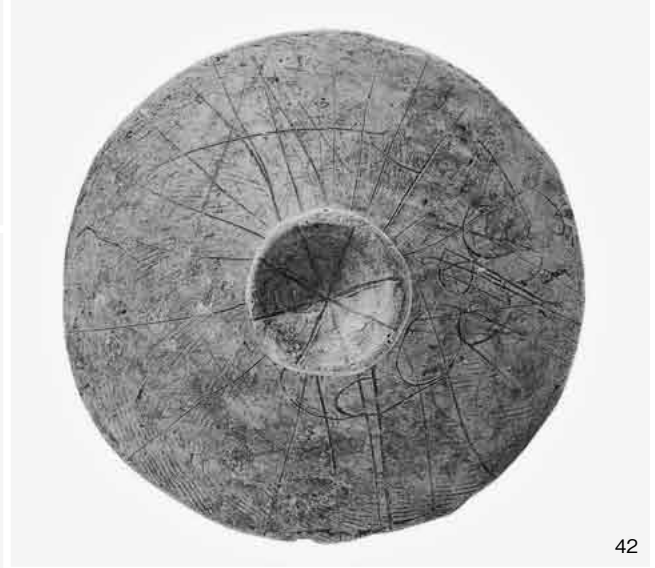


(2) D地区34号支線排水路地点全景  
(北西から)



(3) D地区34号支線排水路地点  
南壁土層断面(北東から)













151



217



154



218



212



219



216



228

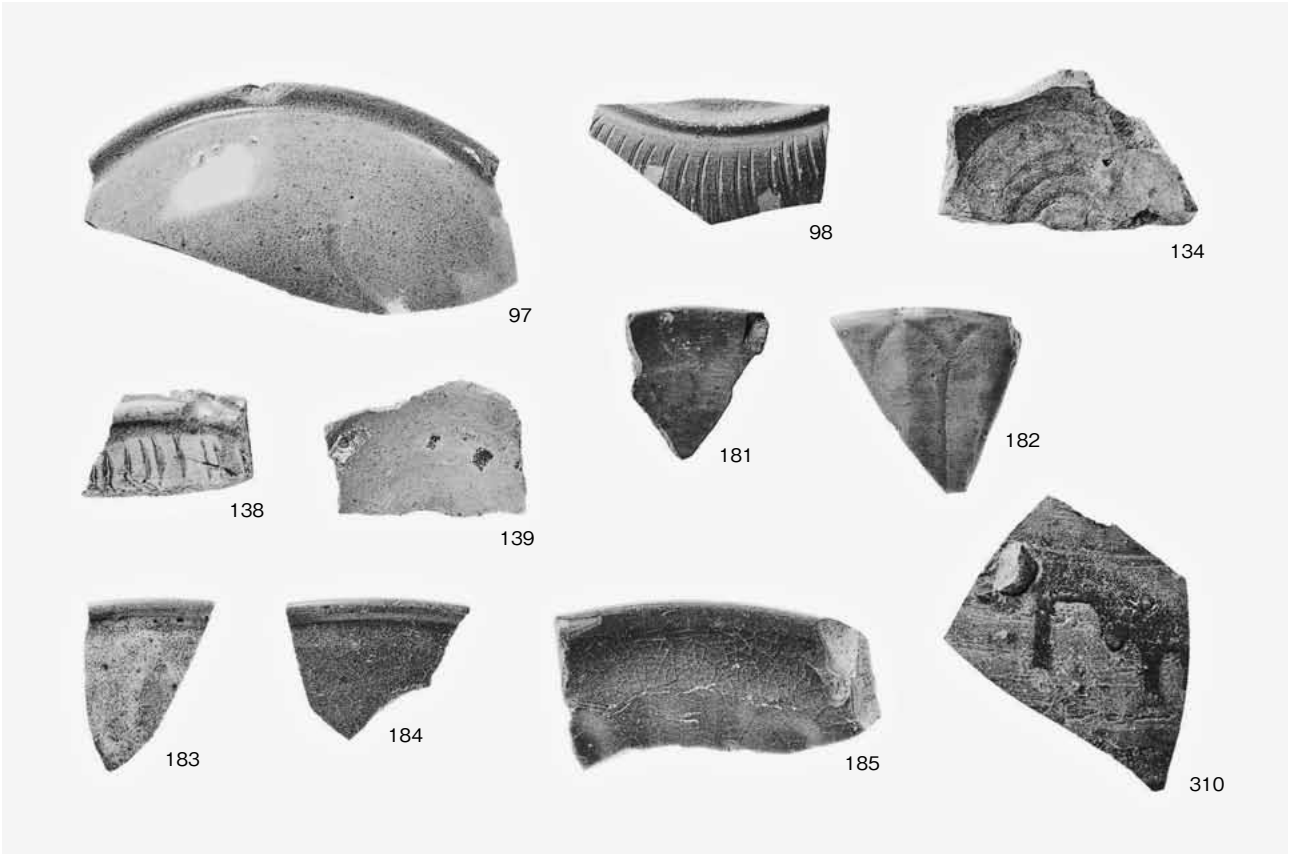




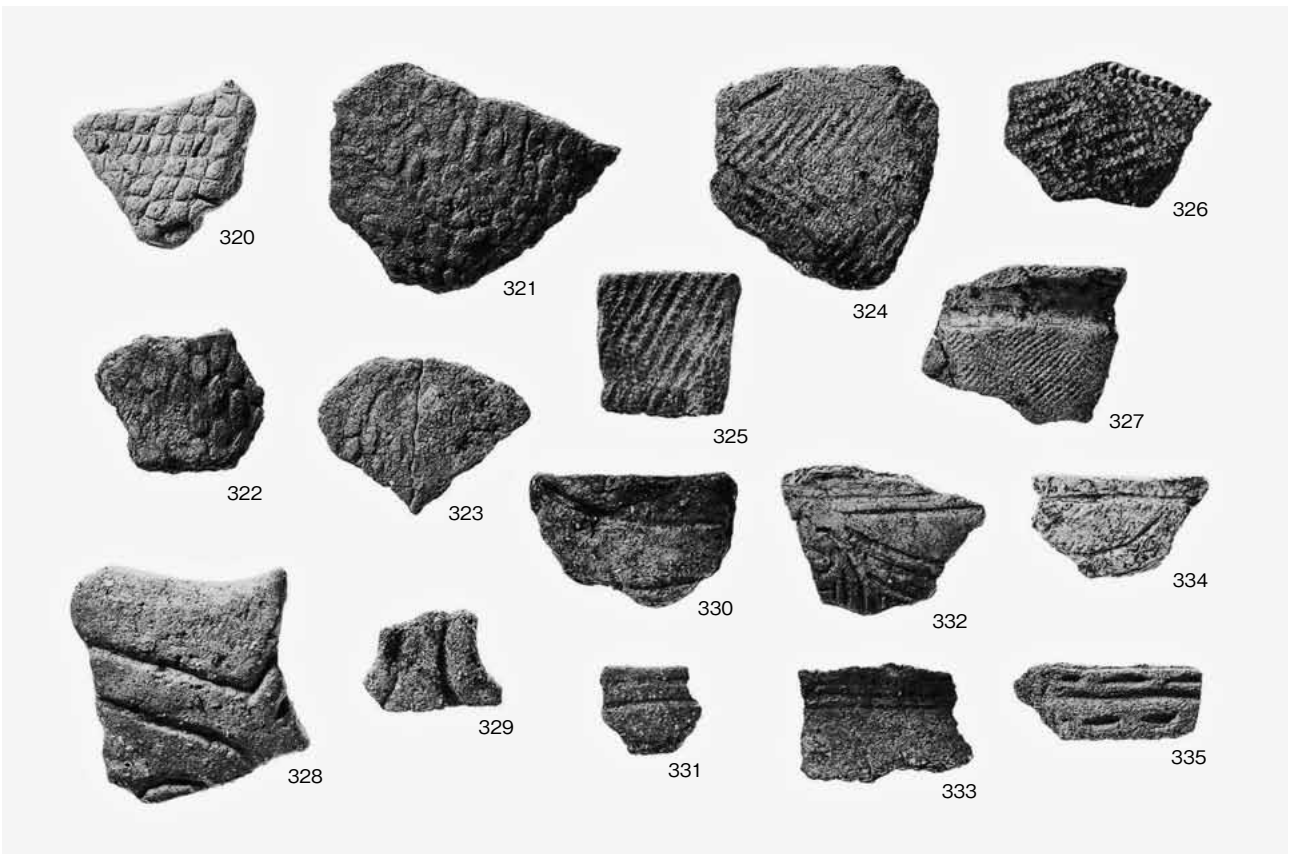
(1) 出土遺物 7



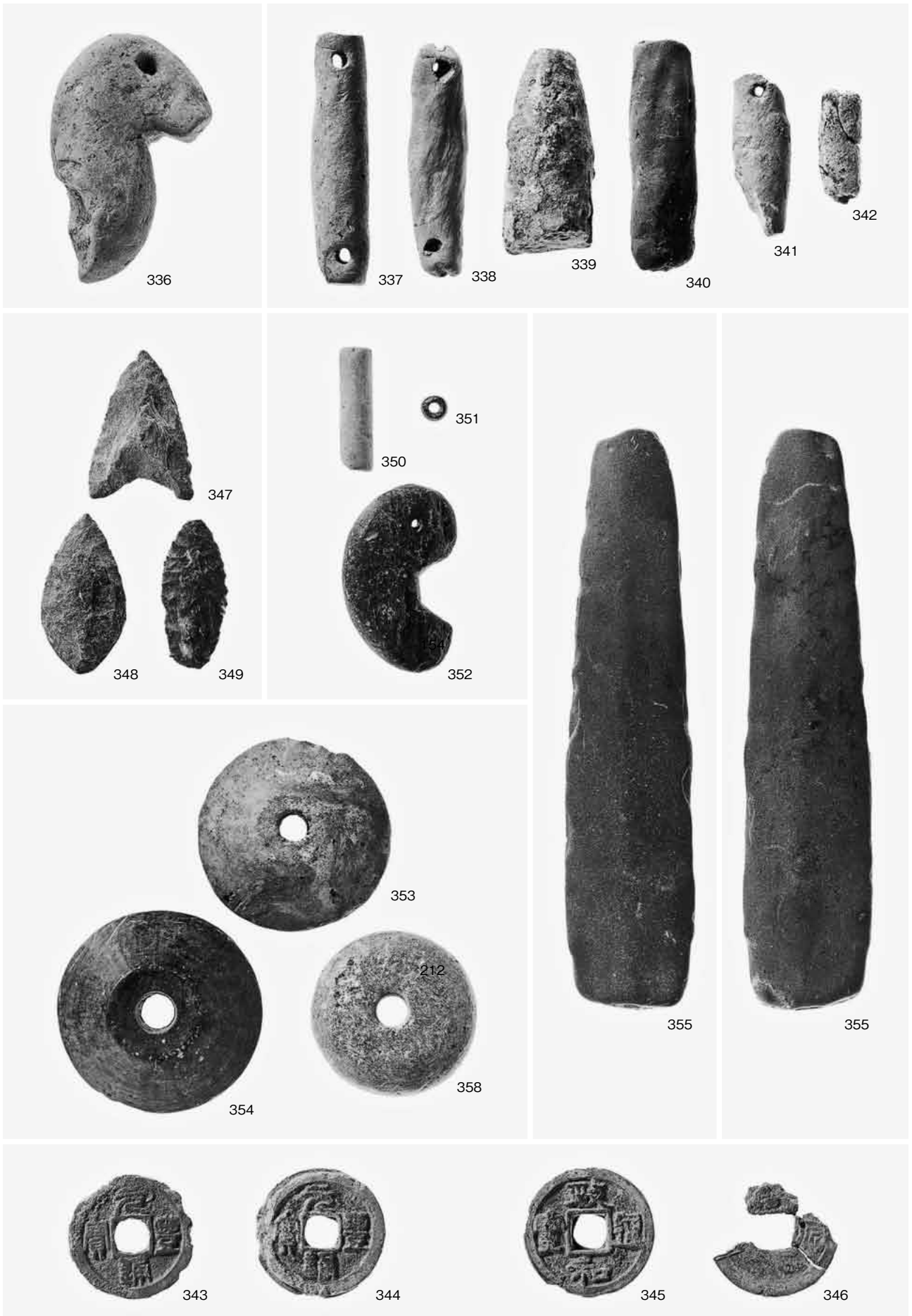
(2) 出土遺物 8

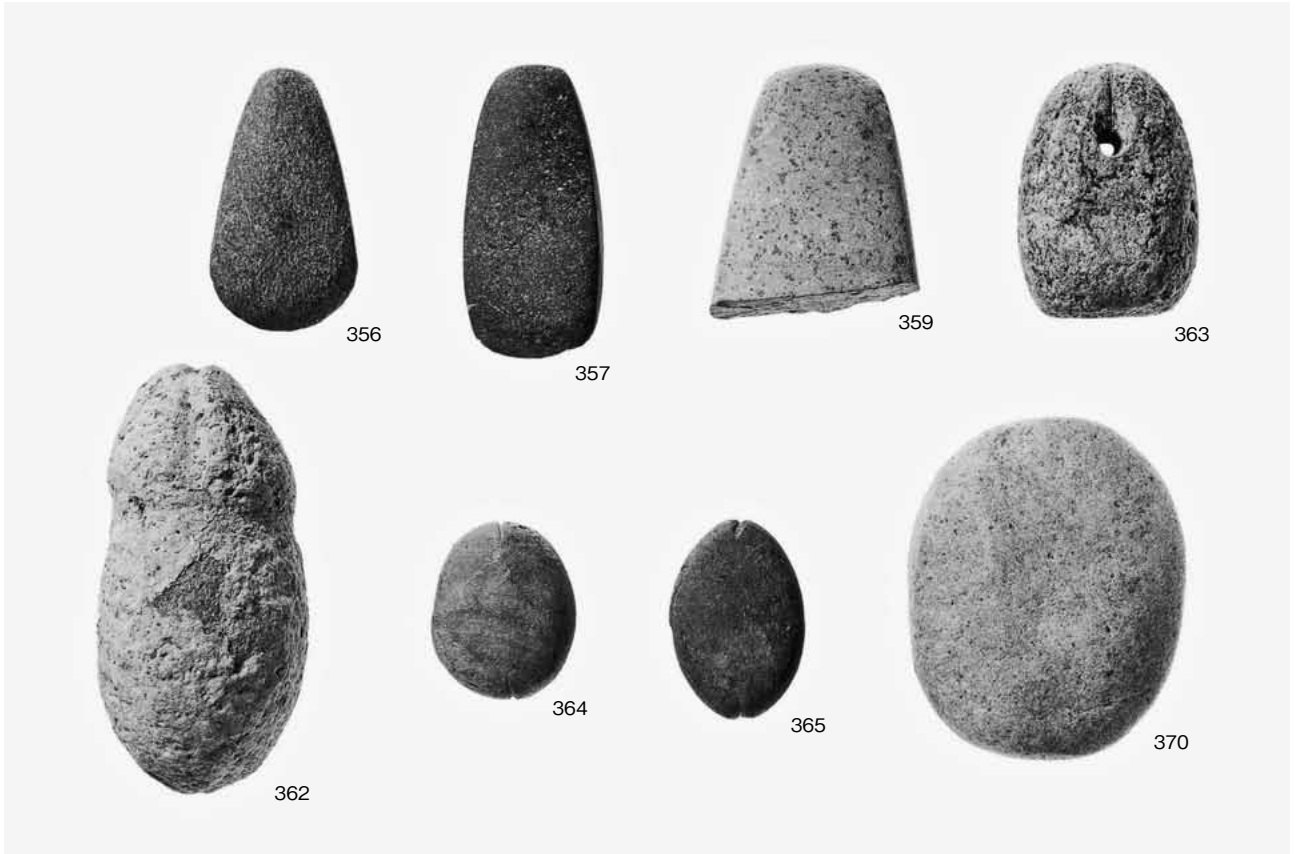


(1) 出土遺物 9

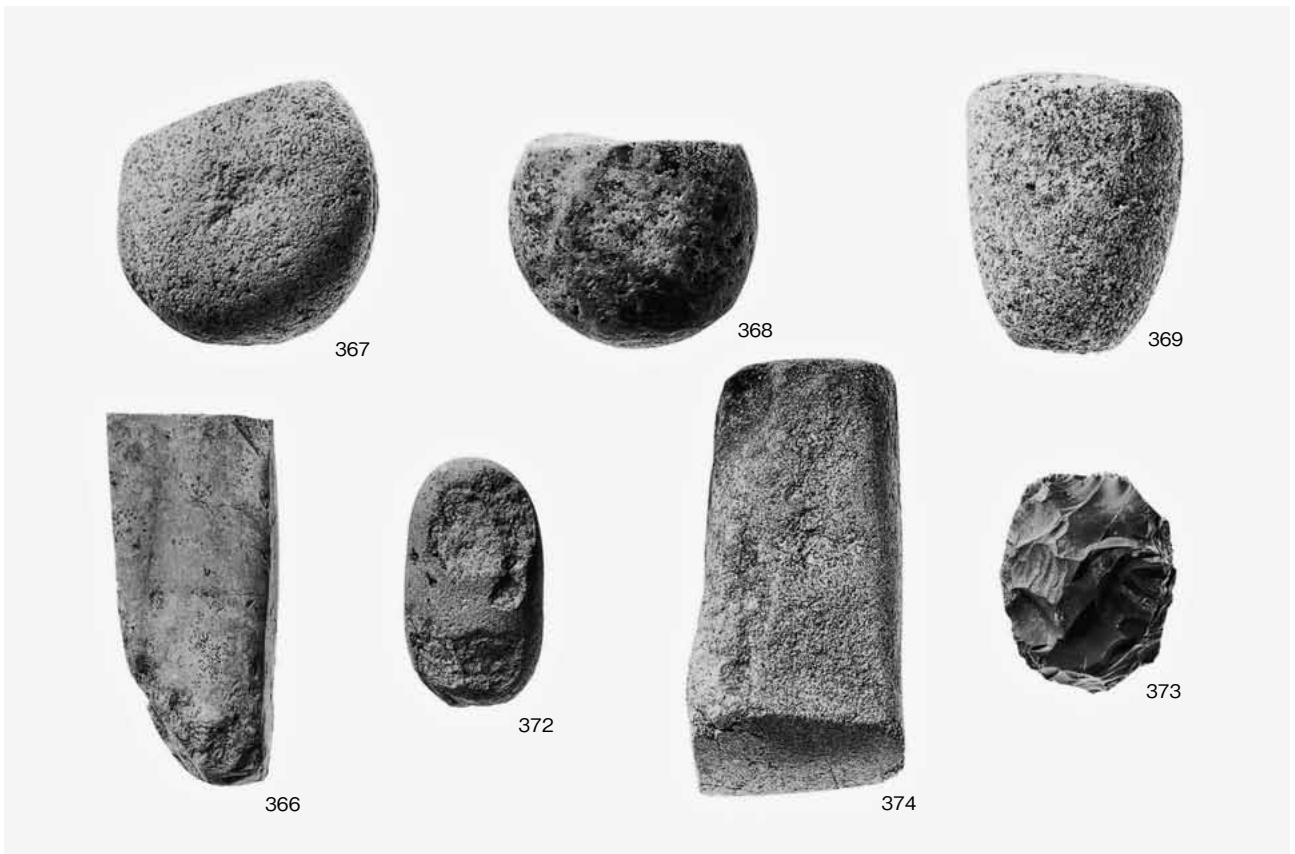


(2) 出土遺物 10





(1) 出土遺物12



(2) 出土遺物13